

韓国1980年5月

光州民衆の決起

共同編集 「世界から」編集委員会・日韓調査運動

発行 アジア太平洋資料センター



光州の激動の一〇日間を新聞とテレビで追うことしかできなかった私たちは、この重大な事態の展開を再構成し、その意味を知ろうと六月はじめ三日間の緊急合宿を行なった。私たちとは、アジア太平洋資料センター(PARC)で雑誌『世界から』、英文雑誌『AMP』の編集にたずさわるスタッフ、「市民の手で日韓ゆ着をただす調査運動」(日韓調査運動)のメンバーである。韓国人の若い学究、李永信も参加した。

私たちは入手できる資料をすべて持ちより、批判的に検討するなかで、日本のマスコミの光州報道がひどく歪んだものであることを今さらながらに発見した。そして私たちの手で光州とそれに関する道筋を組み立てなおす作業が必要だと感じた。そのとりあえずの成果が、この小冊子である。当然ながら事実や評価の誤りがないと主張するつもりはない。ただ私たちとしては集団討論を通じて闘いの真実に到達するため全力を尽したつもりである。読者の御批判をまちたい。

ここに含まれている文章は執筆者名のあるものも含めて、基本的には集団討論をふまえて執筆したものである。主要執筆者は、第一部Ⅱ加地永都子、第二部Ⅱ佐藤達也、第三部Ⅱ岡田理、である。突貫工事のような作業だったが、それができたのは多くの方々の熱心な協力のたまものである。特に韓国問題にたずさわるキリスト教関係の方々には深く感謝したい。また、レイアウトを一手にひきうけて下さったTさんをはじめ、特にお名前をあげないが、協力していただいたすべての方々に深く感謝したい。

一九八〇年七月

編集部

■外国新聞・雑誌略号

- AWSJ Ⅱ アジア・ウォール・ストリート・ジャーナル
- FEER Ⅱ ファー・イースタン・エコノミック・レビュー
- LAT Ⅱ ロサンゼルス・タイムズ
- NYT Ⅱ ニューヨーク・タイムズ
- WP Ⅱ ワシントン・ポスト

韓国 一九八〇年五月 光州民衆の決起 目次

われわれは光州民衆とともに生き ともに歩むのか

第一部 朴暗殺から五月の対決へ

——すべての民衆が足並みをそろえる

第二部 高まる学生運動と軍のクーデター

——ソウルから光州へ

第三部 ドキュメント・光州 五月一八日〜二七日

血と怒りの街頭から自由光州が起ち上がる

資料 韓国民衆の声

韓国からの声(1)〜(5)

民主守護、全南道民総決起文

同胞に捧げる文―五月三〇日のソウル自殺学生生のピラ

ソウル大学民主化促進大会決議

民主化のための教授宣言文

民主化促進国民宣言(国民連合声明)

農民宣言

知識人一三四人時局宣言

コラム

光州に呼応するわれわれの闘いの質と量

韓国経済ついに破綻へ

光州事態のなかで日本政府はどこにいたか

“これは人権問題ではない、米国の利益の問題だ” 光州決起とカーター政権

全斗煥の光州鎮圧作戦

死者の数をめぐって

2

12

22

22

22

35

35

83

86

88

90

91

91

92

93

93

11

21

32

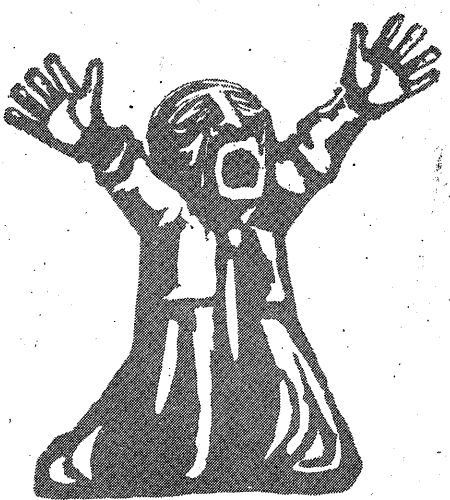
33

80

82

カッター●富山妙子氏提供 スライド「一九八〇年五月・光州―倒れた者への祈禱」より
写真●WPP、P・クロメ氏提供

われわれは 光州民衆とともに生き ともに歩むのか 武藤一羊



一九八〇年五月、光州八〇万民衆の決起は東アジアの一角から、天に沖する火柱を吹きあげ、あらゆるシニズムをこっばみしんに吹きとばしつ、「民衆こそは歴史を創る」という古典的真理を、全世界に向かってあかあかと照らした。

口火を切ったのは学生たちだった。だが五月一日、学生とともに戒厳令撤廃をもとめて起ち上がった数万の市民に、着剣した三〇〇〇の空挺部隊が投入され、人びとの眼前で無差別な刺殺、殴打、乱射、暴行が開始され、光州の美しい街路が悲鳴と流血で充滿しはじめたとき、そこに立ちはだかり、はじめは投石と棒きれで、しだいに鉄パイプやタクシーやバスを武器に、この国家を背にした職業的殺人者集団に立ちむかっていたのは、無数の無名の市民たちであった。

前日深夜、ソウルで非常戒厳令を布告した全斗煥は、この日、治安維持用にはなく、外敵との戦争用に訓練された空挺部隊の特戦団を光州の平和な民衆のどまんかに送りこむことによって、自国民にたいして内戦をしかけたのである。空挺部隊は人間に話しかける言葉を持たなかった。全南大学の

学生集會に姿をあらわした彼らは一片の警告もなく、一言も発せず、ただ壇上に殺到すると、学生リーダーを刺殺した。殺人と物理的暴行だけが彼らの理解しうる言語だった。

このような無意味な武装集団の全面的攻撃が、光州市民の心にとどむような恐怖を生み出したかは想像にかたくない。だが民衆は、一人ひとり、恐怖を上廻る心底からの人間的怒りにうながされ、街頭に押し出すのである。光州からのある手紙は戒厳軍の行為を「悪魔の所業」とよぶ。何十万の光州市民はこの悪魔の力を知りながら恐怖に負けてそれを許すことをしなかった。それはもはや個人的な怒りではなかった。正義というものがあるなら、それは正義の怒りであった。しかし悪魔を許さぬとは死を意味するかもしれぬ選択だった。死はきわめて身近にあった。光州からの報告は、刻々数をます群衆が、ベッバー・フォックの黄色い煙の立ちこめるなかを、「死のうゝわれわれを殺せえ」と唱和しながら進んでいったと報じている。

市民の眼前で市民が殺され、おびただしい血が街路に流れた。数百人が殺された。しかし街路に押し出す市民たちの数はひたひたと増えていった。一進一退がくりかえされ、その力はしだいに戒厳軍と警官隊を圧倒していった。市民たちは部分的に武装していった。この血みどろの街頭戦のなかで戒

厳軍は五月二日、突如として、自分たちこそが光州民衆の包囲下にあることを発見するのである。光州市内各所での民衆デモはしだいに全羅道の道庁をめぐる対峙線に力を集めてゆく。警官隊は疲労でバタバタと倒れる。この警官隊を空挺部隊は人質のように前面に立て最後の拠点道庁を守ろうとする。民衆の数はふえつづけデモ隊の圧力で、もはや阻止線をささえることができない。このときデモ隊は断乎として要求するのである——「警官はわきにどけ！ われわれは軍隊と闘うのだ！ われわれを妨害するな！」と。闘いのどの局面をとっても群衆はいかなる意味でも暴徒ではなかった。群衆は許すことのできぬ敵をはっきり見分けていた。そして地元出身者の多い警察の無力化をみぬいていた。戒厳権力はすでにこの瞬間光州において敗北し、麻痺し、権力は光州民衆自身の手に移りつつあった。この日全羅道道庁は民衆の手に落ち、権力機関の大部分はヘリコプターで逃亡した。こうしてこれから六日間にわたる自由光州が出現するのである。そして戒厳政府権力の及ばぬこの自由光州において、市民は生き生きと誇り高く暮らし、自らの生命と自由と尊厳を守るため武装し、社会の秩序を自ら管理する。

これらすべてをやりとげたのは光州の民衆であった。数十万の人びと——事実上光州のすべての市民——一人ひとりが起ち上がった。ある年輩の女性は目前で乱打され倒れる見知らぬ若者を、自分も乱打されながら薬局に引きずっていき、そこで失神した。ある少年は倒れた市民を衝突の現場から病院に運ぶ危険な作業をつづけ、七人目を運んだあと自分が死体になってはこびこまれた。企業主は吹き出しをし、自動車を自発的に提供した……。

光州民衆の決起を構成するこれら無数の自発的行為——ひとつひとつに命のかかっている行為——はすべて無名の市民——学生、労働者、失業者、商店主、主婦、高校生、タクシー運転手、農民——のものである。これら無名の人びとが、一人ひとり、そして同時に巨大な集団として、起ち上がった。そして同じ人びとがただ抗議し闘っただけではなく、精鋭正規軍を敗北させ、彼ら自身の秩序である自由光州を実現し、維持し、みごとに運営したのである。

これは、驚嘆すべきことであると同時に当り前のことでもあった。当り前というのは、人間なら誰でも眼の前で頭を割られた人を助けようとするはず

だからである。そして民衆がこの当り前と見える行為をえらびとったことによつて驚くべき、巨大な民衆の力が解放されたのである。おびただしい、痛ましい犠牲と軍事力による全土の重苦しい制圧にもかかわらず、この当り前のことと驚くべきこととの結びつきのなかに韓国の希望が生まれたのである。

人間として当り前のことであるからこそ、光州決起の意味はわれわれの心をとらえ、戒厳政府の蛮行は、われわれの怒りをかき立てる。さしあたり政治的立場やイデオロギーとは関係なく、光州はどちらの立場に立つかをわれわれにせまる——光州民衆とともに、同じ側で生きるのか、それとも彼らを犬のように殺す側に立つのかを。五月二七日、光州から帰国した大阪の宮川正則さんが、大阪空港でインタビューをうけたテレビの場面を思い出す。大阪の会社員で、光州の進出工場に向向していたという宮川さんは、会社の前で一三人の若者が惨殺されるのを目撃した。足をうたれて倒れているところへ兵隊がかけよってピストルで頭にとどめをさす。「あんなむごいことありませんか、もうめっちゃめっちゃですわ」と興奮して語る宮川さんを、記者の懐疑的な質問がささぎる。「バスがとられたとかいふことですが」宮川さんはいら立つ。「とられたとか何かと言うより、みんなだんだん経営者が供出するんですわ。吹き出して、誰でもかたでもくぼるんですわ。あんなむごいこと、あんなこと黙って見ていられますか」という調子である（録音がないので記憶をもとに書いている）。一番大切なことが伝わらない宮川さんのこのいら立ちのところに最も基本的な問題がかくされている。「光州事態」のただなかで宮川さんは人間の心を持ちつづけた。そのことだけで彼は民衆の正しさを当り前のこととして受け入れた。彼はその気持ちに記者たちに共有されぬことにいら立つのである。宮川さんは革新派ではないだろう。まして革命派ではないにちがいない。だが民衆の闘いの最も本質的なものを彼はつかんだ。

この誰にでもわかる光州の真実を複雑にし、ゆがめる試みが、強圧的なものから、隠微なものまで横行している。

もちろん国家を篡奪した全斗煥グループはこの真実の持つ爆発力の恐ろしさを誰よりもよく知っている。朴体制下でも例を見なかったと言われる完全

な報道管制の下で全斗煥は、光州事態を「不純分子」や「北傀のスパイ」の煽動の結果としておこった暴動に仕立てあげた。しかしこのために必要な事実の歪曲はあまり粗雑すぎたというよりもむしろこたえられるとは思われない。たとえば軍が新聞編集者をつめてデモ報道のガイドラインなるものを与えたが、このなかには学生が「金日成は誤解するな」というスローガンを掲げた事実（掲載）不可」とか「学生が交通整理をおこなった」という報道は不可」とか、中国の「鄧小平が日本記者団に語った言葉（北はけっして南を攻めないと保障する）は不可」などという言葉がある。これらのひとつでも崩壊すれば、全政権の光州事態解釈が崩壊するばかりか、外国から知らされたとする「北の軍隊の異常な動き」——米國はただちにそれを否定した——を唯一の根拠にクーデターをおこした現政権自体の基礎もまた崩壊するのである。全斗煥とその一派はこのかほそいデマゴギーに自己の生命を托したのである。

だがもっと隠微な形もある。日本のジャーナリストがしばしば引き合いに出す全羅道対慶尚道の地域格差という説明である。全斗煥政権の新聞指導要綱にある「複雑な地域的、歴史的背景」を強調せよという指導にこれは符合する。全羅道は歴史的に差別されてきたから、そのコンプレックスから暴動をおこしたという含みである。光州と全羅道が、日本帝國主義支配の時代から輝かしい民衆闘争の伝統を持っていることは強調されなければならないし、朴正熙時代から「慶尚道閥」が支配機構を牛耳っていることも事実である。だが光州決起を、「地域感情」で説明するとはどういうことか。それは全斗煥がほかならぬ光州民衆にたいしてしかけた無差別の軍事攻撃を無視するか、軽視することにほかならない。空挺部隊が釜山に乱入していれば釜山でも同じことが起っていたであろう。ソウルであればどえらい、致命的反撃がソウル民衆によって加えられていたであろう。「地域感情」によってしたり顔の説明を加えることの裏には、光州民衆の闘いの本質——普遍の本質——をおしかくす、あるいは認めることを回避する、隠微な心が働いているのである。かつてKCIAは、カトリックの革命詩人金芝河を共産主義に仕立てあげるため、詩人を拷問的狀況でもうろうとさせたりで、「告白」なる文書を口述し書きとらせた。KCIAはそのなかに、「自分は結核のた

め病弱で劣等感になやみ、その結果共産主義者になった」という趣旨の一句を押しこんだ。光州八〇万民衆の闘いを地域感情や地域コンプレックスで説明することは、金芝河の革命思想を劣等感で説明しようとするのと同じおろかだ。真実はすべてゆがんで映る。自分のゆがみを他人に投影するのである。五月二〇日に光州まで飛びながら、「学生たちはみんな酒を飲んでいられしく、顔は青白く、目がすわっている。いいような恐怖感が背すじを走る」（「サンデー毎日」6・8）などという笑うべき観察を持ち帰るジャーナリストもいるのである。

だがこれらの真実をゆがめ、逆立ちさせる試みは成功しないだろう。三七〇〇万の韓国民衆にとって「不純分子」や「スパイ」の説はあまりにも使えない。見えずいている。何よりどんな強圧をもってしても八〇万の光州の市民の口を封じることができない。ソウルからの情報によれば、極度の警戒状態にもかかわらず、ソウルではつきつきに地下出版が出され、戒嚴軍による民衆殺戮行為と闘いのてんまつが口から口へ伝わりはじめているという。光州民衆の血の制圧によって韓国民衆の闘いは終わったのではなく、始まったのである——ただし新しい、よりきびしい、より高い水準において。

2

光州決起を頂点とする韓国民衆の五月の闘争は、この國の民主化と自由のための闘いをあきらかに新しい段階に押し上げた。昨年一月、韓國の民主化勢力は朴正熙殺害を「維新体制の中間決算」とよんだ。いま光州決起によって始まったのは本決算あるいは総決算の時代なのである。日本のジャーナリズムは十日間の興奮のあと、ぱたりと報道をやめ、それによって光州を「隣國のエピソード」というとじ込みに投げ込んだ。だが韓國は、そして日本はわれわれもまた、もはやあともどりのきかぬ仕方だ。「光州事態」のなかに踏みこんだのである。

事実を見よう。一〇〇〇名をはるかに越えたと推算される民衆側の死亡者の確認は教会や有志の手で途方もない困難と危険のなかで続けられている。数千名が逮捕され、数千名の活動家、学生、労働者、牧師、神父、教授、農

民が地下に潜り、民衆にささえられながら活動をつづけている。活動家の捜索逮捕がつづき、逮捕者のゆくえは知れない。朴時代を上まわる拷問が伝えられている。金大中をはじめとする多数の政治家は逮捕され、ゆくえが知れない。国会は閉鎖され、軍に占領されている。大学は閉鎖され、戦車と完全武装の兵士たちが構内に常駐している。光州市内では戸別の臨検が行なわれ、活動家狩りが進行している。目をつけられた新聞記者はつきつきに逮捕され、新聞社側は社員の逮捕の事実を認めたり報道したりすることも許されない。六月半ば現在、韓國の新聞からは光州の報道は一切消えている。あらゆる集会和団体行動は禁止され、労働者はストライキに訴えることができない。官庁では汚職一掃を名目にして、全斗煥批判派の一掃が進行中である。

一見して、継続する「光州事態」とは、朴正熙時代の最悪の時期——ある意味ではそれよりひどい状況——への復帰であるかにみえる。事態は後へへきもどされ、朴より強力な「朴なき朴体制」が始まったのかのようにみえる。だがはたしてそうだろうか。

絶対ちがう。そもそも「朴なき朴体制」などという「体制」は存在しない。「一度目は悲劇、二度目には茶番」という金言は全斗煥のためにこそとっておかれたのである。

どのように茶番か、いくつかの決算項目をとりだしてみよう。

① 一九六一年のクーデターで朴正熙は高まる民衆の民主化と南北統一への熱意を銃剣と戦車で断ち切ったが、この行為を彼は、とめどなく混乱した政党政治に秩序をもたらす救済者のものと偽装することができた。その背後には、四・一九革命において、国軍が中立をたもち民衆に銃を向けなかったというイメージの支えがあった。これにひきかえ全斗煥ははじめから「乱動軍」として登場した。韓國民衆の心が、朴正熙一八年の圧制を清算し、民主を回復するという希望に煮えたりはじめたそのとき、この民心に正面から挑戦し、社会に混乱と恐怖と絶望を持ちこんだ。民主回復の「政治発展」スケジュールが民衆を引きつけ、金大中がゆくきさきさきで数万から十万人の大衆をあつめているそのとき、国会を軍によって占拠し、国会議員を武装部隊の暴力で追い返し、金大中を逮捕した。いかなる大義名分も、たとえデマゴギーとしてあれ民衆を引きつける力も、全斗煥は持っていない。

② 全斗煥は国軍を光州民衆虐殺に動員することによって、伝説的な国軍の名を地に地におとした。軍は韓國民衆を外敵から守るものではなく、民衆にさしむけられた軍であることを三七〇〇万民衆の前にばくろした。

③ 朴政権一八年の圧政をささえる物質的基礎は、韓國經濟の外資依存型・輸出志向型の高度成長であった。世界資本主義の危機のなかで、この世界市場従属的な經濟が破綻したちよどそのとき、全は権力を篡奪した。年間一〇％をはるかに超える韓國經濟の急成長の時代は終わり、今年第一四半期には經濟は一・七％のマイナス成長を記録し、一方インフレ率は年間四〇％に達している。韓國經濟のカナメであった輸出は鈍化し、國際収支の赤字は六〇億ドルに達した。一方、この國際収支の危機は外國からの借入れの成否に韓國經濟の命運をゆだねさせることになる。だが全の血まみれの独裁は外國の投資をひるませる。全斗煥政権は米・日の政治的な意図を持つ經濟協力を死命を制せられることになる。

④ 朴政権は米・日に安定独裁政権として自分を売りこむことに成功し、經濟成長の前提であった外資を引き入れることができた。全斗煥ははじめから不安定独裁政権として出発しそのことによって米國に不安を与えている。米國の不安は、全斗煥があまりにも露骨に抑圧的独裁をつづければ、第二、第三の光州が、つまり韓國のイラン化がおこるのではないかとということである。日本支配層だけが朴正熙全との運命共同体関係にあるが、その日本においても政権をめぐる情勢は自民黨の圧勝にもかかわらず不安定である。いずれにせよ、全斗煥は、外國の經濟的テコ入れに死命を制せられる立場にいるのに、ほかならぬこの政治的對外關係はきわめて不安定で条件つきである。

⑤ 朴正熙死後の権力内部の暗闘を通じて、とくに一月二日、鄭昇和を内部クーデターによって追放して獲得された全斗煥の権力は、支配層内部にきわめて狭い基盤しか持たない。五月一七日クーデターにさいして彼は金大中ばかりでなく金鐘泌や李厚洛さえも逮捕しなければならなかった。KCIAの内部では、全斗煥によって強行された三三人の高級幹部、一〇〇〇人の中級幹部の追放が強い反感を買っているし、光州決起鎮圧後ただちに開始された「汚職一掃」カンパニアは、人気とり政策というより政敵排除の肅清カンパニアである。さらに全斗煥による國軍の私物化と光州における空挺部隊

の使用は、国軍の権威を汚した行為として、軍首脳部全体の同意をえることはできない。ある韓国人活動家が言ったように、「全は三七〇〇万韓国民衆を敵にまわしたばかりでなく、自分の仲間のあいだにあまりにも多くの敵をつくりすぎた」のである。

⑥ 朴正熙は経済成長を物質的基盤としながら、ある種の政治理念——「韓国的民主主義」「総力安保」「維新体制」などのスローガンと結びつけたナショナルリズム——を打ち出すことができた。これらが、すべて崩壊すべくして崩壊したあと、全斗煥には打ち出すべきいかなる政治理念もない。こうして「朴なき朴体制」とは、全斗煥が朴正熙の偉大さをたたえ、それにあやかろうとつとめればつとめるほど茶番となる。だがこの茶番劇は言葉——大衆を説得しようとする政治の言葉——を完全に欠いている。それは戦車と銃剣とM16と逮捕と拷問と処刑だけによって演じられる深夜のパントマイムである。

朴体制一八年は、歴史のつぼのなかで、このような醜悪な姿に凝縮されたのである。韓国民衆がこの体制を倒すとき、朴体制一八年全体は総決算されるのである。

韓国の民主勢力が朴射殺を「中間決算」と名づけたとき、それは朴が民衆の手で直接に「決算」されず、腹心の手で殺されたことを意味していた。だがすでに知れわたっているように、この仲間割れは、七九年一〇月の釜山・馬山の民衆の決起によって生じたものだった。「民衆の二〇％を殺しても政権は安泰だ」とする朴正熙や車智澈の路線にたいして「暴動」後の釜山・馬山を視察して帰ったKCIA部長金載圭は、この強硬路線が民衆蜂起を誘発し朴体制そのものを滅ぼすことをさとしたのである。こうして一〇月二六日、朴は金載圭の銃弾に倒れるのである。

注目すべきことは全斗煥が、朴正熙が命を失ったその同じ路線の選択のところで、朴・車の路線をあえてひろいあげたという点である。

これは全斗煥にとって不吉な選択である。とくに「あまりにも多くの敵」をつくらせてしまった今となっては。

もう一度「中間決算」が試みられる可能性を排除することはできない。だがかりに二度目の「中間決算」が試みされたとしても、二度目はやはり

て武器をとって闘った当の光州の学生や市民にとってさえ、事態の発展はまったく予期されぬ意外なことだったにちがいない。光州におこったのは——民衆がおこしたのは——計画的武装蜂起ではまったくなかった。人間としてやむにやまれぬ行動が武器をとることに直結したのである。この結びつきをつくりだしたのは全斗煥一派だった。そして全一派はひきつづく強圧体制によってこの「光州事態」を日常化しているのである。

光州で六日間のあいだ実現されたのは民主主義であった。だがそれは、それまでの「政治発展」のスケジュール——新憲法の制定、大統領選挙、自由な政党政治下の国会運営——として考えられていた民主化とは本質的にちがうものだった。民衆は抵抗し、武装し、正規軍を後退させ、権力機関を麻痺、撤収させ、全市をみずからの直接管理下においた。そのもとで民主化は韓国においてはじめて、完全に実現されたのである。

これは言葉の真の意味において革命的であり、しかもこの革命は民主革命である。四・一九の学生・市民決起は李承晩独裁を打倒したが、それは政権を李承晩から既製政治家の手にわたすにとどまった。軍も権力機関も手つかずだった。光州でおこったことはこれとはまったくちがっていた。光州は、おそらく意図することなく、民主化闘争のためにまったく新しい展望をひらいたのである。

何よりもこのことが、「総決算」にむかう民主勢力、民衆の側に、大きい、輝かしい、そして重い黒字として記録されている。光州以前と以後を区別する新しい経験と新しい展望は、ほぼ全面的に地下に押しこめられた韓国の民主運動のなかで、いま熟考され、咀嚼され、議論されつつあることをわれわれは疑わない。それはやがて新しい方針と行動に練りあげられてゆくであろう。もとよりこの作業は韓国の闘う人びとのみがなしていることであり、われわれが口を出すべきことではない。ただわれわれが知っているのは、韓国の闘う人びとは、朴体制下十数年の闘いのなから、光州の血と希望の経験を生かしてゆく力量をすでにきざきざあげているということである。このことを示すいくつかの点をあげてみよう。

① 五月闘争にいたる過程で、韓国の学生運動は、そのすばらしい政治的成熟を裏証した。それはとくに、学生大衆とともに歩む、人民大衆とともに

茶番であろう。これは基本政策、韓国社会と韓国政治の根本的方向にかかわるからである。

どのような將軍、政治家、官僚が権力の座にすわろうと、もし彼らが、「政治発展」のスローガンの下に朴政治の基本を保存しようとするれば、遅かれ早かれ、民衆との直接的対決を避けることはできない。つまり総決算を迎えざるをえない。民主勢力の路線的要求である民主化、自主的で自立的な経済構造、労働者と大衆の状況の改善、平和的で自主的な国の統一という方向を——そのかなめである民主化だけでも——本気で追求することは、朴政権一八年の基本を清算することになるであろう。「中間決算」の勢力がもしこれを拒否するなら、それは、本決算をこくわずか引きのばすだけの意味しか持たないだろう。

とはいえ、これは可能性にすぎない。八〇年六月現在、韓国をおおうのは全斗煥の「光州事態」である。ここでは民衆と体制は、総決算をかけて、直接に向きあっている。

3

この向きあいの水準は、あきらかに、一九六〇年の四・一九革命をふくめた韓国民衆闘争のなかでかつてなかった高いものである。それは韓国民衆が光州でなしとげたところから始め、なしとげえなかったことをなしとげる水準といえるだろう。和田春樹氏のことをかりよう。

全斗煥一派の私兵のごとき空挺部隊の残虐はこの人々(光州の学生市民)に武器をとらせ、ついに光州反乱は、つかの間ながら、自由光州、光州民主国をつくり出した。この数日間、大韓民国のいたるところで、恐怖の強権弾圧が荒れ狂っていたのに、光州だけには、言論の自由があった。政府を批判する自由、デモをする自由が完全にあったのである。生み出された自由の空間は、革命の勝利の暁には、全国に実現されるべき新しい秩序の雛型であった。そのようなものが市民の武装によってつくり出されたということは、衝撃的なことであった(『世界』80・7)。

たしかに光州の事態は衝撃的であった。私たちにあっては衝撃的であったばかりではなく、何よりも韓国民衆にとって、韓国民衆勢力にとって、そし

歩むという方針を運動が貫き通したことのなかにあらわれた。三月から五月はじめまで、学生運動は、不利な街頭戦に容易に発展する可能性ある学外デモを自制し、学生大衆の大多数とともに学内の朴体制と闘いぬくことで力量を蓄積した。学生大衆の意志を統一させるためには、長時間の——しばしば泊りこみの——大衆集会がひらかれ、そこでは反対意見もふくめてあらゆる意見が開陳され討論された。この蓄積の上に五月における一〇万人規模の街頭政治デモが可能になったのである。街頭に出るとなれば一斉に出、引くとしまれば一斉に引く見事な統制は、大衆討論のつみかさねを通じる合意の上を実現され、そしてこれらの行動は、戒厳令撤廃闘争が全韓国民衆の事業であるという厳格な自覚にもとづいておこなわれた。一〇万人デモの翌日の五月一六日、学生が一斉にデモを中止して学内に帰ったとき、当局はこの整然たる統制に無気味なものを感じたと語っている。学生運動はこうして、節度ある仕方、戒厳令撤廃の期限つき要求を出しながら、全国的な政治闘争のベイスを設定してゆく(しかしこの学生運動にとっても五月一八日のクーデターは不意打ちだったと思われる。ソウルの学生たちは、五月二二日にふたたび街頭に出ることをきめていたが、ついにこの行動は実現されることがなかった)。

② 光州においても、市民とともにという節度ある行動は学生たちによって貫かれていた。五月一六日、学生たちが整然たるデモを敢行したとき、四万の市民が集まって学生たちをむかえ、学生たちと討論した。この広い基盤と市民の共感の上に、一八日からの全民衆の闘いが可能になるのである。

③ だが光州において、この同じ学生たちが決然として武器をとり市民武装の中核となり、徹底的にさいごまで闘いぬくのである。民衆とともに節度ある行動をとるといふことは、いささかも学生たちの日和見主義を示すものではなかった。それどころか光州の学生は、ながく韓国民衆運動のかくれた論争点であった「暴力か非暴力か」というテーマを、民衆とともに闘うことによって、事実と実践において解決したのである。

④ かつて知識人から始まった民主化運動は、数年来、労働者の運動との結合をつくりだした。東一紡績の女子労働者の闘い、平和市場の町工場労働者の闘い、YH貿易のろう城闘争などは、朴政権の最末期において、その死

期を早める重要な闘いだった。そして朴暗殺後、労働者の闘いはせきを切ったようにひろがり、八〇年四月は労働者闘争の月となった。この月だけで五〇件の労働争議が記録されている。重要なことは、労働者闘争がこの間東原炭鉱三八〇〇名の闘いにみられるように、町を占拠し、武器庫を武力で管理するといった激烈な行動をともなうようになったことである。さらに闘争がこれまでの軽工業や零細企業から炭鉱や製鉄（東国製鋼、仁川製鉄など）といった基幹産業の労働者にひろがったことである。韓国の民主化のための政治闘争は、この間、かつてみられなかった厚みと階級の要素を獲得していたのである。

⑤ かつて韓国の民衆の心を鉄の環のようにしめつけていた「親米反共」のイデオロギーは、体制自体のふるまいによって民衆への威嚇力を失いはじめた。米政府が自分たちを援けるだろうという幻想は、全斗煥の暴挙にたいし、米国が結局何もせぬどころか、米軍指揮下の韓国軍部隊を光州民衆攻撃のため提供して全斗煥に決定的支持をあたえたことによって、苦い幻滅にかわった。学生たちをはじめ多くの活動家は米国の役割が一貫して米国の世界戦略上の利益のための現体制維持であることをみぬぎ告発している。五月一日、ソウル駅前でまかれた学生のビラは「アメリカ帝国主義」という言葉でこの米国の役割を糾弾する。そしてこのアメリカの世界戦略上の利益によりそいつつ反共と「安保優先」の名のもとに民衆を弾圧する政権の姿勢に、人びとは「民主優先」を明確に押しだして対抗する。民衆が「親共」になつたというわけではない。誰がみてもアメリカ式自由主義者である金大中を「共産主義者」に仕立てあげることによって、現体制はその最後の切札である「反共」の価値を決定的に減価させたのである。

本決算に向かう彼我の潜在的情勢はこうして疑いもなく韓国民衆に有利に傾きつつある。韓国の闘う民衆は近い将来、この潜在的情勢を現実のものに転化し、本決算をなしとげるであろう。

5

韓国が民衆の手と力による総決算に向かってすすんでいるとすれば、それはわれわれ——新日本帝国内部のわれわれ——に重大な問題を提起する。韓

（軍事工業）団地に巨大工場を操業する石川島播磨や、総合化学コンビナートを操業する三井まで、あらゆる業種、規模の日本企業は韓国で操業し、韓国経済を日本経済の延長とみなしている。

第三に、これらの事情は、日本支配層——政治家、財界、企業家など——の間に韓国にたいする新植民主義的心理とイデオロギーを生み出し、韓国を外国とみず、商用やゴルフ（放生つき）のための一日の行動圏としてしかみない態度が広く定着している。

第四に、旧日本帝国・新日本帝国の双方をつうじて、日本は、七〇万をこえる在日朝鮮人・韓国人の存在という形で、差別と抑圧の下に朝鮮半島を内部化した。

韓国民衆による朴型支配の総決算はこの日韓の相互浸透の帝国主義的現実のなかでは、韓国一国の大変革をもたらすにはとどまらぬだろう。新日本帝国がすでに朴・全型支配の下にある韓国を内部化しているがゆえに、韓国における民衆の勝利は、新日本帝国全体に、強烈な衝撃を与えずにはおかないだろう。

すでに光州決起にさいして徴候はみられた。木浦の市民が起ち上がり、日韓合併企業「湖南ゴム」からバスを奪取したとき、日本外務省はすぐさま公式に反応し、「日本進出企業の警備強化を徹底せよ」と全斗煥政府に申し入れた。和田春樹氏が指摘するようにこれがこの間日本が韓国にたいしておこなった「唯一の明確な、断言的意志表示」だった。「全土戒厳令をしき、立ち上がった抵抗する民衆へ兵力を集めて襲いかからんとしているクーデター政府に、ただ取締りを強化せよ、抑圧を強化せよと申入れ」たのである（『世界』80・7）。

韓国五月闘争はまだ闘いのほこ先を日系企業に向けなかった。独裁政権をささえに韓国労働者の労働を搾取している日本企業は、遅かれ早かれ、民衆の闘いの重要な対象のひとつにせりあがってくるだろう。バス二台で強硬姿勢——韓国政府ではなく民衆への強硬姿勢——を示した日本政府はそのときどう反応するか。

またもし韓国民衆がソウルで勝利し、KCIAの文書が押収され、日韓支配層のこれまでの汚職や癒着や陰謀や犯罪がすべて明みに出されるとすれば

国は新日本帝国にとってただの一隣国ではないからである。

旧日本帝国は朝鮮を侵略し、併合し、日本の植民地にかえ、朝鮮民族から土地と言語と姓名をうばい、三六年にわたる圧制をおこなった。旧日本帝国が敗北すると、日本は米国の傘の下に入り、米国の朝鮮戦争の前進基地、最大の補給基地となり、この戦争で殺された二〇〇万朝鮮人民の血を養分として——米国の朝鮮特需を「天祐」と呼んだ体制の下で——新日本帝国として再生した。一九六五年、新日本帝国は、朴政権と日韓条約を結ぶことによって、朝鮮民族の分断を固定化し、その上で韓国を日本資本の草刈り場、日本企業の輸出増強の中継基地とし、日本を中心とする多国籍資本の支配する新植民地にかえた。一九六九年日本政府は米国との共同声明のなかで「韓国の安全は日本の安全にとって本質的」であると宣言することによってこの新植民主義構造を韓国民衆の犠牲において維持する政権——当時の朴政権——との政治的・軍事的運命共同体の関係を確認した。一九八〇年五月、全斗煥のクーデターにさいして、日本政府はいち早く、このクーデターは合法的であると宣言し、特派大使を送って全と会談させた。光州民衆の血の弾圧のあと、日本政府は日本の対韓政策は変わらないと保証し、特派大使は帰国して、全斗煥の言葉をおうむ返しにした——「治安回復が民主化の前提だ」と。

新日本帝国にとって、韓国との関係はあきらかに、ただのアジアの一隣国との関係ではない。韓国に朴政権タイプの政権を維持することは、新日本帝国にとっては戦略的、本質的なことがらなのである。そのかぎりにおいて、新日本帝国は韓国を、帝国の構成要素として内部化しているということができる。

第一に、新日本帝国と韓国の朴型支配集団とは権力的癒着の関係にある。自民党内韓国ロビーは韓国がらみの選挙資金源を持ち、日本の大企業は韓国政治に関与する。無数の人脈と相互浸透によって、両国の政治は結びあわされている。これらの網の目の上に、防衛庁自衛隊、治安警察などの公的機関と韓国機関との日常的な協力がささえられている。

第二に、韓国経済は日本経済を内部化し、日本経済は韓国経済を内部化し、全体として韓国は新日本帝国の新植民主義的支配の網の目にくりこまれている。馬山の自由貿易地域に進出した中小企業から、昌原の大重工業

ば、日本における自民党や民社党はどう反応するのか。

韓国民衆による総決算はとりあえず日韓の権力的癒着の、そして歴史的には旧・新日本帝国のつみ重ねたどす黒い対韓（朝鮮）関係の総決算をせまら、それをむこう側から開始する出発点となるだろう。

このような危険を察知して、新日本帝国の権力は歴史的な反応をおこすかもしれない。「国益」が持ちだされるであろう。「日本の在韓資産をまもれ、在留邦人を暴徒からまもれ」という声がかきこえてくる。朴や全が彼ら自身の利益をまもるために「反共」「安保」「北のスパイ」を持ちだすように、新日本帝国の支配者たちは「国益」を叫んで、みずからをまもろうとするだろう。こうして韓国の民衆の手による総決算は、日本政治そのものの問題へ、日本の民衆のすべてがどのような立場に立つか、誰と一緒にどこへ進むのかという問題に転化するだろう。もし「国益」の合唱に唱和すれば、われわれは、韓国民衆をふみにじり、射殺し、処刑する側に立つことになるだろう。

この意味で「光州事態」はまたわれわれの事態でもある。日本のわれわれが韓国の闘う民衆と一緒に生きようとするかどうか、総じて今日の世界を最底部からゆさぶり、人間として当り前の生き方をもとめていたるところで起ち上がっている第三世界の民衆とともに、われわれが生きようとするかどうか、そして日本の政治と経済と文化をそのようにつくりかえるかどうか——この根本問題が問われている。もしわれわれがこの道をえらばなければ、われわれは韓国の民衆の、アジアの中東のアフリカのラテンアメリカの民衆の敵となるだろう。新日本帝国は軍事大國への宣言と米国との共同世界戦略への自発的参加によって、この道をひた走ろうとしている。

起ち上がった光州の民衆とともに歩み、生きること——これは人間なら誰にでもわかる単純なことである。すべての日本民衆がこの単純なことを要求されている——労働組合であれ政党であれ、農民であれ、サラリーマンであれ。そしてこれはひとつことではない。それはわれわれ自身の解放への唯一の道であるであろう。

光州に呼応する われわれの 闘いの質と量を

山川 暁夫

光州の武装決起を頂点にした韓国民衆の八〇年初頭の大闘争が展開されたとき、わが国では二七年ぶりの内閣不信任案が成立し、国政史上まれな衆参同日選挙がたたかわれた。選挙結果は大方の予想をこえた自民党の圧勝に終わったが、恐らく一過性の勝利にすぎない。時代はまぎれもなく戦後史的転換の段階に入っている。どどのような政権が成立しようとも、政治の不安定さはおそらく加重していくだろう。

二七年前とは、一九五三年、前年の五年に日本が米軍の直接占領からいわゆる「講和独立」し、そして朝鮮戦争が米軍の巨大な物量の投入にもかかわらず、ついに米軍の勝利に終わらず、休戦にもちこまれた年である。つまり日本と朝鮮半島にまたがって、北東アジアの政治構造が大戦後初の大きな転変の時を迎えたのが一九五三年だった。この変化にそれまでの戦後政治を支配した吉田茂中心の自由党政治が対応できず、瓦解していく号砲の引金となったのが、二七年前の内閣不信任案成立だった。

こんども同じである。日本と朝鮮南部どちらでも大きな激動の中にある。さかのぼれば二〇年前の一九六〇年にも、日米安保改定阻止の日本人民の大闘争と、韓国人民の李承晩体制打倒の大闘争とが連動した。一九一九年にも日本で米騒動が起きていたとき、朝鮮では、日本帝国

主義支配に抵抗し、六〇〇〇人の犠牲者を出した三・一萬歳独立闘争がたたかわれていた。

ここには重大な歴史的法則があるといえるだろう。加えて光州が、かつて朝鮮の東学党の乱の発祥地であり、一九二九年、日本の大陸侵略本格化の前夜におきた光州学生闘争の記念の土地であり、さらに一九四八年、南朝鮮の単独選挙という米帝国主義の朝鮮分断の奸謀に対した、済州島と並んでもっとも激烈にたたかった革命の伝統の場所であったことを思い起せば、今回の光州武装決起が、この韓国だけでなく、今後の北東アジア、広くはアジアの動向に対して示唆するシグナルとしての意味は重大である。東アジア革命史は疑いもなく新しい幕を開けたのである。

全斗煥一味の血まぐさい弾圧は、六〇年の四・一九義挙をうち返した六一年の朴正熙の五・一六軍事クーデターの再現だろうと恐れ易い。しかし全斗煥一味は、朴正熙ほどの支配権力を確立していない。米国との間にも矛盾をもち、六〇年代初めとは根本的に異なる世界、第三世界勢力の力の大きな前進の世界において、一層国際的に孤立している。経済の深刻な危機は、強権一本の弾圧で韓国経済をたて直らせる保障を爪の先ほども与えていないし、何よりも「北の脅威」に備えらるゝとされてきた国軍が、同族を敵

にして残酷無惨さを演じた事実が、韓国人民に与えた衝撃と教訓は大きい。一方、人民はついに武装の経験までをその手にした。

全斗煥一味のクーデターは、その孤立の深さの現われであり、朴体制時代の権力者があいつち、相い倒しあう過程の始まりを意味している。昨年の一〇・二六は、朴の死であり、その権力構造の自壊が今や本格化したのである。もちろん、それだけに予想される今後の事態は、韓国人民にとって言語に絶して厳しいだろう。しかし歴史は足早に、南朝鮮の真の歴史的要害へと接近しているのだとみるべきだろう。

これにどう日本人民が対応すべきか。日本支配層は韓国有事を日本有事ととらえてきた。全斗煥一味を支持し、支持するだけでなく、日本のマスコミなども使、金大中を「アカ」ときめつける謀略までも働かせて、日韓支配層の安定を図る努力をつづけている。軍事大国化への動きも足音高い。そしてこうした反動体制の再構成の動きに対して、衆参同日選挙結果にみるように、われわれは有効な反撃を組織し得ていない。

韓国人民との連帯とは合言葉に終わるべきものではない。形こそ違え、光州決起に呼応できるわれわれ自身の闘いの質と量をきざぐ決意をわかち合い、その輪を拡大すべきである。

朴正熙でさえもしなかった民衆への発砲命令を下した全斗煥国軍保安司令官。彼は朴正熙から息子のようにかわいがられ、重用され、軍部内ではエリート中のエリートの道を歩んできた。この全斗煥とはどういふ人物なのか。まず彼の略歴からみてみよう。

全斗煥は一九三二年、朴正熙と同じ慶尚道大邱市に生まれた。朝鮮戦争末期の一九五二年一月に陸軍士官学校に入校。韓国の陸士が四年制の正規課程となった最初の卒業生(第一期)である。

陸士卒業後、五八年と六〇年の二度、アメリカへ軍事留学をし、特殊空輸訓練を受けた。

一九五八年、陸軍第二五師団七二連隊の中隊長となる。この時の師団長が、朴前大統領のブレインとして信任の厚かった徐鐘喆(元国防長官)である。その後前線・後方部隊の指揮官や参謀長を歴任し、六一年の五・一六クーデター(朴正熙が政権掌握)では、最精鋭部隊として知られる空挺団(ブラック・ベレー)中隊長(大尉)として、車智激(朴暗殺時に一緒に殺される)の下で朴正熙を警護。これ以後、全斗煥は車智激の「弟分」的存在になっていく。

当時全斗煥はまだ実戦部隊の一士官にすぎなかったが、彼が急速に軍部内で地歩を築いたのは、六七年朴側近の李厚洛(当時大統領秘書室長)の推せんで、青瓦台(大統領官邸)を直接警備する首都警備部隊第三〇大隊長(中佐)に抜てきされてからである。

次いで六九年、軍部の有力者、尹必鏞・首都警備司令官(当時)の推挙で、時の徐鐘喆陸軍参謀総長の首席副官に就任。

こうして、朴正熙のブレインである軍部の主流とながり、出世への道をつき進んでいった。

七〇年には、ベトナム派遣軍の中でも「勇猛」をもって鳴った白馬部隊(空挺団)第二九連隊長となり、七二年には第一空輸特戦旅団長(空挺団、大佐)となった。

七三年に尹必鏞が収賄事件で失脚したが、尹に近かった全斗煥が助かったのは、車智激と李厚洛が救ってくれたからだといわれている。

七七年に陸士一期生のトップをきって少将に昇進。その後七八年には第一師団長に就任した。そして七九年に、車智激警護室長が朴正熙に強力に推挙したことに伴い、陸軍保安司令官の要職についたのである。

七九年一〇月、朴正熙と、「兄貴分」の車智激の暗殺事件にあたり、その真相究明を目的として設置された戒厳司令部合同捜査本部の本部長となった。

全斗煥が、軍部内での実権を完全に掌握したのは、七九年二月二日におきた、いわゆる「肅軍クーデター」である。

これによって全斗煥は、鄭昇和戒厳司令官をはじめとする四〇余人の軍幹部を「朴射殺事件に関与していた」との理由で逮捕。軍の中枢に自分の息のかかった第一期生を送り込み、実権を握った。

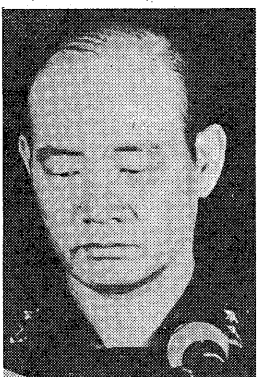
そして八〇年四月一四日、韓国中央情報部(KCIA)部長の席に代理として軍人のまま就任した。

全斗煥は「肅軍クーデター」で「整備を済ませ」、KCIA掌握で「滑走路にのり出した」といっている。これにより彼は、軍・情報・保安の各部門を一手に握ったのである。

四月二九日、全斗煥は記者会見で「遠からず、朴大統領の偉業を継承することになる」と語り、五月二日の「タイム」誌とのインタビューで朴正熙をいままなお「わが国の歴史において比類なき指導者だ」とし、光州事態に関しては、「現実を全く無視して、目的もなく押し流されているように感じる。……我々に必要なのは創造的なナシヨナリズムだ。今は国家建設の時だ」と語っている。「故朴大統領の批判は許さぬ」としていることからみられるように、全斗煥は「維新体制の継承」をスローガンに、朴なき「朴体制」を遂行、「第二の維新体制」ともいえる軍事独裁路線をつき進もうとしている。

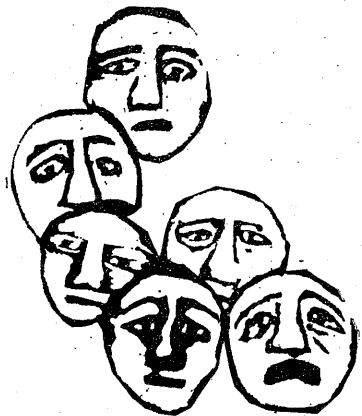
自分の手兵である空挺部隊を使い、武力で光州市民への大虐殺を命令した全斗煥は、現在、家には帰らず毎晩泊まることを転々と変えているという。彼は光州市民だけでなく、全韓国民衆を敵にまわしている。

全斗煥は どんな人物か



朴暗殺から五月の対決へ

すべての民衆勢力が足並みをそろえる



一九七九年十月二十六日、朴正熙韓国大統領は、腹心の部下、金載圭韓国中央情報部(KCIA)部長の手で、女優をばらせた宴会のさなかに、射殺された。一八八一年間、この国の民衆を苦しめ、民衆と敵対して、権力の座に居座り続けた独裁者の死であった。

この事件は、クーデター未遂とも米国が関係したとも伝えられたが、何にもまして、独裁者の退陣と民主化を欲する韓国民衆の力ぬきには起こり得なかったことは誰も否定できない。十月十七日に火をふいた釜山、馬山の民衆蜂起は、朴体制を根もとから揺り動かしたのだ。この二つの民衆決起は、今なお詳細は伝えられていないといえ、人びとの怒りが、恨が限界に達していたことを語って余りある。朴政権はこれを軍隊で押えつけた。

……大統領警護室長車智澈の命令で、パラシュート

します(日経 79・10・27)。

また、韓国ロビイストのひとり春日一幸日韓議連会長代行(民社党顧問)の発言も引用するに価するものだ。

朴大統領とは三回会談したが、不屈の信念をもって韓国の自由と民主主義、反共産主義のために献身している印象をうけ、尊敬していた。……今後の韓国政府体制がどのように変化を遂げて行くのか、にわかに見解を述べたいが、私の感触では朴体制が根本的に崩れ去ることはない(共同 79・10・27)。

暗闘にわけける「維新残党」

十月二十六日の朴の死の直後、國務總理だった崔圭夏が大統領代行に就任。二十七日午前四時には済州島を除く全土に非常戒厳令が敷かれ、鄭昇和大将が戒厳司令官に、保安司令部の全斗煥少将が合同捜査本部長に就任した。この臨時体制は、朴政権の下で恩恵に浴びてきた維新残党が生き残るための画策であった。

とはいえこれは容易ではなかった。朴体制一八年を結びつけていたカナメ、朴正熙その人の死は、朴残党を一挙にバラバラにし、その多くの部分を虚脱状態においた。その中から直ちに権力内部の暗闘と朴体制以後のヘゲモニーをめざす権力層内部の諸分派の投機的動きが生み出されるのである。KCIAは軍とならんで朴政権の二つの柱だったが、このKCIAが最も深刻な打撃をうけ、一切の機能麻痺に陥る。

KCIA部長金載圭による朴射殺はあきらかにKCIA主導の宮廷クーデターの企てであったが、このクーデターが失敗した以上、KCIA全体が一種の身柄おあずけの状態におちいる。そして軍保安司令部が、

(空挺)部隊、特戦団の部隊が敵地でも占領するかのように入ってきた時には、釜山市民の怒りは絶頂に達した。その部隊は六つの戦団に分かれているが、一つが六〇〇名ずつというのに、五個戦団三万名が釜山に入城した。恐ろしいものだった(「世界」80・6)。

秋の新学期を迎え、学生たちは各地で再び民主化を要求して起ち上がった。九月の始め、全羅南道光州の全南大学では「朴公之極」という模型を担ったデモも行なわれたという。まさに民心が独裁を倒したのである。

しかし民心は独裁者が築き上げた体制、独裁者を維持してきた土台をも直ちに倒す準備はまだ出来ていなかった。一八八一年間の専制はあまりに重くのしかかって

長年のライバルKCIAの全面支配にのり出す。朴とKCIAの労働者支配の支柱韓国労総(KFTU)も虚脱状態に陥る。

朴死後戒厳令によって権力を集中したとはいえ、軍内部も一枚岩ではなかった。鄭昇和を中心とする脱朴派——鄭戒厳司令官は朴正熙の国葬にも出席しなかった——と朴体制擁護派との暗闘は、文字通りリーダーたちの生死をかけて争われはじめる。

そしてこの暗闘のなかに、金鍾泌、李厚洛など、かつて朴とともに民衆の血に責任ある権力亡者たちが、朴末期に朴から遠ざけられていたことに乗じて、今こそ自分たちの出番とばかりにしゃしゃり出る。

パンドラの箱はあけられた。そしてそこからとび出したのは、古い、あるいは新しい衣を着た維新残党たちであった。彼らの間の相互反目と暗闘にもかかわらず、維新残党は根本的な点で朴の下で獲得した政治や利権や権力は手離さない。民衆が自分の力で起ち上がって維新体制清算をやるうとすることは許さない。

民衆の民主化運動にたいしては戒厳司令部は一枚岩のごとく立っていた。KCIAよりも手荒な無差別な抑圧——逮捕——拷問——が加えられた。

民主化勢力は反撃する

だが韓国民衆はそれをやすやすと許すこととはもはやできなかった。一八八一年間の積もり積もった怒り、自由と民主主義への願いは止めようがなかったのだ。朴政権下でたたかいた民衆勢力、知識人、学生に加えて労働者、市民たちが一斉に残党退陣を求めて起ち上がった。一〇・二六から光州民衆決起にいたる七カ月はまさに朴体制の中間決算の時期であり、権力と民衆の日に日に激化する対立の七カ月であった。この激動

いたし、おまけに米国と日本という強国が既存体制の存続を何より欲していたからだ。朴射殺を韓国民衆が知るより先に、カーター大統領はいち早く、「米政府は韓国政府との条約義務に従い、韓国情勢に乗じる外部のいかなる企てにも断固対応する」との公式声明を発表、在韓米軍は全軍が第三非常警戒体制に入った。パンス國務長官も「韓国が経験している経済、社会の進歩に見合った政治発展を希望する」と、体制が変わることをたいしてクギをさした。一方、日本政府はどのような反応を示したか。大平首相はこうのべた。

今回の事件にもかかわらず、速やかに事態が平静に復し、朝鮮半島地域の平和と安定が引続き維持されるよう強く祈念するとともに、日韓友好関係が今後とも変わることなく発展して行くことを確信いた

の七カ月の中で、韓国民衆は、「政治不介入」を標榜したはずの軍部が政治を牛耳り始めたこと、崔大統領は軍に誦らされ、いいなりになっている「事務官」にすぎず、全斗煥が率いる軍の暴力と脅しと陰謀が、自分たちに直接向けられていることを知らされたのである。

朴正熙神話化と維新体制礼賛にまっさきに反撥、民主化の要求を明らかにしたのは、自宅拘禁中の金大中と、尹潽善元大統領、咸錫憲ら民主化運動の指導者たちである。

「国民政治家」と呼ばれる金大中は、十月二十八日、朴正熙の死に弔意を示しつつこう言い切った。

この難局を根源的に打開する方法は、国民が熱望する民主体制の回復しかない。民主政府だけが国民の支持と協力を受けて、国民の幸福と国家の安全を確実にすることができる(ソウル発共同 79・10・28)。

十一月三日の朴大統領国葬の日、民主化運動は「朴なき朴体制」との対決姿勢を明確に打ち出した。尹潽善、金大中、咸錫憲の三氏を共同議長とする「民主主義と民族統一のための国民連合」の名で出された声明は、以下の文で始まっていた。

歴史の中に、滔々と流れる民衆の意志は、欺瞞や暴力によってねじまげられることはない。民衆の怒りの標的となった一独裁者の死は、贅を尽した葬儀によって美化されることもありえないし、直接の下手人の個人的な動機が如何によって歪曲されることもない。朴正熙大統領の死は、反民主的で反民族的な一人独裁統治の全面的否定と、過去一八八一年間たえず腐敗に抵抗して戦って来た民衆たちの血と汗のこじむ中間決算であり、ただ、それがY日勤労者たち

の闘争に続いて釜山と馬山で起った民衆の蜂起を直接の動機として権力内部の自己葛藤の形であらわれにすぎない。

この後声明は、民主的憲政秩序の確立、勤労者と農民の生存権の保障、戒厳令の解除、政治犯の釈放の四項目を要求した。この日はまた、五〇年前、光州の青年学生が、日本帝国主義に抵抗して素手でぶつかっていったその日である。

その二日後には、新民党の金泳三総裁が記者会見で「三カ月以内に憲法を改正、改正後一、二カ月以内に新憲法による直接選挙で大統領を選ぶ」ことを主張した。

「YWC A事件」が明らかにしたもの

十月二十七日午前四時四十分、韓国民衆は戒厳令の下におかれていた。いかえれば新聞報道に対しては内部検閲、政府検閲に加えて軍による検閲が行なわれていたわけで、民主化運動の動きは一切、国民には知らされなかった。その上で崔圭夏大統領代行は、十一月十日、①現憲法による大統領選の実施 ②後継大統領の下での憲法改正 ③改正憲法下での大統領選挙の実施という日程を発表し、これを「ゆるやかな民主化」と表現した。いうまでもなくこれは民主化どころか維新体制を続けるという意思表示に過ぎない。何ものでもなかった。独裁体制の柱ともいえる統一主体国民会議(七二年維新憲法により誕生した翼賛組織。面「郡の下」、邑のレベルで二、三人を選ぶ。全国で二五〇〇人。地域の有力者、金持がほとんど。無給だが公団総裁など有力な地位獲得につながる。大統領選にたいしては総会はほとんどひらかれない。任期六年)と大統領

保安司令部こそ全斗煥の根城であることはいうまでもない。民主化勢力はこの時点で否応なしに、民衆の敵は誰かを知ったのである。

「ゆるやかな民主化」という欺瞞

軍をたのみに「ゆるやかな民主化」旧体制固持を図る崔圭夏は、大統領緊急措置九号の撤廃と政治犯の釈放というアドバルーンをあげながら、十二月六日には維新憲法規定の下での第十代大統領に就任した。八日、緊急措置九号を解除、文益煥、成世雄ら多数の民主化運動指導者を含む九号違反関係者六八名の釈放を発表し、同時に金大中の自宅監禁を解いた。金大中を含む緊急措置違反者六八〇人の公民権が回復されたのは、翌八〇年の二月二十九日である。

だがこうした明るいニュースは必ず、「ああまたか」と心の重くなる知らせを伴っていた。それは「南朝鮮民族解放戦線準備委員会」事件なるもので捕われた七四名の若き人びとに加えられた拷問とデッチ上げであり、YWC A事件で送検された尹潽善、成錫憲ら一八名に軍事法廷で二、四年の求刑がされたという報道であった。七九年十月九日、「大規模反国家陰謀組織摘発」としてキリスト教関係を中心とする労働運動活動家を逮捕したのが「南民線」事件である。南で起こった自主的共産主義者であるといながら北と通じて南の暴力革命を図ったというデッチ上げである。八〇年二月四日の法廷で、被告のひとり崔烈は(民主青年協議会副会長)次のような最終陳述を行なった。

私は一九七〇年代の犠牲者三人に見守られている。七〇年、平和市場で労働者のために焼身自殺をとげた全泰壹烈士、七五年四月十一日、大統領に送る公開書簡と遺書を朗読して自決したソウル大学農

勸進の維新政友会を温存したままではいかなる改革もありえないと、キリスト教界をはじめ解任教授協議会、東亜・朝鮮日報の自由言論実践闘争委、民主青年協議会、自由実践文人協議会など、民主化勢力は一斉に反撥、「あらゆる民主勢力を網羅した挙国民内閣」の構成を要求しその声を一月二四日、統一主体国民会議による暫定大統領選出阻止大会に結集させた。この日、ソウル明洞のYWC Aに結婚式を装って集まった一〇〇〇名以上の人々の前で「統制阻止のための国民宣言」「挙国民内閣構成のための声明書」などが読み上げられた。

「これ以上のはしたなき期待や注目はいまや捨てるべき時だ。腐敗者の手では新しい時代をひらきえないし、維新の清算のための維新の延長は決して許せない。われわれすべての憤怒をもう一度確認し、あの錆びた独裁の鎖の最後の環を断ち切ろう」と、大会の趣旨文はよびかけ、声明は、維新体制の総辞退、「改憲—総選挙—民主政府樹立」という政治日程を要求しただけでなく、「反民衆的腐敗特権分子」の審判を主張した。その中には、金鍾泌、李厚洛、李哲承をはじめとする腐敗政治家、鮮干輝、李東旭といった言論人、全国経済連合会長の現代建設会長鄭周永、御用労働組合の金永泰らが含まれていた。

声明はまた、軍の政治介入を非難し、さらに外勢—米国の関与にたいし次のように抗議した。われわれはわが国の民主化に関して外勢の干渉を一切拒む。わが国の民主化がどのような方法でどのような過程を経てなされなければならないかは、われわれよりもよく知っている外国も外国人もありえない。われわれは自主国民の誇りとして、その誰の干渉も受けたくない民主化を推進してゆく決意と能力を備えている。一切の外勢は、維新残党を支持する維

学部四年の金相鎮烈士、七九年八月十一日、YH事件で命を失った金景淑烈士の三人である。この三人の志をうけつづけたためにも私は、これからも戦いつづけると申しあげざるをえない。民主社会建設と民族統一のために、これ以上の挫折、これ以上の苦難、これ以上の苦悶に耐えながら、根強い生命力で戦ってゆこうと思う(『世界』80・4)。

十二・十二クーデターと新党結成のうごき

それでもなお朴正熙政権の命脈はおぼつかなかった。生き延びるために彼らは再度、暴力装置を動かさねばならなかった。十二月十二日の「肅軍クーデター」である。この日の午後、全斗煥は三八度線を守る第九師団を米軍司令官の了解なし移動、ソウル周辺に集結させ、鄭昇和指揮下の首都警備隊と銃撃戦を行ない、陸軍保安隊を引きつけた全斗煥は、鄭司令官を始め將軍二十余名を逮捕した。同時に盧載鉉国防長官も首にした。「朴正熙暗殺事件の関連者を大統領の命令で逮捕したにすぎない」との口実の下に行なわれたこの肅清により、朴正熙によって優遇され、その正統後継者を自認する政治化された陸士一期生が権力の中枢に居座ったのである。

一応の実権を握った全斗煥はここで、残党のひとり申鉉碩(副総理、経済企画院長官、双竜財閥)を首相に据え、申内閣を発足させた。軍の意図は、全斗煥のクーデターで陸軍参謀総長・戒厳司令官の座にいた李燺性(朴暗殺以後KCIA部長代理をしていた)が、十二月十九日に行なった記者会見で明瞭に示された。「軍は政治に関与しないという原則は確固である」とくり返すと同時に彼は「北が使用する用語・方式を使うことは許さない。個人や団体の主張を強めるために

新独裁延長陰謀に助力するような印象を与えてくれる発言と行動を慎むべきである。

いかに報道管制下であれ、「無分別な行動は容赦なく逮捕し、嚴重な措置をとる」との戒厳司令部の脅しにも屈せずひらかれた国民大会に表現された民衆の意思は、残党勢力を恐怖に陥れた。集会の真最中にYWC Aに乱入したソウル市警第三機動隊は、成錫憲をはじめ数十名を男女がまわす引きずり出して連行し、朴政権下のKCIAのやり方をはるかにしのぐ暴行、拷問を加えた。参加者の一部は機動隊の包囲を破って街頭をデモ行進し、「崔圭夏退陣」を叫び、三十余名が逮捕された。二六日、戒厳司令部は九六名を連行したと発表した。翌二七日には、韓国キリスト教学生総連盟の祈禱集會に、戒厳軍をトラック二台に分乗させて送り込み、全員を連行した。

この二日間の弾圧は、朴政権下にもなかったほど大規模であっただけでなく、逮捕者に対する暴行の残酷さは、軍・崔体制の正体、本質を余すところなく明らかにした。ニューヨーク・タイムズ紙はこう報じた。「拘束者は全員殴打されたことを外部にいっさいもらさぬという誓約書に署名を要求された。殴られたキリスト教の指導者たちは、背中や足、腹などに重い打撲傷を負い、顔などを切られ、内臓も痛められ、数週間の治療を要するといわれる。釈放されなかった学生たちは、ソウルにある保安司令部で最もひどい虐待を受けた」(79・12・4)

四日後の二八日にはソウルに呼応して全羅南道光州でも、民主勢力六団体三千名がYWC Aで暫定大統領選挙粉砕集會をひらき「民主回復に向け力強く前進しよう」と誓いあった。ここでも九名が連行されている。

外勢依存的専断主義に陥ってはならない。企業の倫理と公益性を考慮せずに対立を助長し団結を阻んではならない。自分の主張のみを唯一のものとして他人の思考と判断を拒むことがあってはならない。宣伝と煽動で自分の目的を達成しようとするのはならない」と、きわめて政治的発言を行なったのである。

全斗煥もまた、一月十五日の記者会見で「政治的野心はない」といいながら、その一方で全・申コンビは在野の与党派を始め、共和党、維新国会議員などを訪ねては第三党の創党可能性を探り始めた。軍人の政治介入にたいしてはあまりに国民の反感が強すぎるだけでなく、米國も望まなかったし、改憲・総選挙を実施しても金鍾泌と民主共和党では、金大中・金泳三を擁する野党に勝てないとみただけである。事実、一九八〇年元旦の『東亜日報』は、世論調査の結果として国民が他の何よりも民主化を望んでいることを伝えていた。「八〇年代の韓国の政治発展のために、最も重要なのは人権と自由の伸長であると大多数の国民は考えている。経済成長や生活水準の向上を遅らせても、自由選挙による国民の政治参加と人権を伸長させる民主化が望ましいということである」と。一方、一月いらい民主共和党総裁に収まった金鍾泌の腐敗ぶりはあまりにも周知の事実だった。

彼は一九六一年のクーデター以後、朴政権下の腐敗のシンボルではなかったか。一九六二年の証券波動、六四年の日本製セナラ車疑惑、三粉暴乱事件など、限りなくつづいて、とうとう國を追い出されるところまで行ったではないか。国民は忘れていない。韓日会談の時に金鍾泌・大平メモで妥結の糸口をつけたというのだが、それにも巨大な金がからんでいるそうだ(『世界』80・1)。

成熟する学生運動

民主化推進の先頭に立ったのは、いうまでもなく学生たちであった。とはいえ一〇・二六以後の新事態の中で、学生たちが軍部体制との直接対決よりもむしろ、学内の民主化にたまたかの焦点を合わせたことに注目しなければならない。軍部に口実を与えない、煽動にのらず慎重に集結し、国民の世論と歩調を合わせて学園の民主化に向けて圧力を加える、それが政治への圧力となる、という姿勢は長い闘争に培われた学生たちの政治的リアリズムと冷静さを反映していた。七九年十一月二日、ソウル大学でまかれた「学園民主宣言」のピラは、このたまたかの方向を明確に打ち出していた。

一八年間の長期執権と維新体制の下であらゆる抑圧にさらされてきたわれわれ大学人たちは、一〇・二六事態いらい、真正の学園民主化を実現することを一層切実に熱望している。これは学校当局とか政府の一方的処理によってではなく、全大学人たちの集約された意見と力量によって成しとげられねばならないことは自明である。それだけではなく、これは必ず旧体制の残滓の清算とともに具体的、制度的保障を前提にしなければならない。

「具体的制度的保障」とは、学徒護国団の廃止と自治学生会の復活、学則の全面改正、追放された学生たちの復権、大学言論の自律性の回復、学内の査察行為の撤廃、御用教授、学長、総長の公開反省と辞職、大學生への機動隊導入の中止と派出所の撤収、追放された教授の復職と教授審査制、教授再任命制の廃止、であった。

動を展開してゆく。三月二六日のYWCAにおける水曜講座には、せいぜい四、五〇〇名しか入れない講堂に一万名以上が殺到し大混乱をきたした。四月十六日の韓国神学大学の講演会に五万人、そして一八日の東国大学には一〇万人を集めたと報じられた。四月新民党と訣別した金大中は、四月二七日ついに、ジャーナリストクラブでのスピーチの中で、新党結成、大統領選出馬を表明する。

学園を追放されていた教授、学生たちが復職、復学してきた。新聞人たちは言論の自由要求の声を強め、雑誌は競って尹潽善、金大中らの論文を掲載し、東一紡織で糞尿事件を起した金永泰は、大韓労働委員長でありながら外を出歩くこともできなくなった。三月十日の労働節には国務総理が労資協調について語ったが、その言葉が終るや否や、労働三権を返せ、労働運動に怠慢であった労働組合幹部、労働貴族は退陣せよ、という叫びがあがった。自由実践文人協議会所属の八三名の知識人は崔圭夏政府にたいし「金芝河詩人は釈放されねばなりません」と要求する書簡を送った。ソウルの高層ビルの西と北——青瓦台の方向——に向かったすべての窓は、「安保」のために黒く塗りつぶされていたのが、三月頃から徐々に透明ガラスに変わりはじめた。

誰の目にも民主化の波はもはや、いかなる強権をもってしても押し止めようがないようにみえた。韓国内に住む人も、またこの時期にこの国を訪れた人もみな「時代は変わった」と実感したのである。国民の無言の圧力が歴史を引っぱっていた時期であった。

この力と対決するために、全斗煥は自ら中将に昇進し、四月十四日にはKCIA部長代理の地位まで手中にして、着々と権力を一身に集めていった。

おまけに朴を射殺した金載圭が法廷陳述を通して「一〇・二六」の目的は民主主義の回復、釜山・馬山のような事態の広がりとその以上の犠牲をくい止めること、アメリカを始め国際関係を改善することにあると、明らかにしたため、国民の間で急速に人気が高まった。「いま、巷間では、金載圭氏を金重吉とさえ呼んでいる。重は、伊藤博文を暗殺した安重根義士の重である。吉は一九三二年上海で爆弾を投げて白川大将などを暗殺した尹奉吉義士の吉である」と、一月十七日発信のT・K生の通信は述べ、金載圭助命運動が広がりつつあることを伝えた。民心はここまで反動勢力を包囲したのである。そこで窮余の策として出てきたのが新党結成であった。

一月十日、韓国銀行は七九年度経常会計の赤字が三九億ドルと前年の四倍に達したことを発表、十二日には突如、ウォンの一九・八パーセント切下げ（一ドル四八〇ウォンから五八〇ウォンへ）を実施、銀行金利を二四パーセントに引き上げた。政府はこのウォン切下げで一夜のうちに三〇〇億ウォンを借けたといわれるが、政府自ら二〇〇億ウォンまでは認めた。これが軍部と結んで新党をつくるための資金だったことは衆目の一致するところであった。

だがこの新党結成の動き——軍と財閥と統一主体国民会議代議員、セマウル運動要員、救国奉仕団の女性たちをひっくるめて申鉉碩を党首とするという策動——は、二月に入りピタリと止む。代わって出てきたのが金鍾泌失脚の策動と金大中の復権であった。軍がなぜこの時点で金大中の公民権回復を認めたのかはさまざまな憶測がある。だがこの国民政治家は以後、「民主主義の実現、米日など友邦との親善強化、南北間の平和的対話の推進による祖国の民主的統一」をスローガンに、崔反動政権批判を行ない、活発な政治活

こうした学生の動きにたいし、崔大統領は四月十四日、特別声明を発表、「時局の重大性を考えず国民的団結を阻害する言動が行なわれていることは遺憾、特に学生が教師に対し過激な行動をとったり、軍事教練を拒否することがあってはならない」と警告を発した。

学生たちは直ちにこれに反撥、翌十五日には二〇〇〇名のソウル大生が「崔政権は民主化促進、早急な政権移譲など過渡的政権としての『本分』を忘れている」と糾弾、成均館大生も強い崔政権批判の声明を発表した。

四月十八日から十九日、全国の大学は四・一九学生革命記念集會がもたれ活気づいた。この日、ソウル大生約一四〇〇〇名は、二八台のバスをつらねて、市のはずれにある四・一九墓地にもうで、声明も読み上げず黙禱のみを捧げて、さっと引き上げた。学外に出る決意を学生たちはこういう形で表明したのである。この時点でトラブルが続き休校となっていた大学は一九校、二四の大学で民主化を要求する徹夜の座り込みが続いていた。二四日には教授たちも学生の戦列に加わった。ソウル市内の主要一四大学の教授三六一名が学園民主化声明に署名、「大家族体制で運営して学園を私企業化した経営者たちは即時辞職すること、大学軍事教育の根本的改革、教授再任命制の撤廃、教授会の民主的機能強化、大学別の教授協議会の結成」の五点を要求した。このような意識の高まりの中で、学生たちは五月を迎えたのである。

学園民主化は全国に広がった。二三日には大邱の慶北大、啓明大、釜山の釜山大、ソウルの西江大でも同様のピラがまかれ、二六日には高麗大の学生たちが民族を愛する会、キリスト教学生連合など一四団体の名で「七九年学園民主化宣言」を発表。二七日には延世大で一〇〇〇名、ソウル大で五〇〇〇名が結集して集會をひらき、淑明女子大も「学園民主化のための声明書」を出した。三〇日には光州の全南大で二〇〇〇名が「再び民主化闘争の道に総決起する」ことを誓い合った。学生たちは全国的に同じ内容の声明を出して共同戦線をはったわけである。十二月五日の全州全北大学における二〇〇〇名の集會、デモは、御用教授を集めて糾弾し、総長室を焼き、新民党の御用化の責任者李哲承の家を襲撃する段階にまで進んだ。

学生運動の波は一九八〇年三月、新学期が始まると同時に再び高まった。三月十二日にソウル大で二二〇〇名が学生自治会復活と学徒護国団の廃止を求める決議を発表したのにつづき、梨花女子大、成均館大、東国大でも集會が持たれ、翌十三日には延世大七〇〇〇名も学生自治会復活を要求、二日には高麗大に一五〇〇名が結集して、ソウル市内五大学の学園民主化のための共同声明を発表した。

三月二七日には光州の全南大生二〇〇〇名が御用教授糾弾学生大会をひらき、「御用教授白書」宣言を発表、朝鮮大でも五〇〇〇名が大学自治を要求する集會をひらいた。

三月に入ると、追放されていた教授や学生たちがキャンパスに戻り、自治会が再建され学徒護国団は解体に向かった。復学生の数は七〇〇名、ソウル大だけで三四〇名にのぼった。四月三日、ソウル大当局は、学生を公式交渉相手とすることに同意、予算措置を認めた（それまでの交渉相手は学徒護国団）。

労働者も起ち上がった

八〇年春、労働者もまた一斉に起ち上がった。スト権を法律で禁じられたなかで、ほとんど全産業で労働

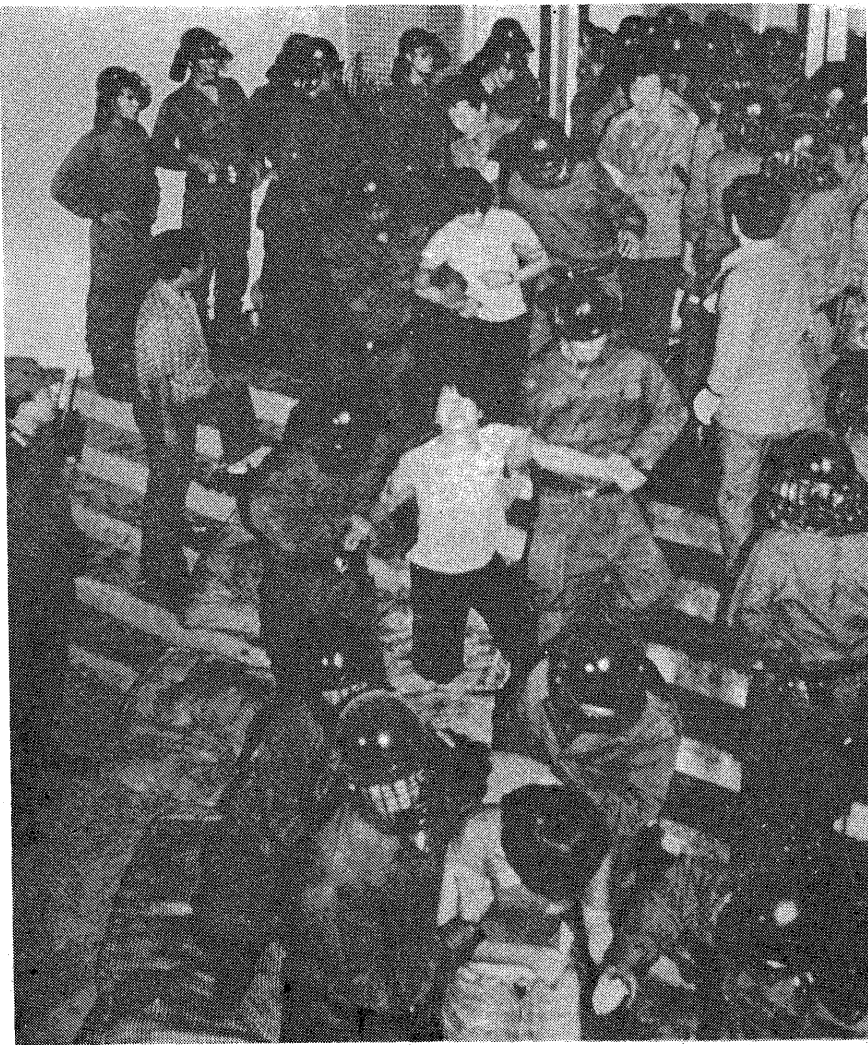
者たちがストライキ、座り込み、ハンストといった直接行動に踏み切ったのである。三月以後の労働運動は、春季賃上げ闘争ではあるが、その背景としては、①にぶる賃金上昇と高いインフレ率 ②社会全般における民主化の波と、政府側による民間部門（労働関係）にたいする直接的コントロールがきかなくなったことがあげられる。

労働者の要求の中には、賃上げとボーナス支給、労働三権の回復のほか、多くのばあい御用組合幹部の追放が含まれていたことが注目される。不況のシワ寄せに対する生活権のたたかいはであると同時に、民主化の

民衆弾圧許せぬと国交断絶も 第三世界の反応

全斗煥の血の弾圧にも屈しない光州民衆の闘いは、第三世界の人民にも強い感銘を与えた。平壤放送が二五日報じたところによると、アブ・ジハド・パレスチナ解放機構（PLO）執行委員兼パレスチナ解放軍副司令官は五月一九日、「最近、韓国がPLOを『認定』するとの噂が広がっているが、PLOは韓国との関係を望まない」との態度を明らかにしている。

オイル・ショックでアラブ諸国への接近をはかろうとする韓国政府にとって大きな打撃である。また、アフリカのセーシェル共和国の外務省は「ソウルの残忍な独裁体制に抗して決起した無数の市民に対する過酷な弾圧、虐殺は断じて容認できない」と述べ、韓国との外交関係を断絶するとの声明を発表した。



二九パーセントの回答と退職手当制の改善を勝ちとって職場に復帰した。

四月二日に始まった江原道舎北の東原炭鉱労働者・家族三五〇名の職闘的実力闘争は、八〇年代労働運動の広がりや深まりを示し、崔圭夏政府をふるえ上がらせた。五万二〇〇〇の人口をもつ小さな炭鉱町は、四日間文字通り炭鉱夫たちに占拠されたのである。鉱夫たちは道路と鉄道と封鎖し、ソウルから送り込まれた一〇〇〇名の機動隊とにらみ合った。

労働者たちが四〇パーセントの賃上げを要求したのにたいし、組合幹部が会社の提案した二〇パーセントを受諾したことが、労働者の怒りをかかった。この組合幹部は会社の費用でいち早く済州島へ逃亡したという。組合幹部の退陣も含め、このたたかいは労働者の勝利に終わったが、警察との衝突で警官一名死亡、四十数名が負傷したと韓国紙は報じた。

舎北の町を占拠した労働者は、ライフル一〇〇〇丁を貯蔵してある在郷予備軍の武器庫の警備に当たったという話も伝えられた。

東原炭鉱近くの炭鉱労働者、忠清北道の滑石鉱山労働者も、次々と賃上げ、労組幹部退陣を要求してストライキに突入した。

たたかいは火は、さらに韓国最大の民間製鋼メーカーである釜山の東国製鋼に移った。四月二八日、同社の労働者一〇〇〇名は四〇パーセントの賃上げを要求して会社事務所を占拠、三十日朝まで機動隊と投石戦をくり広げ、あるいはデモで衝突した。さらに会社事務所所に放火、工場の一部を破壊し、一二名が負傷、八名が連行された。戒厳司令部は「頻発する労使紛争、学園紛争にたいし断固たる措置をとる」と言明、釜山争議に戒厳布告令を適用、労働者六名を逮捕した。

現代グループのひとつ仁川製鉄七〇〇名も四月二五

進展の主要な部分を、労働者は担っていたのだ、

七〇年代の韓国労働運動は、生命を犠牲にしてたかかった全泰亨と平和市場の年若い女子被服労働者、東一紡織やYH貿易の女子労働者によって担われた。人間として生きる権利を求めた彼女らのたたかいは、民主化運動の最前線であった。八〇年代のたたかいは、口

火を切ったのもまた、これらの女子労働者たちである。二月、東一紡織労働者たちは、金永泰を名誉毀損で告訴した。四月八日、平和市場内の連合労組被服支部組合員一六〇名は、李小仙とともに座り込み、ハンストに突入した。三五%の賃上げ、退職金制度の導入、金永泰退陣、労働権回復を彼女らは要求し、十日後、

日、賃上げとボーナス、会社幹部追放を要求して立ち上がった。彼らは幹部を監禁、車に火をつけたと伝えられる。大手の機械メーカー、東洋機械でも同じようなたたかいは起きている。

五月初め、韓国労働庁は、七九年十月二六日の朴大統領射殺事件らしい四月末までに、八〇九件の労働争

議が起きたと発表した。このうち作業拒否が三五件、ろう城三九件、集団陳情七二六件となっており、デモも九件行なわれている(日経 80・5・7)。ほとんどのケースで三〇〜四〇パーセントの賃上げ要求が出されているが、これは政府の見通しですら三〇パーセントを越すインフレが、労働者の生活を直撃していることの反映である。政府は一月はじめ、今年の賃上げベールを政府関係一〇パーセント、民間企業一五パーセントとガイドラインを示したが、四月に入り政府投資機関は一律一五パーセントアップに踏み切らざるをえなかった。失業者の数も急速にふえ、三月末で総数八〇万人、全労働人口の五・六パーセントという六八年にいらぬ高い数字に達した(朝日 5・3)。とくに重化学工業部門は過剰投資と輸出の伸び悩みが背景にあった。

四月だけでもストライキ二七件、座り込み二九件、デモ二件が起きた。前出の各企業いかに争議発生企業として新聞に報じられたものを、業種別に拾ってみよう(争議に参加した労働者は逐一記さないが、ほとんど一〇〇人〜五〇〇人以上、二〇〇〇名を越すケースもある)。

◎繊維関係——東一紡織(二二六人の女子労働者が復職を要求して韓国労総事務所を占拠、委員長室でハンスト、座り込み)、半島商事(四〇〇名がスト、四月二二日より無期限ハンストに突入)、東洋レイヨン、源進レイヨン。

◎石油化学関係——鎮海化学(四五〇名が三日間座り込み)、嶺南化学、大東化学(三五〇名徹夜座り込み)、宇一化学、三英化学(五〇〇名がスト)、井上化成(馬山自由貿易地域、労組結成)、大韓化学。

◎通信・機械関係——金星通信(安養工場)、現代洋行昌原工場、東洋機械、韓国双葉精密機械(馬山自

由貿易地域、組合結成)。

◎鉄鋼・鉱業——石炭公社、日新製鋼、東国製鋼仁川工場、泰興産業、一信産業(滑石鉱山)。

◎その他——韓国皮革産業、三星製薬、太陽金属、曉星ガラス、国際製紙、大韓光学、南洋乳業、東明木材、新新木材、光明印刷、国際商事(はきもの)、三元物産、ユニオン・マーク。

また五月二日には、釜山の三和織物の労働者七二六人が日本人経営陣の追放を要求して座り込みを行なっている。全国金属労働者組合の組合員二三〇〇人は韓国労総の本部を占拠、腐敗幹部の退陣を要求した。

労働者の起ち上がりは崔軍体制と対決する民主化勢力にもはかり知れないインパクトを与えた。これまで孤立したたたかいを強いられてきた民主化運動の指導者たちは、ようやく幅広い共闘の基盤を見出したのである。そしてそのことはとりもなおさず「民主化」の内実の問い直し、連帯すべき対象としての労働者、農民との具体的出会いを意味した。四月に出獄した民主化運動の有力な指導者文益煥牧師は、「私のような人間は民衆の一部ではありえず、民衆から学ばねばならない」と語ったという(AFSCスタッフ・レポート 80・5・27)。

そして五月は目前に迫っていた。



韓国政府は戒厳令を全国に拡大した背景説明の中で「韓国経済は……破綻の危機に直面した」と告白しなければならなかった。経済の破綻が学生デモと労働者のストライキに起因するという筋違いの

韓国経済

ついに破綻へ

説明とはいえ、これは韓国政府の統治能力に対する泣き声に近い敗北宣言にほかならない。

韓国経済が急速に下降したのは、まだ朴正熙が生きていた昨年度後半からだ。

た。昨年第I四半期に一三・一%だった成長率は、第II四半期には一〇・三%、第III四半期には五・〇%、第IV四半期には一・五%に落ち込み、期待ふくらむ八〇年代の幕あけだったはずの今年の第I四半期にはマイナス一・七%という一六半ぶりのマイナス成長を記録した。

実は季節的変動要因を調整した昨年度の成長率は、第III四半期からマイナス成長に転じている(第III四半期はマイナス一・五%、第IV四半期にはマイナス六%成長—東亜日報 80・6・6)。

こうした中で一月二日、韓国政府はウォンの一九・八%切下げ、金利の大幅な引上げ策を講じ、輸出拡大や金融の締めをはかったが、石油・電気などの公共料金の大幅な値上げなどによって、天井知らずのインフレが進み、一月二日の措置の効果は、ほとんどなくなってしまう。五月末まで卸売り物価は二七%もアップ、今年中に五〇%はやすやすと超えるというのが東亜日報の予測である。同期間中、小売り物価は一七%のアップと発表されているが、実際には五〇%以上だという。しかし都市家計の月平均支出が二〇万ウォンをはるかに超えるというのに労働者の平均賃金は今年二二%アップに止まり、全体平均で一・四一〇〇ウォン、製造業労働者の平均賃金は八万三三三〇ウォンにすぎない(約一

四〇ドル)。

こうした激しいインフレと、それに伴う需要の激減で企業の倒産、不渡り、稼働率低下などが著しく、完全失業者は毎月一〇万人ずつ増え、三月末には、八三万人(五・六%)と発表されている。ソウルの大手デパートなどの売上げは、軒並みに二〇〜三〇%落ちた。地方はもっと深刻で、全国の卸しおよび小売りの売り上げは七七年の水準を下回っている。

特に耐久消費財の需要が激減して、第I四半期中、乗用車、冷蔵庫、エアコンなどは前年同期に比べ、それぞれ四一・三%、五九・五%、九二・二%に落ちこんだ。韓国重化学工業の花形といわれる自動車産業は、稼働率二六%、生産も昨年同期に比べて五八%も減り、在庫の累積は金額で一五〇〇億にのぼっている。

不渡りも、一月には一日平均四億ウォンだったのが、三月には五億ウォン、四月には七億ウォンに増え、五月には一日一〇億ウォンになった。六月一〇日は、一日でなんと四八億ウォンの不渡りが発生した。また、全企業の財務構造は悪化し、年間赤字だけでも、四兆ウォンを超え、私金融を除く制度金融の民間信用総額に匹敵する。つまり制度金融分の新規投資はほとんど赤字支払いに消えることになり、倒産が相次ぐことになる。

韓国経済成長の原動力といわれる輸出

はどうか。一月二日の約二〇%ウォン切下げにもかかわらず、一〜五月の輸出の伸び率は前年同期比で一八・二%アップで、五月はわずかに九%増にとどまった。つまり、数量ベースでは輸出は減ったということになる。輸出の伸び悩みは当然ながら国際収支の悪化をもたらし、いまや国際収支の悪化こそ、政府当局者間の最も深刻な悩みの種だ。

今年三月現在、韓国は二一八億ドルの対外負債を抱えている。七八年末には、一四八億ドルだったことを考えれば、一年あまりで七〇億ドル負債が増えたことになる。昨年六〇億ドルの借金が導入されたが、その全額が貿易赤字の穴埋め(四二億ドル)と負債の返済(約一八億ドル)に使われた。今年も貿易赤字が六〇億ドルと見込まれており、新規借金は七九億ドルが必要とされている。つまり年末には、対外負担総額は約三〇〇億ドルに達するだろう。為替準備五五億ドルはすべて負債で構成されているのである。

「南北問題」を諮問するプラント委員会は、六月、韓国、ブラジル、メキシコの三国が負債返済能力がなくなったため、八一年には世界金融秩序がパニックに落ちる恐れがあると報告している。いわゆる「中進国」の経済破綻は、世界全体を破局に追い込むかもしれない。

現在、韓国は全斗煥將軍を筆頭とする軍部によって支配されており、事実上、軍政下にあると過言ではない。五月三十一日に発足した最高政策決定機関「国家保衛非常対策委員会」のメンバーの大半は軍人であり、新首相の朴忠勲も

算の三分の一強が国防費にまわされる。軍の中核をなすのは約五六万の兵員を有する陸軍であり、ほかに海軍三万二〇〇〇、空軍三万名がいる。

総兵員の九割近くを占める陸軍は、第一から第三の三つの軍で編成されている。うち第一軍と第三軍が野戦軍で、残りの第二軍(司令部慶尚北道大邱)は予備師団一〇個からなり、兵站補給と新兵訓練に当たっている。

第一軍は第二、第三軍団の二個軍団、計八個師団からなり、司令部を江原道原州に置き、軍事境界線東部に展開している。一方の第三軍は司令部を首都ソウルに置き、第一、第五、第六(四は欠番)の三個軍団、計十二個師団からなり、ソウル前面の防衛を任務としている。

元軍人である。韓国における軍の存在は、日本の自衛隊などくらべてはるかに強大なもので、単に軍事のみでなく、国内治安、政治、経済、文化の方面でも大きな影響力を持っている。

韓国軍の総兵力は約六二万、国家総予

韓国軍の特徴としてまず第一にあげなければならないのは、駐韓米軍の指揮権下におかれており、米軍の「許可」なしにはいかなる作戦行動もできない仕組みになっている点である。これは朝鮮戦争の際の韓国軍を「国連軍」(実質は米軍)の統帥権下に置くという協定(大田協定)によるもので、一九五四年の米韓相互防衛条約でも再確認されている。韓国には今日でも約四万二〇〇〇の米軍が駐留しており、米軍と韓国軍は米韓合同軍司令部を設置し、韓国軍はすべてこの合同軍司令部指揮下に置かれている。司令部は

司令官が米軍将校、副司令官が韓国軍將校で構成されている。昨年一月二二日の全によるいわゆる「肅軍クーデター」の時、全は米軍の承認なしに勝手に軍事境界線付近に配備されていた第九師団をソウルに移動させ、大きな問題となったことは記憶にあたらしい。

ただ例外がある。韓国軍の中には、米軍の指揮下に入っていない独自の部隊がある。一つは「近衛師団」というべき首都警備司令部で、もう一つは特殊部隊の第一空輸特戦隊である。首都警備司令部は青瓦台(大統領府)の防衛が主任務であるが、実質的には大統領直属の政治治安部隊であり、しばしば民主化運動を脅喝するために動員使用されている。

第一空輸特戦隊空挺部隊は通称「グッラックベレー」と呼ばれ、空輸によって敵中深く降下し突撃する特殊部隊であり、精鋭を誇っている。同部隊はしばしばデモ弾圧などに急派されており、今度も光州で無差別殺りく行為を行なった。国内の民衆弾圧にこの両部隊が動員されるのは、米軍の直接の指揮下からはずされ、韓国政府が独自の判断で動かせる部隊だからである。

韓国軍の第二の特徴は、軍内にその数一万から二万数千といわれる防諜部隊を抱えていることだ。この代表格は陸軍保安司令部(DSC)である。DSCの任

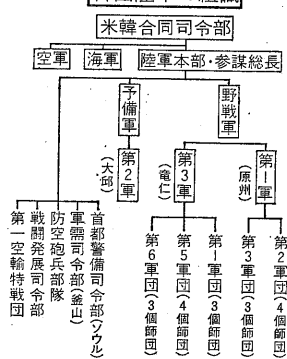
務は軍内の保安、防諜、犯罪捜査であるが、軍内の反対派を摘発するのに使用されるだけでなく、一般民衆のなかにまで手をのびし、民主的勢力のデッチ上げ逮捕まで行なってきた。全斗煥は陸軍保安司令部司令官の地位を最大限に利用し、軍長老を追放し、軍の実権を掌握してきたのである。

さらに韓国軍の第三の特徴は、六二万の正規軍のほかに、「郷土予備軍」「学徒護国団」「民防衛隊」「在郷軍人会」といった準軍隊組織がある点だ。これらの組織は民衆を戦時体制にしばりつけ、一切の民主化闘争を押しつぶすためのものであった。学國民主化闘争の中で学生達が「学徒護国団の解体」を要求したのは、従来「学徒護国団」が御用学生を中心に大学の「維新化」兵官化」を計ってきたからである。

以上、韓国軍の特徴について述べたが光州民衆決起で民衆に銃口を向けた軍の存在意義は今、大きく揺らいでいる。

韓国軍の特徴

韓国陸軍の組織



第二部

高まる学生運動と軍のクーデター

ソウルから光州へ



一、学生運動、政治要求を掲げ街頭へ

五月に入って、これまで慎重に学園民主化要求を中心に運動を進め、学内デモにとどまっていた学生運動は、政治的要求を前面に立てて学内から学外デモへと大きく戦略を転換した。

この大転換のきっかけは、四月二十九日の全斗煥の記者会見にもとめられる。

「四月二十九日、全斗煥は新聞記者たちのインタビューを受けたが、それが発表されると学生たちの憤りがついに爆発してしまった。彼は朴政権の時と同じような口ぶりで、学生たちを『没知覚な政治勢力による汚染』から守らねばならないといった。金載圭氏に対しては、『父を殺した子』であるというべきであるのに、宗教人たちの助命運動はまさに『道徳的退廃と倫理感の抹殺を立証する行為』であるといった。そして北の脅威を強調し、間もなく朴正熙氏の追慕事業が起され

るのであるとすら語った。その全体が朴正熙維新体制を誇らしく継承してゆくという内容であり、これからの国政は自分が存在するという自信をほめかしたものであった。ここで学生たちはいままでの学園内における民主化闘争に一応区切りをつけて、国家政治の民主化を叫び、全斗煥の退陣を要求することに戦略を変えていった」(T・K生)。

全斗煥のこの声明は不吉なひびきを帯びていた。朴以後をめぐる権力者グループ間の暗闘のなかではじめて、朴正熙そのひとの路線と体系をそのまま再興するという決意が、軍の力を背景にして宣言されたからである。朴を倒し、朴以後の情勢流動化をきりひらいてきた民主勢力の一切の成果が正面から挑戦をうけたのである。

これにつづき、四月三十日、戒厳司令部は全軍戒厳司令官会議を開き、最近の学園闘争などについて対策を協議した。この会議の席上、李司令官は「一部学生と政治家が根拠のない事実を流布、特に学園を政治家

個人の政治宣伝の場に利用している」と述べ、「最近の社会的混乱は放置できない。国家安保の次元で断固たる措置をとる」との方針を決定した。名ざしこそしてはいないが「一部政治家」という言い回しはあきらかに金大中氏に向けられていた。

この二九、三〇日の軍の露骨な政治介入、運動に対する弾圧姿勢は、起ち上がるべきときがきたことを学生たちに告げるものであった。

ソウル大をはじめ各大学では、それまで男子学生の入営訓練——一年生を全員二週間兵営で訓練する——反対の闘いがもえさかっていた。これは朴政権の「遺制」を一掃する闘いの一部として、軍側との激しい思想的対決をはらむものであった。軍は学生は愛国心がないのか、北の脅威を過少評価するのかと攻撃し、学生側は「安保」のためには「民主」が優先すべきだと反論していた。

ところが五月二日、ソウル大の学生たちは突如として入営訓練に応じるときめ、五月四日には男子一年生

は校門前から学友たちの見送るなかをバスで一斉に兵営に向かうのである。これはあきらかに学生運動を学内闘争から一旦自由にし、全国的政治闘争へのとりくみを容易にするための布石であったろう。新入生たちは五月半ばまでには戻ってきて、闘いに加わるだろう。ソウル大につづいて各大学は一斉に入営訓練をうけ入れたのである。

キャンパスから街頭へ初めてデモを敢行したのは、忠清南道大田市にある国立忠南大である。五月一日午後、同大生三〇〇名の学生が戒厳令解除、学園民主化などを求めて学内で集会とデモを行なった後、夕刻、約一〇〇〇名以上が学外に進出、警察署、大田駅など繁華街をデモ行進した。学生たちは警官隊と激しい投石戦を演じ、警官四名、教授一名、学生七名の計一二名の負傷者(警察側発表)を出した。

一方、首都のソウルでも、軍事教練問題で闘争が続いていた私立成均館大で、同日午後六時頃、約一五〇〇人が学内デモの勢いで正門の機動隊の阻止線を突破、街頭に飛び出した。

同じく国立ソウル大でも同日、復学生三〇〇名が中心になり戒厳令解除、労働三権保障などを求める集会を開き、約一五〇〇人がデモ、校門で警官隊とにらみ合った。

この日を皮切りに、学生の運動は新しい局面に入り、以後連日、全国各地でデモが相次ぐことになる。

五月二日、学生デモは、ソウル、大田に続いて全羅北道にも波及、反政府色を一層明確にしてきた。この日、全州にある国立全北大生約一〇〇〇名は、非常戒厳令の解除、維新残存勢力の一掃などを要求して学外デモを行ない、近くの交番に押しかけて警官隊と衝突、警備用車輛を焼いた。

ソウルでは前日の五月一日に続いてこの日も成均館

大生一五〇〇名余が、大学近くの街頭で機動隊と衝突した。

国立ソウル大では、全学ほぼ根こそぎ動員で二万人の学生が大学本部の図書館前広場で大集会を開き、戒厳令の解除、過渡期間の短縮などを要求する学内デモを行ない、さらに全斗煥のワラ人形を焼いて決意を示した。

同大では五月二日から三日までを「民主化闘争期間」と定めていた。この日はその出発点として「民主化総会」が開かれるのである。この「民主化総会」では、

- 一、非常戒厳令の即時解除
- 二、政府主導の改憲徹底阻止
- 三、政権維持のための欺瞞的な安保論議粉砕
- 四、維新残党勢力の追放
- 五、労働三権の保障

などを要求する「時局宣言文」(資料参照)を発表した。キャンパスでは約四〇〇〇人の学生が徹夜の座り込みに入った。女子学生は「炊き出し」をした。翌三日には、維新体制への反対を明確にするため、朴大統領の直筆の書に火をつけた。

ソウル大生の運動はすぐに同じソウル市内の名門私立校、延世大学にも波及した。同大学はことし創立八五周年に当たり、五月三日から五日まで盛大に創立記念祭が行なわれる予定だった。だが学生たちは臨時学生総会を開き、「今はお祭りのときではない」として一切の記念行事をボイコットして民主化闘争期間にかえることを決定した。

この三日を前後して各大学では学生多数が校内に泊り込み、毎日のように学内デモと討論会が行なわれるようになった。スローガンも統一され、次の三大要求にしばられていった。それは、

一、戒厳令の解除

二、申鉉禧首相、全斗煥KCIA部長の退陣

三、過渡期の政治日程の短縮

この三大スローガンは一日の五万人デモまで学生たちの一貫した要求となったのである。

その後、一二日までの全国各地での大学生の闘争について日誌風に追ってみよう。

「五月四日」 日曜日にもかかわらずソウル大、高麗大などで学内集會が開かれる。

「五月六日」 ソウルの韓国外国語大生一五〇〇名、「民主化促進大会」を学内で開いた後、学外デモに打って出るが、すぐに機動隊に阻止され、構内に押し戻され、ついで徹夜座り込みに入る。全北大生三〇〇〇名、デモで逮捕された学友の釈放を要求して学内座り込み、東国大生七〇〇名、校内前で警察と衝突。延世大生約六〇〇〇名が集会、たいまつデモや全斗煥、崔大統領、申首相の三人形を焼く「火刑式」を行なう。

この火刑式では「切頭漢」「最旧悪」「新現悪」(全斗煥、崔圭夏、申鉉禧のあて字)という名をワラ人形につけた。総長はたいまつデモのとき学生が手にしているたいまつに火をつけた。延世大に隣接する梨花女子大でも全学集會が開かれ、五月を「民主化月間」として長期闘争を展開する方針を決定。韓国神学大では一〇〇名が徹夜祈禱会。

「五月七日」 全土で七大学、一万五〇〇〇人がデモ、夜には韓国外国語大の学生八〇〇〇人が学内デモの勢いで街頭に進出、警官隊と衝突、一三三名が連行される。

「五月八日」 延世大二〇〇〇名、梨花女子大一〇〇〇名学内デモ、圓光大(仏教系)五〇〇名デモ。淑明女子大では二五〇〇名が校内でデモ、非常学生総会を開く。その他国民大、東北大、ソウル獣医大でもデモが行なわれる。

「五月九日」 学生デモは政府当局の警告にもかかわらず

らずますます激しさをまし、教授会の学生支持決議発表の波も次第に広がる。ソウル大では約一〇〇〇名が学内デモの後、街頭に出ようとして校門前で警察とにらみあう。同大大学院生も一〇〜四日まで「大学院生民主化期間」として一〇、一一の両日、徹夜ろう城を決議した。延世大も二〇〇〇名が学内集会、梨花女子大では、学生三〇〇〇名と教授陣一〇〇名がキャンパス内で政府糾弾大会を開いた。檀国大学(ソウル)では学生約三〇〇〇名が学内集会のあと校外へ出ようとして警官隊と衝突。さらに地方の釜山大でも一〇〇〇名の学内デモがあった。

これらはマスコミが取り上げた動きであり、実際の学生の運動はより多くの大学で、もっと広範囲な規模で繰り広げられたと思われる。

全国政治闘争への転換は「すべての行動を民主的討論の未決定する」(T・K生)という学生運動が長年の苦闘のなから身につけた方式に従って行なわれた。この大衆討論のなかで、「まったく政治意識がなかった下級生たちも意識化され」(T・K生) 起ち上がって来るのである。

学生たちはまた民主化についての自分たちの主張を叫んだだけではなかった。韓国民衆全体の一部として、民衆の各階層とともに闘うというのが全国的政治闘争にのぞむ学生の確固たる姿勢であった。一九八〇年代の韓国の学生運動は「民主化」時代にふさわしく、徹底した民主的、集团的討論、戦略、戦術における公開性、規律だった集団行動をその基調としていた。

「警察と対峙しては、警察の賃金を引き上げよ、警察に危険手当を支給せよ、とも叫んだ。皮肉でもあったが、彼らも貧しい庶民であるのに、どうして悪政の手先になってそれほど残忍になるのかという、悲しみのこもった訴えであった。デモ解散の時には警察ととも

に愛国歌を歌ったこともあった。集体訓練のために入営する一年生たちは、そのパスが街の人ごみの中を通ると、民主化のビラをばらまいた」(T・K生)

二、教授団と知識人の合流

こうして学生たちの闘いは民主化をもとめるすべての人びとをゆさぶり、行動に起ち上がらせた。なかでも多数の教授たちは、学生の真剣さとうたれ、態度をおきらかにした。学生の闘いを前にして多くの教授たちは、自分たちが黙っていることは許されないと感じた。特に、大学教授たちの起ち上がりは重大な意味をもっている。二〇年前に、李承晩独裁に最後のとどめをさした四月二十六日のソウル市内の教授たちのデモだったことを思いおこせば国民、学生、政府に与えるインパクトはきわめて大きい。

「政治家は自分の貪欲に汚れているが、学生たちはすばらしい。彼らが目をそむけるような政治であってはならない。彼らがあのように自制しながら発言している念願に、誠実に耳を傾けようとしな政治は生き残れないと思う」(T・K生)

こうして学生の民主化運動に合流し、学生を支持する声明が次つぎに各大学教授団の名で出されはじめた。それは朴独裁時代、学園の維新化をふせくことができず、沈黙を強いられた大学教授たちの痛切な自己批判であったし、二度と朴時代に逆戻りさせてはならないという彼らの決意の表明でもあった。

五月七日、ソウルの延世大学の教授約五〇〇人は、民主化促進、戒厳令の早期解除を求める宣言を発表した。「全国の民主化のための声明」と題するこの宣言は、李宇柱学長をはじめ、同大教員四九四名のほとんどが出席した学内集会で決議され、同大学部評議会

の名で発表された。学生らの民主化要求に呼応した形の同宣言は、現在の学生の運動を支持し、今日の学生の動きを、「非民主的だった故朴大統領体制下で抑圧されていた思考の解放」であると評価した。

同じ日、韓国外国語大学、梨花女子大の教授も声明を発表、戒厳令を早期に解除し、民主化を促進することを求めた。

同じ五月七日、金大中氏、尹潽善元大統領領「民主主義と民族統一のための国民連合」は、「民主化促進国民宣言」を発表、学生への支持を表明するとともに、四月一四日、国軍保安司令官在職のままKCIA(韓国中央情報部)部長代理に就任した金斗煥将軍と申鉉碩首相の即時退陣を初めて公然と要求した(同宣言は資料参照)。

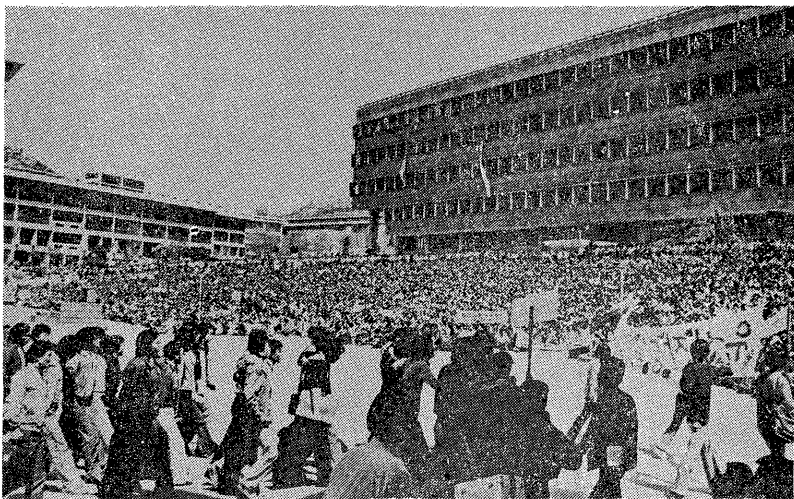
「偉大な民衆の時代、民主主義と民族統一の新時代がまさにわれわれの目の前で開かれようとしている。四月革命以来過去二〇年間、外ならぬこの新時代を誕生させるため、血と汗と涙、そして生命さえも捧げるあらゆる困難と犠牲を冒し、不撓不屈の民主・民権闘争を展開してきた各界各層の民主愛国市民たちに訴える」

——との書き出しで始まるこの宣言は、維新残党の露骨な独裁延長策動と、高揚している労働者、青年学生たちの闘争は「民主主義と民族統一の新時代を誕生させる最後の陣痛」であり、この「民族史の決戦場に合流せよ」と激しい語調で呼びかけた。

またこの宣言は、七項目の要求の一つとして、言論報道機関は歪曲報道をやめ、自由な言論のための闘争に起ち上がることを訴えた。この訴えに呼応するかのよう報道の自由を要求する言論人、記者の運動が起ってきた。

きっかけとなったのは中央日報の白紙記事事件であ

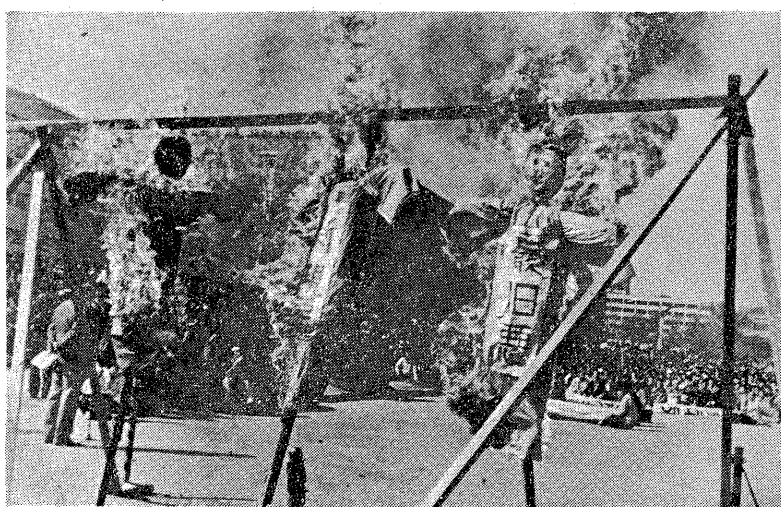
る。韓国の有力夕刊紙、中央日報は五月七日付第一版(拿版)社会面の一部を白紙のまま発行した。これは四月二一日に発生した江原道金北村の東原炭鉱労働者の闘争を取材中の同社記者が戒厳司令部捜査員から暴行を受けて重傷を負う事件が起こった。この事実を報道しようとしたところ、戒厳司令部の検閲で掲載禁止となったので、同司令部への抗議と報道の自由の保証を要求して白紙のまま発行したのである。中央日報の記事



一万を越えるソウル大の構内集会(5・2)

者約二〇〇人は、戒厳当局の記事差し止めに抗議して、七日夕から八日朝まで本社編集局内で徹夜の集會を行ない、「自由言論実践運動を展開する」との決議をあげた。

五月九日には、この中央日報記者への戒厳当局の暴行事件、白紙記事掲載事件を契機に、言論の自由を要求する声は、合同通信、東亜日報、京郷新聞、キリスト教放送などにも拡大、韓国マスコミ界全体に波及し



金斗煥、崔圭夏、申鉉碩のワラ人形を燃やす(5・6)

ていった。同日夜、記者集會を開いた合同通信など四社は、①正当な取材活動、事実報道で記者が妨害されることを拒否する ②非常戒厳令の早期解除を要請する ③自由と民主主義のために解職された言論人の復職を求める——などを決議、今後、ほかの言論機関にも呼びかけてマスコミ界全体の統一要求として戒厳当局に受け入れを迫ることを決めた(時事電)。

文字通り、「民族史の決戦」に向けて、学生、労働者、民主人士、言論人たちは合流を始め、維新残党勢力の一扫に向けて巨大な民衆の闘いの渦が全国各地で無数にうずまいてきたのである。

三、ソウルと全国での対決

五月一四日に全国一〇万、五月一五日に全国一五万、ソウルだけで一〇万の大デモは、朴死後半年余、遅々として進まない民主化に対する民衆・学生の怒りの爆発であった。

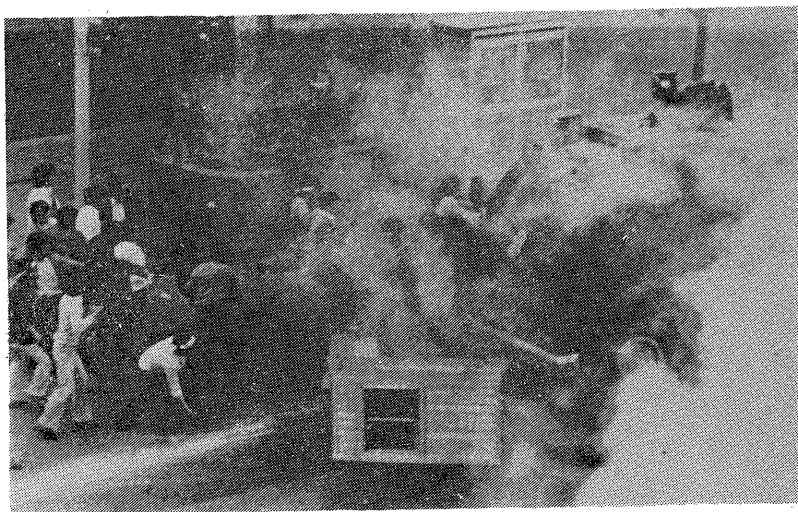
学園民主化闘争の中で学生会(自治会)を各大学で組織していった学生たちは、互いに横の連絡を取り合い、共同闘争をめざして準備を進めてきた。

ソウル大学、延世大など全国の二六大学の学生会会長たちは一二日、一同に会して協議した結果、声明を發表し、「学生たちの行動を社会的混乱として扱う当局の態度を否定する。われわれは正常な授業を受けながら非暴力的、平和的に行動する」と述べた。これは五月一〇日、全国大学学長會議が行なわれ、政府側が、「事態が悪化すれば休校令を發動する」という強硬な姿勢をうち出してきたのに対処し、政府側に口実を与えないようにするためであった。大学ではその日、朝から正常な講義が行なわれた。

しかし、この決定は翌日くつがえされた。その理由



は、日本の報道機関が伝えるような「強硬派と穏健派が対立、強硬派が押し切った」というものではない。同大学の学生たちによれば一二日夜から一三日にかけて学生リーダーの姿が突然消えてしまったという。おそらくは連行されたのであろう。これに気づいた延世大の学生たちは、抗議のためデモをしながら、隣接する梨花女子大の裏門に入った。梨花大生はこの延世大学のデモにおどろき、連合会議決定に反していると説

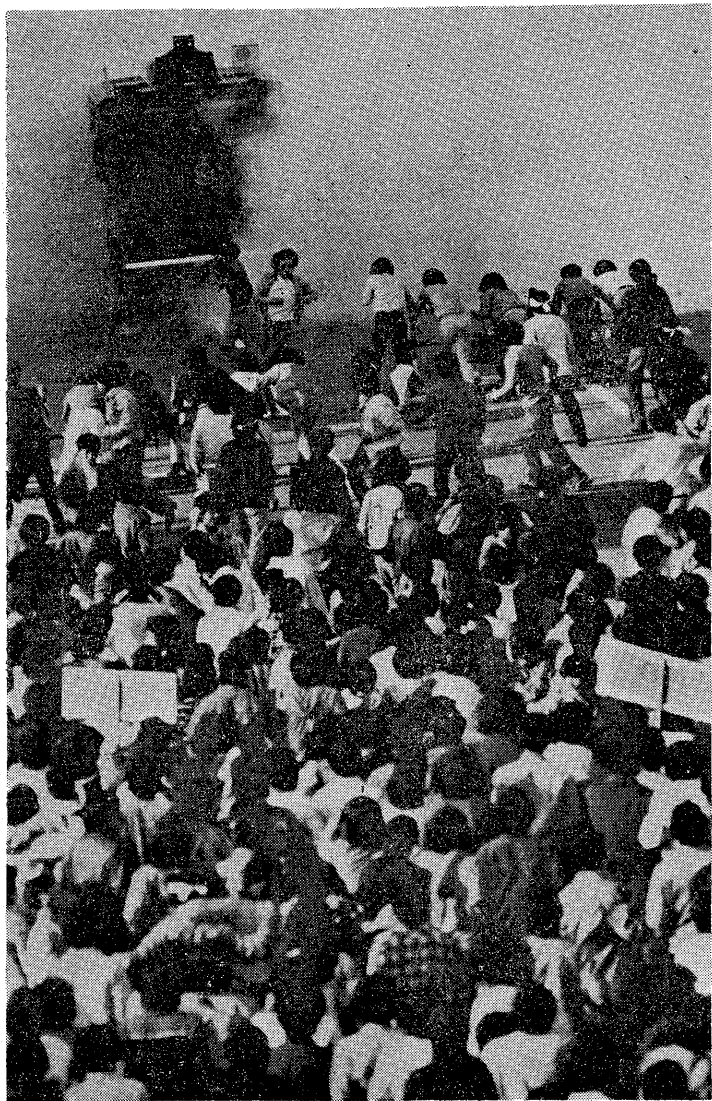


得、このため延世大生たちは平和的に自分たちの大学キャンパスに戻ろうとした。この時、待機していた機動隊が延世大生に襲いかかり、学生たちはめっちゃくちゃに乱暴殴打された。この事件が引き金となり、一三日午後、延世大生約二〇〇〇名が街頭に押し出すことになる。彼らは約四時間にわたり激しく警官隊と衝突、催涙弾と投石の応酬で双方数十人が重軽傷を負った。すでに矢は放たれ

の警官隊と対峙、学生多数が負傷した。学生たちは夜一〇時近くになっても約四〇〇〇名がソウル駅前、ソウル市庁前にとどまり、中央庁へ向けて前進した。これに対し当局側は、全警察力を中央庁へ通じる世宗路へ集結させ、なんとか学生たちの前進を抑えた。ソウルだけでなく学生のデモは全国各地で展開された。全斗煥の出身地である大邱市でも嶺南大、啓明大の学生約一万二〇〇〇名が夕方から夜にかけて激しい街頭デモを展開した。

翌一五日、学生の決起はさらに広がり、大規模とな

った。デモ参加者は、報道によるとソウルで五万人、地方で三万人と伝えられたが実際にはその倍、実にソウルだけで一〇万人、全国で一五〜一六万人であった(韓国問題キリスト者緊急会議に届いた情報という)。ソウル市内の学生はこの日午後二時過ぎ、各大学で一斉に学外デモに移った。学生たちはあらかじめの打ち合わせをしていたソウル駅前広場に続々と集結、午後五時ごろには一七車線もある広い駅前広場を占拠、道路を埋めつくし、南大門にまで人波はつなげた。警察側は学生デモにペッパー・フォッグ(催涙ガス)を



学生たちは激しく機動隊と闘った(5・14)

た。夜に入って、ソウル市内の延世・高麗・西江大など七大学の学生約七〇〇名は、ソウル市中心部光化門の世宗文化会館前に集まり、戒厳令の早期解除要求などのシュプレヒコールをあげながら、スクラムを組んで約一キロ離れたソウル市役所付近まで駆け足デモを行なった。この日の夜間街頭デモは、時刻と場所を事前に打ち合わせ、夜の雑踏にまみれて決行したものであった。

この日の深夜、全国三三大学の学生代表は高麗大学学生会館に集まり、夜を徹して論議し、口先だけの民主化を繰り返す政府に抗議して「全国の大学生は一四日午前から一斉に学外に出て街頭デモを展開し、民主化闘争を一層積極的に進める」ことを決定した。

こうして朴死後の民主化闘争は学生の行動的イニシアチブのもとに一四・一五日、決定的な局面へと突き進んでいった。一四日、前日の学生代表者会議の決定を受け、全国の大学生約一〇万人は一斉に街頭へ、民衆の中へと飛び出した。

一四日、ソウルでは、午後一時過ぎ頃、高麗医学部の学生約四〇〇名が「戒厳令解除」、「崔圭夏政権退陣」を叫びながら警備網を突破して市街地に出たのをきっかけに、デモはソウル市内のほぼ全大学に広がった。午後二時過ぎ、デモ隊がバゴダ公園にさしかかるとソウル大生など各大学の学生が合流、デモ隊はたちまち約一万人に膨れ上がった。二時過ぎ、駆けつけた警官隊が催涙弾を撃ち込んだが学生たちは石を投げるなどして激しく抵抗、その間多数の学生が連行された。

一方、ソウル市南部の永登浦付近では午後二時すぎ、ソウル大生、中央大生ら約七〇〇名が、真赤な弔旗と「維新残党」と書かれたひつぎを先頭にデモ行進した。また延世大、西江大の学生約三〇〇〇名は午後二時すぎ、学内からソウル駅までデモ行進し、規制

発射し、警棒で乱打するなど激しい弾圧を加えたが、南大門周辺ではこれを見ていた多くの市民が学生に味方し、警官隊に投石した。

この間、何者かが市内バス二台を乗っ取って警察機動隊に突入、機動隊員四名が重傷を負う(後日、一人死亡)という事件が起きた。この日、定例の民間防衛訓練は中止された。

この一三〜一五日のデモの特徴について、韓国問題キリスト者緊急会議に届いた「ソウルからの声」は、この日のデモが、日本の報道機関が伝えたような「暴動化」とは全く違った、高度の規律に貫かれた闘争であったことを伝えている。

「デモの特徴の第一番目は学生主導型のデモで、その非暴力的方法、集合場所、集合、解散時間ともきわめて組織的であり、計画的であり、秩序をもったものであった。このデモの先頭には一〇〇〇人の神学生と五人の教授夫人、学生の母親たちが参加しており、平和的なデモであった、これに対し、火炎ビン、投石等の力の行使はまず機動隊と軍隊、雇われ暴力団の挑発から始まったのである。学生側はこれに対抗するため、市民の運んだ石を散発的に投げただけであった。例をあげれば市庁前広場に集まった大ぜいのデモに対してちょうど向かい側にある二二階建てのプラザホテルの屋上から火炎ビンを投げたのは、これら暴力団であった。学生たちが火炎ビンを準備した事実はないといわれる。また、学生たちがバスを乗っ取って機動隊員一人を引き殺したと伝えられるが、実際には運転していたのは群衆にまじっていた暴力団で、学生はむしろこの何者かわからぬ者を警察に引き渡している(そして、この人物はただちに警察によって釈放されている)。

こうしてはじまった騒乱状態の中で、機動隊、軍はデモ隊におそいかかり、棍棒で後頭部を打つけて強く

殴打、二人の学生は目がとび出したほどであった。一三〇一五日のケガ人は少なくとも三〇〇〇〜四〇〇〇人、逮捕者一〇〇〇人で、当局発表ではほとんど釈放と発表したが、帰ってきた学生の姿をみたものはいないという(ソウルからの声)

こうした当局の弾圧と挑発行為を考慮し、さらに政府側の今後の対応をみまもるため、学生達は代表者緊急会議を開き、自分の間、「全民族の利益のために」と(UPI電)デモ中止を決定した。だがこのとき、わずか二日後に怖るべき事態が迫っているとは学生たちも予想していなかった。

学生たちは、流動する情勢のなかで一旦引き、五月二日、ふたたび大規模な街頭デモに打って出ること計画していた。

しかしすでに、内閣や国会や政治家の背後で全斗煥の謀りごととは急速に進行していたのである。

四、政治の背後での無気味な布石

それまで崔・申政権は一貫して「政治発展(民主化)に努力している」と表明してきた。だが、一方では学生、労働者の闘争を「騒じょう事件」呼ばわりし、一部不穏分子の煽動によるときめつけ、軍の直接介入による弾圧さえほめかしてきた(四月一日の崔大統領特別声明、四月三日の李戒厳司令官の声明など)。

つまり妥協的姿勢と強硬措置——この組みあわせが、一月以来の政府側の民衆運動にたいする基本的対処法であった。そして民衆運動は、この妥協的姿勢を一層引き出し、強硬措置を後退させることに運動の狙いをさだめていた。朴体制の清算を、味方を極大化し、軍を中心に強力に残存する朴体制の根幹部分を孤立させ、戒厳令を撤廃させることによって民主化を推

進するという構想であった。学生を中心とする一五万のソウルのデモが巨大な民衆の力を示威した五月なかば、韓国政府における妥協と強硬の振り幅は、一見急速にはずみをつけ、大きくなっていた。

すでに強硬路線は、前記の全斗煥の「朴体制再確立」——ただし朴なしの——をにおわす声明によって、公然とうちだされてきた。

他方、民衆にたいする妥協姿勢と、民衆勢力への迎合の姿勢も、民主化をもとめる民衆の力の高まりにつれて目立ちはじめた。

崔圭夏大統領が、中東公式訪問旅行へ出発した五月一日、韓国政府は重大な政治争点となっている憲法改正問題について、野党側の主張に対し大幅に譲歩、国会が作る新憲法案をほぼ全面的に受け入れるの方針を発表した。そしてこの方針に従って、二日から全国一〇カ所で開催する予定だった政府主催の公聴会を取り消す考えであることを表明した。

だが同じ一〇日午前、政府は全国八五大学の学長をソウルに召集し、緊急学長会議を開いている。政府側はこの会議で「事態悪化の場合は休校令を発動する」という強硬措置を打ち出した。

このときの金玉吉文相の行動にも注目しておこう。彼女は前梨花女子大総長で閣僚のなかでは学生運動に最も理解がある人物とみなされていたが、このときは「病氣」のため休暇をとっていた。だが休暇中の金文相は大学総長会議にふらりと姿をあらわし、政府の方針である休校令には一言もふれず、かえって「学園問題は学園内部で自主的に解決されるべきである。今日は特別の指示はない」とあいさつしてさっさと立ち去ったのである。この文相の個人反乱劇ともいえるべき行動は、すでに権力内部で何事かが進行してお

り、内閣内部にも超えがたい意見の相異がおこっていたことを示唆している。

すでにこのころ、妥協と強硬の使いわけというレベルを超える何事かが、内閣や大統領などの手のとどかないところで進んでおり、「休校令」は、この舞台裏から打たれたひとつの布石であったとみることができ

る。だが決定的な布石は、五月二日、つまり学生側が平和的デモの方針を出した朝にうたれていた。この朝、閣僚たちは緊急閣議に招集され、その席上、国防当局から奇妙な報告を聞かされた。「ある友好国から北の侵略の可能性が高まった」との情報を得た」とことが報告され、それにもとづいて政府は軍を非常警戒態勢におくことを決めたのである。「ある友好国」が米朝でないことはあきらかである。米朝はこの報告をうけとるとすぐさま、翌三日、国務省を通じて「北朝鮮内に異常な部隊移動はみられないし、韓国に対する何らかの攻撃が切迫している」と信じ得る動きもない」と声明したのである(ワシントン発 読売。「友好国」とは日本をさすことがほめかされていた)。

もっと奇妙なことは、二日の夜、米国務省が「在韓米軍巡視兵が同日朝、正体不明の集団から発砲を受け、交戦した」と発表したことである。米軍の一三日の発表からみて、北朝鮮側に異常な動きがなかったことがはっきりしているとすれば、この「正体不明の集団」とは何者であろうか。密命をおびた韓国軍の一部としか考えられない。これが「切迫する北の脅威」を自作自演する軍の布石の一部であった確率は高い。

ニセ情報はしかし軍の目的には充分役立った。ニセ情報にもとづく二日朝の緊急閣議の決定を実行するという形をとって、戒厳司令部は同日深夜、戦車と部隊をソウル市内に移動し、さらに全国の警察官に対

し、非常勤務体制に入るよう指示を発した。「何事か」の準備はこれではほぼ終わったのである。

しかし表面上は、事態はしばらく前と同じように行っていた。全国一五万の学生デモが繰り広げられた一五日夜には申鉉禧首相は特別談話を発表し、「政治日程中、繰り上げられるものは最大限繰り上げる」と、学生側が要求している民主化促進に答えるそぶりを示した。だが、その一方で彼らは陸軍部隊六〇〇〇人をソウル市郊外に集結させて、さしせまる死の飛躍を準備していたのである。すでに述べたように学生側は一五日夜、自分の間デモを中止する決定をだした。これは申内閣が民主化促進の約束を守るかどうか見極めるためであった。

だが学生と民衆への政府当局の回答は一八日午前零時を期して宣言された戒厳令の全土拡大と、一七日深夜からの活動家の一斉逮捕という閣議であった。

五、全斗煥の死の飛躍

5・18 クーデター

五月一六日、それは一九九年前、朴正熙が軍事クーデターを執行し、実権を掌握した民衆にとつての屈辱の日である。この日は前日とうってかわって、いたって静かな日となった。学生たちはキャンパスに戻り、昨日のデモの様子を互いに話し合っていた。全国五五大学の代表九五名は梨花女子大に集合、「第一回全国大学総学生会長団会」を開き、徹夜で今後の運動の方針を討議していた。

だが、それは暴風が吹き荒れる前のほんのつかの間の静かさでしかなかった。

五月一七日、崔、全、申ら維新残党勢力はいよいよ本性をあらわにした。同日午後六時、戒厳司令部は梨

花女子大へ警官隊一〇〇〇名を急派、会議中の学生代表を相次いで逮捕、さらに午後九時半から緊急閣議を開き、一八日午前零時を期し、戒厳令を全土に拡大、布告第一〇号を発布し、一切の政治活動の禁止、集会、デモを禁止、全大学を休校にすることを宣した。そして深夜、金大中氏をはじめとする多くの民主人士、学生、労働運動の指導者、キリスト教関係者を急襲し、乱暴連行、拘束していった。中央官庁、新聞社の前には、戦車が配置され、大学構内に戦車が入り、校門は着剣した兵士によって固められた。

戒厳令の全国的拡大というかたちをとった全斗煥の軍クーデターは、形式上は閣議で決定されたことになっている。だがその閣議がどのようなものであったかを、五月二〇日、金玉吉文相が「ワシントン・ポスト」紙のインタビューに答えて語っている。

一七日夜、閣議に出席するため「閣僚が国会議事室に着くと議事室はもう完全に軍隊に包囲されており、外部との電話連絡は切断されていました。議事室のなかでは兵士たちが廊下に並び、閣僚はその間を通過して部屋にたどりつきました。申首相が槌を叩いて閣議を開会しました。周国防相が短い声明を読みあげ、北からの脅威があるので戒厳令を拡大しなければならぬとべました。首相がもう一度槌を叩き、閣議は終わりました。大臣はみな声明に署名し、立ち去りました。この間二、三分しかかかりませんでした。」

閣議に先立ち、戒厳司令部は午後一時から全軍指揮官会議を開いていた。戒厳令の拡大はこの場で決定され、後は形式を整えるだけであった。気がついたときには内閣は一切の権力を奪われていた。権力は全斗煥將軍を筆頭とする軍部に移行していたのである。

ではなぜ全斗煥らは五月一八日を期してクーデターをやらなければならなかったのでしょうか。全らが以



梨花女子大から連行される学生代表(5・17)

この闘いが爆発すれば、いまだに温存されていた朴体制の根幹がふっとぶかもしれない。そして大衆の圧倒的支持をあつめている金大中のような政治家だけでなく、民衆の動向に迎合して生き残ろうとする金鍾泌やその他の維新残党も加えて、われもわれもと朴体制の払拭を言いはじめ、政治の基軸はこのような状況を規定する民衆の力によってどしどし民主化の方向に押し流されるかもしれない、いやそうなるだろう——これが朴正熙を「おやじ」とよぶ全斗煥とその一派の危機感であった。もはや個々のデモや争議を弾圧するだけでは足りない、人びとが勝手なことを言いはじめたその状況自体を掃しなければならぬ。こう感じるところまで、民衆の闘いはこの朴体制維持派、つまり「国体維持」派を追いつめていたのである。

全斗煥一派にとって事は急を要した。五月二〇日には朴正熙の死後閉ざされていた国会が開かれる予定となっていた。この臨時国会では、新民党ばかりでなく金鍾泌の率いる与党民主共和党から戒厳令解除決議が出され、可決されるはずであった。もしこの決議案が国会を通ると大統領は戒厳令を解除しなければならぬ。そうすれば、全斗煥派ばかりでなく全体としての軍部の力は大きく後退する。全斗煥はどうしても国会が開催される前に事を起こさなければならなかったのである。全斗煥派は戒厳令を解除し、彼らが国会の門を統制できなかったため、新民党だけでなく与党の民主共和党本部を封鎖、二〇日登院しようとした国会議員を台じりて殴り、押し返すという暴挙を働いたのはこのためである。

- 宣布された戒厳令布告第一〇号の内容は、
- 一、すべての政治活動、政治集会、デモの禁止
 - 二、言論、出版、報道、放送の事前検閲
 - 三、全国の大学の当分の間の休校
 - 四、職場離脱、スト行為の禁止

元KCIA部長・元駐日大使 朴鍾圭(国会議員・元大統領警護室長) 金致烈(元内相・前法相) 金振晩(国会議員・元国会副議長) 李世鎬(元陸軍参謀総長) 張東雲(元援護処長) 吳源哲(前大統領秘書室長) 第二首席秘書官)

全斗煥派は一方では民主化闘争の指導者を根こそぎ逮捕することによって運動の終息をねらうとともに、他方では金鍾泌、李厚洛などの政界実力者を不正蓄財容疑で一掃し政敵の追放をはかった。政敵との闘いを「綱紀肅正」の名分のもとに強行したのである。さらに逮捕者の中には前記の発表以外に李秉禧国会議員が含まれている。彼は韓日議員連盟幹事長、韓日親善協会幹事長であり、一年のうち半分近くを日本にいてという日韓の黒い関係のパイプ役であり、「対日工作大臣」と呼ばれている男である。金鍾泌や李厚洛とともに李秉禧が逮捕されたことによって、全斗煥は日韓のこれまでの黒い関係の秘密部分をいわば「人質」として握り、日本政府・自民党に対する「切り札」を手に入れたのである。

逮捕・連行された人々が現在どこにいるのかは全くわかっていない。従来のやり方をみても苛酷な拷問が行なわれているとみてよい。特に全將軍が目のカタキにしている金大中氏の安否が非常に心配される。

五月一八日午後、崔大統領は全斗煥非常戒厳令などの措置について特別談話を発表、「これまで約束した『政治発展』にはならぬ変わりはなし」と述べた。しかし韓国民衆はだれ一人この声明を信じない。一体、戒厳令を全土に張りめぐらし民衆に銃口を向けたままではいかなる『政治発展』があるというのか。たしかに全斗煥ら朴残党勢力は事実上の軍事クーデターを敢行し、武力で韓国民衆を抑え権力を維持することに成功した。全斗煥將軍は政敵を一掃することを成しとげた。

五、流言蜚語の禁止

六、布告違反者の令状なしの逮捕、拘禁、厳罰であった。この中で特に今度の軍クーデターの性格を浮きぼりにしているのは、第五項目の流言蜚語の禁止である。ここでは、わざわざ「流言蜚語でなくとも、現・元国家元首(大統領)を冒瀆、誹謗する行為は一切許さない」としている。つまり故朴正熙大統領に対する批判は(それがいかに正当でも)一切許さないとしたのである。全斗煥は、朴大統領に目をかけられ、榮達の道を歩んだ彼は、朴の「維新独裁体制」を讚美し、故朴正熙を「国父」として尊敬してやまない。この戒厳布告の一項目が今、暴挙の性格を如実に物語っている——つまり「朴なき朴体制」への移行である。

政府当局は、戒厳令によって二六名を逮捕したと発表しているが、それは全くのデマであり、実際には一〇〇〇名をはるかにこえる人びとが逮捕、連行あるいは取調べを受けた。キリスト者を通じてのソウルからの情報によると判明しているだけでも以下のような人々が逮捕された。

- ・三、一事件関係者
 - 文益煥、徐南同、尹攀能、成世雄、李文永、文正鉉、申鉉奉、李海東、金大中(一〇名中九名)
 - ・復学した学生——四〇〇名
 - ・復職した教授——三〇〇四〇名
 - ・金大中氏周辺
 - 七名の秘書ほか七〇名、長男も連行される。
 - ・国会議員——新民党三名
- 他に、記者協会幹部、東亜、朝鮮日報言論闘争委員メンバーなど多くの記者が逮捕された。韓国アムネスティは、事務局長康基鍾以下多くの関係者が連行された。「社会混乱醸成」の容疑で逮捕された人々の中には、金玉吉文相の実弟で延世大学副総長の金東吉氏(5・19)

彼は昨年二月二日の「肅軍クーデター」の敢行で「整備を済ませ」、KCIA部長代理就任(四月一四日)で「滑走路に乗り出した」。そして遂に一七〜一八日の暴挙で「離陸に向けて操縦かんを引いた」(読売5・19)

「ソウルの春」は一転して「厳しい冬」に舞い戻った。しかし自由と民主への熱い想いを抱き続ける韓国民衆はどのような政権下であろうとも決して敗北することはありえないだろう。二度にわたって独裁政権を打倒した韓国民衆の戦いの歴史は、事実をもってそのことを証明している。

「この歴史は決して後には戻れない。朴政権下のように国民を組織して隷従させることはできない。全斗煥は、国民にあまりにも悪いイメージを与えている。彼を中心とした軍部が国民に与える約束などはない。彼らの行為は、ただ国民を裏切る乱動として映るのみである。そのため、かつてのような服従または協力はどこでも決してえられない」(T・K生)

全斗煥軍事政権は、成立したその日に、光州民衆にたいする虐殺を開始することによって、民衆を敵とする「乱動軍」であることを示したのである。そして光州民衆は、おびたらしい犠牲を払いながら、この政権といかに闘うべきかを身をもって示したのである。ソウルから光州へ関いの火は飛び移った。

でが含まれている。こうした多数の民主人士、学生たちと同じく「不正蓄財容疑」で金鍾泌、李厚洛など朴時代からの政界の実力者が逮捕、連行された。

「不正蓄財容疑」逮捕者
金鍾泌(民主共和党総裁・元首相) 金鍾路(コリア・タコマ社会長・金鍾泌実兄) 李厚洛(国会議員)

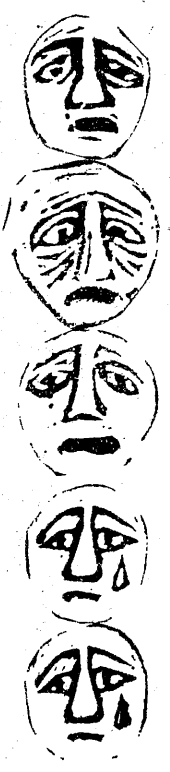
新聞・放送にたいする戒厳司令部の報道禁止・指示事項

- 五月一五日の検閲ガイドライン
- 一、鄧小平が訪問中の日本人議員団に語った「韓半島の安全には心配がなく、北傀の侵犯はありえない」という発言は不可。
 - 一、連行された大学生の総数、全国的大学別統計は不可。負傷または破壊の統計は警察官込みの数字は可。学生負傷者数だけをとりだしたものは不可。
 - 一、知識人一三四名の時局宣言文は不可。金大中の時局收拾策提案は不可(全面削除)(申総理退陣、新民党非主流派は政務議員と会談を要求したことなど)。
 - 一、アメリカの新聞が学生騒乱を大々的に報道した事実可。「ル・モンド」誌の北傀南侵可能性の報道は可(部分削除)。
 - 一、学生騒乱およびデモ鎮圧に軍が介入した、あるいは強硬方針がとられているという報道は可(部分削除)(クーデター発生可能性は部分削除)。

資料

五月一六日の検閲ガイドライン

- 一、学生たちの行為を正当化、支持する記事はすべて原則的に不可。
- 一、成均館大学、国民大学のデモで拘束者家族三名が先頭に立って行進したという記事は不可。
- 一、学生のスローガンのなかで、「不正蓄財をとりもどせ」「金日成は誤解するな」「反共精神異常なし」などは不可。
- 一、デモ現場にいた一部学生が交通整理までしたとの記事は不可。警察は同僚が負傷するや興奮し、学生と肉弾戦にちかい接近戦をおこなったという記事は不可。
- 一、朴・新民党スポークスマンの申総理談話への論評のなかで「しかし今日の事態の悪化に責任ある総理がより真剣で誠実な姿勢をみせなかったのは遺憾」「政府がもうすこし早く新民党の主張に耳をかたむけていたなら、今日の事局の悪化はまねかなかっただろう」などは不可。
- 一、民主統一党の論評は一切不可。
- 一、学生デモにたいする市民の反応の記事中、軍人にたいするコメントは不可。
- 一、西江大学八〇〇名が麻浦警察署の庭ですわりこみデモをやり、連行学生二名の釈放を要求したという記事は不可。



全斗煥のクーデターから光州決起にいたる韓国の情勢に、日本政府はいかなる態度で臨み、何をしたか。

米政府が五月一八日のクーデターにも、光州事態に対しても、五月三十一日の国家保衛非常対策委員会による軍事独裁の完成に際しても、金大中氏の逮捕についても、一言も「遺憾の意」や「憂慮の意」を表明しなかったことである。

光州事態のなかで 日本政府はどこに いたか

この間に日本政府がとった公式の行動は、以下の三つである。

- 一、五月二〇日、一八日の軍クーデターに際し、元アフガニスタン大使前田利一を特命大使として派遣、光州の決起と血の弾圧の期間ずっと訪韓させ、その間、新軍事政権との協議を行なわせたこと。
- 二、前田特使が六月五日帰国すると、入れ代わって木内昭胤アジア局長をソウルに送り(九日)、光州鎮圧後の事態に

ついて軍事政権と協議させたこと。

三、木浦の日系企業からデモ隊によってバスが持ち出されると、ただちに全斗煥政権に正式に「取締り強化」を要請し、釜山領事館から三名を「邦人保護」のため現地に派遣したことである。

これだけである。だが、これらはすべて重要な意味を持っていた。政府公式声明のかたちをとることなく、日本政府は韓国の新しい軍事政権の立場に日本をコミットさせたからである。

前田特使の派遣そのものが全斗煥クーデターを承認する外交行動であった。「不快の念」をあらわすかわりに、特命全權大使を派遣して新政権との接触にあたらせ、しかも光州の血の制圧の翌日(五月二八日)、各国に先がけて全斗煥との正式会談を行なわせたのである。

光州の民衆殺りくが最高潮に達し、民衆が遂に市の全域を制圧した五月二一日、外務省は誰がみても全斗煥のカイライに過ぎぬ朴忠勲内閣を「人心一新を狙った内閣」と呼ぶ。二一日付の『毎日新聞』は「日本の外務省は数日前から(申内閣の)総辞職の情報があつた」と報じている。そして二五日、故大平首相は和歌山で開かれた政経文化パーティで「崔大統領が合法のワケ内で(光州)事態の処理にあつているのは間違いない(サウケイ 5・26)と述べたという。これ

ら一連の日本政府の論法は、外交上の文脈のなかでは、一八日の戒厳令全土拡大以来の全斗煥のすべての行為の肯定、支持を意味する。

五月二七日、戒厳軍による光州制圧が行なわれると、米政府は「またも口先だけだが——遺憾の念を表明した。日本政府のコメントはこうであった。

「光州市中心部の全羅南道庁舎をはじめ公官庁から武装した過激派が排除され、一応政府の管轄下に戻ったことを重視し、光州の秩序回復という点で第一関門は突破した」(朝日 5・27)「日本政府」はかねてから「事態の早期收拾と光州局限化」を願っていたため、ある程度の犠牲は出てやむを得ない措置だった(サウケイ 5・27)全斗煥とともに胸をなでおろしたという「安堵感」の表明である。韓国民衆はこれを何ととるのであるか。

前田特使は六月五日帰国し、伊藤官房長官に報告する。この中で前田特使は「日本としては今後韓国国内の治安がどう確保されるかを注目する必要があることを強調した」(朝日 6・6) 外交官というより公安警察官にふさわしい報告である。木内アジア局長は、あらかじめ予告されていたのであろうか、二六日午前故大平首相に「光州への」軍の実力行使は二六日夜から二七日朝にかけてが最

大のヤマ場になると説明(読売 5・26)している。そして軍の制圧後、韓国での記者会見で日韓関係は今後も変わらない、五月二八日以後も不変であると言明した。

これほど明確な支持の意思表示を、全斗煥政権は世界のどの政府からも受けなかったことはなかった。

六月二七日、日韓連帯運動のグループが日本の対韓政策の転換を要求して外務省を訪れ、八項目の申入れを行なった。一行に会った三宅和助審議官は、ほぼすべての項目にわたって「韓国政府はこう言っております」としか答えず、一行を啞然とさせた。日本政府の見解は、と問うと、「内政不干渉」と「韓国問題は微妙」なので、「いろいろやっているが公表できない」との返事が返ってきた。

何を「いろいろ」やっているのか、想像にたかたかぬ。

ソウルでは「金大中が大統領になるのは望ましくない」という「高島メモ」が韓国政府に渡されたという噂が流れ、金大中氏を死罪に落すかもしれない「中間捜査報告書」作成に日本の公安警察がデータを提供したとする観測も行なわれている。

日本政府は日本を代表する。民衆が民衆の声を届けぬ限り、われわれは全斗煥の盟友とみなされるだろう。

五月一八日、全斗煥が国会を閉鎖し、学生、民主化運動指導者の逮捕を開始し、全土戒厳令を宣言したとき、米國務省はこの軍事クーデターを「憂慮している」と批判的声明を出した。だがこのコメントにはどのような現実の圧力も続かなかったため、全斗煥政権はこれを米国の支持と読みかえることができた。

W・チャップマン記者は「米國は韓國

これは人権問題ではない 米國の國益の問題だ

——光州決起とカーター政権

軍事指導者にいかなる圧力をかけることもしないし、報復措置として米軍引揚げの脅しをかけないことを当地の情報筋は確認している(WP 5・21)と報じている。「米國政府当局者にとって何より重要なのは治安である」(同前)

続いて光州の民衆決起がおこった。五月二三日、カーター大統領は國務長官を交えた韓国問題の緊急協議を行なった。

だがこれに先立ち、米國は二二日、はっきりと全斗煥の殺りく作戦に加担する決定的措置をとっていた。ウィックカム米韓連合軍司令官指揮下の韓國軍部隊を「騷乱地区に派遣」のため全斗煥の自由使用にゆだねたのである。この兵力(おそらく第二〇師団の四個連隊)が、空挺部隊とともに二七日朝の光州攻撃の主力となる。

こうして米國は、韓國の「イラン化」を阻止するため光州民衆蜂起の直接鎮圧に手を貸すとともに、空母コーラル・シーを朝鮮半島海域に回航させ(五月二二日)、続いてミッドウェイを横須賀から出航させ(二四日)、予定を早めて早期警戒管制機E3Aを沖縄に配備(二二日)することによって、北朝鮮と韓國民衆の双方に軍事的圧力を加えたのである。これは全斗煥の国内民衆抑圧作戦への援護の意味を持っていた。

「現実には北朝鮮は復讐主義的政策にこり固まっただけで、それを放棄したことはない。そうである限り、復讐は許されぬことを知らなければならぬ」と國務省スポークスマンのホディング・カーターは宣言した(AP)。同時に北朝鮮に「異常な動きはない」と認めながらである。

D・オーバードーフ記者は、光州事態に関する米國政府高官のことばとし

て次のように伝えている。

「これは人権問題などではない。これは東北アジアに安定を実現し、維持しようとする米國の國益の問題である」(WP 6・1)

米國政府は五月一八(二七)日の韓國軍による民衆虐殺に何の反応も示さなかったばかりか、五月二五日、光州の学生、市民からの悲痛な仲介の呼びかけを無視した。カーターはここで「人権外交」のポーズすら投げ捨てたのである。

それでは全斗煥に対する米國の「憂慮」とは何か——WP ニュース・サーピスは米國政府筋の見方を紹介しながら、次のように書いている。

「抑圧的な(韓國の)体制に関するワシントンの懸念は、米軍が駐留しているこの主要な同盟国が軍隊に乘取られたことに哲学として賛成できない、ということにあるのではない。政策当局者の最も深刻な懸念は、現在のそのような情勢のなかで、全韓國社会に軍事支配を押しつければ爆発的結果が生じ、それが広範な不安定をもたらすかもしれないということである」(5・28)

つまり全斗煥独裁体制でも安定しさえすればよろしいという立場である。ただ、米國は日本政府とは違って、光州事態のより一層深刻な局面を予想し、それにも備えようとしているにすぎない。

光州の民衆の血がまだ乾かぬ六月三日、米輸出入銀行は、ジョン・ムーア総裁をソウルに送り、全政府と新しい借款供与の交渉を開始した。別項のように韓國經濟は失速状況に陥り、七九億ドルの新規外國借款を緊急に必要としている。それなしには軍事独裁は持たないのである。ムーア氏は「韓國への政治的メッセージは一切携えていない」と語ったとニューヨーク・タイムズ紙のストークス記者は伝えている。韓國は米輸銀にすでに三一億ドルの債務をかかえている。

この米輸銀最大の顧客に、原発を中心とする追加投資をつぎこんで經濟をもたせ、全斗煥の下の安定をはかろうという目論見である。

この日、かつて國務省の韓國局長(七〇〜七四年)だったロナルド・ラナード氏は「韓國における米國の恥ずべき記録」という鋭い対韓政策批判の文章を発表した。「米國は長年にわたり強力な韓國をつくるという目標を、人権の犠牲において追求してきた」とラナード氏は言う。

「ワシントンは、韓國の政治發展を、經濟成長と巨額の對韓投資の保護という目的に従属させてきた。……カーターは、人間の尊厳を、誤って認識された地政學的利益的祭壇にささげられた米國歴代大統領のひとりとなったのである」(LAT 6・3)

五月一八日、軍事クーデターに抗議して起ち上がった光州民衆のデモに対して、全斗煥は警察機動隊を総動員し、弾圧を加えた。ここまでは治安行動とみなしうる。

しかしこの日の午後、特戦団空挺部隊

全斗煥の

光州鎮圧作戦

一個旅団三〇〇〇名を急派し、非武装市民への無差別殺りく行為を開始した。ブラック・ベレーと呼ばれる空挺部隊の本来の任務は、戦線の背後に降下し、敵を混乱壊滅させることにある。それはその目的のために編成、訓練された

どう猛な特殊部隊であって、「デモ規制」のためのものではない。

空挺部隊はその本質通りに行動した。敵を文字通り殺すことしか知らぬ空挺部隊の暴行は民衆の上に容赦なくおそいばかり、民衆は心底から怒って起ち上がった。デモは鎮圧されるどころか、市全域に爆発した。これはおそらく全斗煥が意図せぬ結果であった。

この状況に対する全斗煥の回答は再び軍事的なものであった。民衆の力が軍警を圧倒しはじめた二〇日、戒厳司令官は地元師団第三予備師団（一万二〇〇〇名）を投入し、さらに二二日には新手の空挺部隊一〇〇〇〇名と二個旅団五〇〇〇名を増派する。

だが市内での戦闘は全斗煥にとって手のつけられぬものになっていった。動揺し、志気を喪失した警察と、殺人しか教えられていない空挺部隊、地元出身者が多く動揺を深める三師団との混成軍は、次第に道庁などの拠点防禦に追い込まれ、警察による阻止線の背後で軍が守られつつ督戦するという奇妙な陣型が出現する。

遂に二一日、軍は民衆にむけM16による無差別銃撃戦で拠点の最後の防衛をはかるにいたる。これは光州民衆の皆殺し作戦に発展するしかない。だが、民衆はこの日数千丁の火器で大衆武装をするこ

とによって、この軍の作戦に勝ち味がなことを知らしめる。空挺部隊を中心とする軍は光州市内において完全な敗北を喫し、二一日夕刻、撤退するのである。市内で敗北した戒厳軍は外部から反撃に転じる。前記の諸部隊による光州の包囲、封鎖である。光州市に通じる一切の道路は封鎖され、電話線は軍によって切断された。この狙いは、

一、全羅道の都市部を相互に切断し、全道の決起勢力を分断する。
二、ソウルとの連絡を切断し、闘争の全国化を阻止する。

三、光州を飢餓状態に置き、市民の志気低下をはかる。
四、そのうえで降伏か全面戦争かの選択を光州市民に迫る。

ことであつた。この間、政府から市民に対して行なわれた「約束」や「譲歩」はもともと守る気のないものであつた。

二二日までに全斗煥は米軍から強力な支援を受けとる。ウィッカム指揮下の韓国軍使用許可である。三八度線付近から第二四師団（一説には第二〇師団）の四個連隊が米国の承認の下で移動される。

兵士たちは「光州に北のスパイが侵入して光州市民を扇動し、反乱を起こしている、と聞かされて、二日間も食事抜きで猛烈なごき訓練を受けさせられた。こ

のため兵士たちは光州市民のおかげでこのような目にあつてると憎悪の気持ちをかきたてられた」（真相）

全斗煥はすでに二二日、「光州にたいして一大作戦を準備中」と語っていた。

また、「北のスパイの扇動」を引き合いに出すことで、すでに全斗煥は自国の民衆へのこの「一大作戦」を、国家間戦争の文脈に位置づけ、正当化しようとしていた。民衆が光州から北へ越境する危険があると称して、海軍が西海岸を海上封鎖するという陣型は、そのつじつまを合わせるためであつた。

二七日未明、作戦は発動され、破壊工作員の潜入に続いて、戦車と空挺第三、第七、第一一連隊を先頭に、第二四師団を主力とする部隊が市内に突入した（全空挺部隊兵力の四〇%が投入された）。バリエードを破壊するため戦車の主砲が火を吹き、迫撃砲も発射された。武装においてはるかに劣る学生、市民の部隊は道庁、光州公園で三時間にわたる激しい銃撃戦を闘い抜き、遂に潰滅した。勇敢で断固たる戦いだった。軍は「激戦」であつたことを認めた。

民衆は市内の戦いに勝ち、包囲・攻撃戦で敗北した。だが全斗煥はこの血ぬられた対自国民衆戦争の勝利によって政治戦における決定的敗者となつたのである。

第二部

ドキュメント・光州 五月一八〜二七日

血と怒りの街頭から 自由光州が起ち上がる



どうか世界の友人たちに、われわれの闘いと決意について、本当の話伝えて下さい。
（韓国からの声・2 一九八〇年五月三日）

一 はじめに

韓国南西部の地方都市・光州市は人口約八〇万の韓国第五の都市であり、全羅南道の道庁所在地でもある。元大統領候補の金大中氏、抵抗詩人・金芝河氏らの故郷である木浦市は、光州から南西約七〇キロのところにある。

光州はまた、日帝植民地下の一九二九年一月、日本人と朝鮮人の（旧制）中学生のけんかから端を発し、反日の闘いが朝鮮半島全域に燃え広がったいわゆる「光州学生運動」の発祥の地としても知られている。デモ参加学生は約六万人、逮捕された者は一六〇〇〇人にも及んだ。現在も光州市の中心地には反日闘争を記念する塔が建てられている。

光州民衆の五月における「自由光州」を実現させた不屈の闘いは、この六〇年前の闘いを引きつぎ、発展させ、韓国民衆の真の解放への偉大な第一歩を踏み出したものであつた。

光州市の学生たちは五月からの全国的な学生運動の昂揚の中で、国立全南大学や私立朝鮮大学の学生たちを先頭とし、街頭デモを展開していた。

五月一六日夕刻、光州にある全南大学の学生二万人、朝鮮大学の学生一万人、そしてその他数多くの学生たちがそれぞれの方向からいまつデモを行ない、道庁前広場で合流して統一集会を開いた。それは整然としたデモであり、市民たちも続々とこの集会に参加した。

この日、たまたま光州を訪れていた二七歳のある在日韓国人青年はこの日の集会の様子を、次のように語っている。

目の前で展開されたのは約四万人規模のデモ。この日午後二時ごろから全南大など六つの大学、専門

学校学生計約三万人が道庁前広場に集合。座り込みをしたうえ、演壇を作って演説を始めた。座り込みは午後一〇時ごろまで続き、市民約一万人も加わって道庁前広場は完全に占拠状態。機動隊も、座り込みのウズの外から見守るだけでなすすべもなかった。（毎日 5・20）

一六、七日までの光州学生の集会和デモは「民主化時局声討会」という性格のものであつた。カトリック正義と平和協議会にとどいた現地報告「光州の事態に対する真相」（以下「真相」として引用）によると、

非常戒厳令が拡大実施される前まで光州市大が学術は、校内時局声討大会を開き、民主化時局声討会を持つため全南道庁前噴水台に集まり、その後、全南大をはじめとして一〇の大学専門学生三万余名が大規模集会及び焚行列のデモを行なった。多くの学生デモではあつたが平和的なものであつて、警察との衝突すらなかつたのであり、秩序整然と民主化を促

求する意志伝達式であった。学生はこの集会でいままでの示威を終え、政府当局の誠意ある答を待ち授業に専念することを決議したのであった（真相）。

二 民衆決起の発端

空挺部隊の大虐殺

五月十八日

軍と警察は光州の大学を襲い、暴行・殺人を行なう。これに抗議して光州の学生たちは街頭デモに出る。市民も同調する。午後、空挺部隊が投入され、市民に襲いかかる。

一八日午前零時、光州では軍六名、警察一名で一班となった逮捕班が動き出す。深夜に学生生活家と民主運動の指導者たちが次つぎと手荒に逮捕される。全南大学学生指導者鄭東年君、復学生キム・サンヒョン君など多数が殴打され、連行される。

クーデターの真夜中の光州であった。朝があけた。五月一八日午前一〇時ごろ、全南大学構内に入りこんでいる戒厳軍に学生たちが、集会を開いて抗議したところ、戒厳軍兵士は銃剣をふるい、無差別殺傷を始める。学生一名が殺され、約一〇〇名が負傷する。殺されたのは全南大学学生会長であると伝えられる（C.H君の最後の通信）五月二二日午後四時、カトリック正義と平和協議会に送られてきた資料（キャンパス内の衝突の際、これを止めに入った教授が殺された（重傷を負ったという説もある））。

だが五月一八日午前零時、全斗煥は戒厳令を全土に拡大し、クーデターをおこなった。弾圧の嵐は韓国全土に吹き荒れた。光州も例外ではなかった。

この暴行に怒った学生たちはただちに抗議デモのため街頭に飛び出した。これがすべての発端だった。午前一〇時半、全南大生二〇〇名あまり（三〇〇〜五〇〇名という情報もある）が光州市内の繁華街、地方官庁や報道機関の立ち並ぶ錦南路に集まり、「戒厳令解除！」「全斗煥、申致碩退陣！」などのプラカードを掲げ、シュプレヒコールをしながら街頭デモを始めた。

警察機動隊、そして戒厳軍が出動する。デモ隊は戒厳軍と対峙し、投石を始める。昼近くには学生たちのデモ隊に市民が合流し始め、その数は五〇〇名にふくれあがっていった。そもそも戒厳軍は治安訓練に慣れておらず、激しくなるデモ隊の投石に対抗しきれなかった。

空挺部隊の突入によってデモの現場は一変する。空挺部隊は民衆を殺りくする。

民衆の抵抗にあわてた戒厳軍当局は午後に入って、陸軍特戦団空挺部隊一個旅団、約三〇〇〇名を急換派遣したのである。空挺部隊はブラック・ベレーの異名

を持ち、ベトナム戦争においては突撃部隊として参戦し、そのどう猛さで知られた。

一二時ごろ、戒厳軍はヘリコプターまで動員し、学生のデモに向けて催涙弾を発射する。ヘリコプターは地上の戒厳軍と無線で連絡している。市民であれ、学生であれ、人が集まった所を戒厳軍が急襲する。棍棒で殴りつけ、反抗すれば銃剣で刺し、数十名の死者と数百名の負傷者をだす。そして数百名が逮捕、連行されていく。

学生や市民たちは「全斗煥は退陣せよ！」「戒厳令を即時解除せよ！」「金日成は誤解するな！」など

光州民衆は街頭インタビューでこう語った

五月二四日、日本のあるテレビ局が光州市内に入って民衆との街頭インタビューを行なった。解放されて三日目を迎えた光州の街なみは平穏そのもので、民衆は記者を囲み、生き生きとした表情で語った。以下は放送されたものから翻訳したものである。

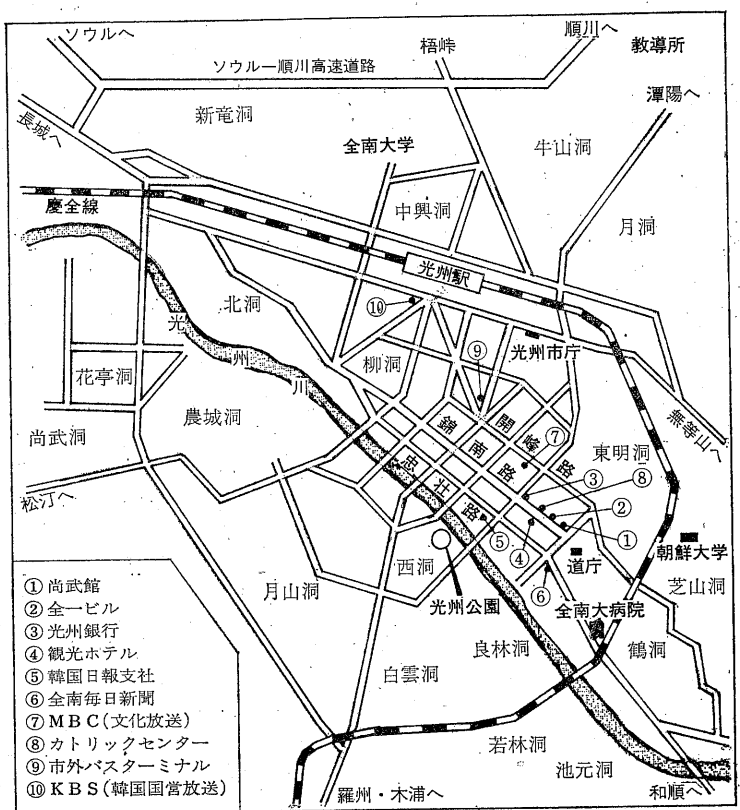
—— どうして平和なデモからこんなにエスカレートしたのかを話して下さい。

老人（男性） 誰が好きこのんでこんなことをするでしょうか。あのようなことを人間として見過ごせなかった、わかって下さい。（立ち去りかけてインタビューに）後でどんな目にあうかわからない。あなた達が私たちの身の安全を保障してくれなければだめだ。日本で放映されても誰だかわかってしまふ。誰かいないか。誰かきちんと話せる人が代わりにしゃべってくれ。

どとどど。忠壮路の派出所など、四カ所の派出所が全破される（警・軍による光州虐殺日誌）。

「注・「警・軍による光州虐殺日誌」は東亜日報の記者団によってまとめられたもので、一九日、二〇日のでき事を時間きざみで詳細に報告したものと、二七日までの簡単な日誌とからなっている。この記事は戒厳当局の検閲によって韓国では公表されなかったものである。英文では韓国問題キリスト者緊急会議発行の『コリア・コミュニケ』三六号に掲載された。

光州市街図



- ① 尚武館
- ② 全一ビル
- ③ 光州銀行
- ④ 観光ホテル
- ⑤ 韓国日報支社
- ⑥ 全南毎日新聞
- ⑦ MBC(文化放送)
- ⑧ カトリックセンター
- ⑨ 市外バスターミナル
- ⑩ KBS(韓国国営放送)

この文章が検閲の眼を念頭において書かれていることは考慮しなければならない。だが他の光州からの報告とあわせて読めば、現場の雰囲気や伝える数少ない、貴重な資料である。本稿では、一九、二〇日の項をこの資料を中心に構成し、「日誌」と付記して引用した。

また、二二日の項は韓国日報の記者団によってまとめられた文章を中心に構成した。この文章は戒厳司令部の検閲を通り、二三日付同紙早版にのみ掲載された。

中年男性

一八日にやってきた空挺部隊が、まるで大殺しが犬を殺す時のように民衆を警棒で殴りつけ、倒れた民衆を車に乗せていた。その光景はまるで屠殺場のようだった。

中年女性 空挺部隊はバスを停めたりして、学生や若い人が乗っていると無差別に連行していった。そして道に伏せさせ、頭をちよっとあげただけでも警棒で殴りつけていた。私たちにすれば、学生や市民は互いに親子であり、兄弟なのだ。興奮せざるをえなかった。自分たちの息子たちがあんなにやられているのに、どうして傍観していら

れましょうか。それで私たちは総決起した。みんなで一斉にデモを始めたのだ。

二一日は、旧暦の四月八日で釈迦の誕生日で公休日だったが午後二時頃、ビルの三カ所から戒厳軍の発砲が始まった。ただやられているわけにはいかない、というのでそれぞれの警察署から武器を持ち出した。戒厳軍はなすすべを知らず、二二日の夕方、撤退を始めた（拍手）。

私はこんなことをしゃべったがために警察に逮捕されるかもしれない。しかし、私は逮捕されてもかまわない。私は真実を語りたい。なぜ真実を語ることができないのか。

—— どのくらいの死傷者がたのですか。

学生（男性） すでに七六人が死んだ。負傷者は二〇〇〇人にのぼっている。

今回の光州の事態を政府は単純な「暴動」だと言っているが、これは民主主義に対する我々の意思表示である。政府はこのことを明確に認識する必要がある。今回の責任をとって全斗煥はどんなことがあっても退陣し、金大中氏を含むすべての民主人士が釈放されなければならない。

戒厳軍はヘリコプターから民衆に対して機銃掃射を行ない、ダムダム弾を使用した疑いがある。

この時、空挺部隊がヘリコプターから機銃掃射をして民衆を殺りくしたという報告がある。

平和的なデモをしたにもかかわらず、軍隊はヘリコプターから、また地上では着剣した銃でデモ参加者を射撃した(カナダの韓国民主化キリスト同志会の声明 5・26)。

このことについて資料として『アジア・ウォール・ストリート・ジャーナル』紙のノーマン・ソープ、ジョン・マーコンの両記者が光州病院を訪れた報告がある。

光州病院のスタッフは六〇人の負傷者と四人の死者を収容していると言った。何人かはM16の銃弾を受けている。病院の一人のスタッフによれば、ヘリからM16で狙撃された者もいるという。記者としては武装ヘリが市民を銃撃したとは信じがたい気持ちだったが、後に小型の偵察用ヘリが頭上にあられれると群衆は病院の駐車場のかげに身をかくしたのを見た。

当市に住むある外国人は軍の大型ヘリが飛んで行った直後に銃声を聞いたと言、「私はヘリが銃撃したと確信する」と語った(AWSJ 5・23)。

また、国際法で禁じられているダムダム弾が用いられたという報告がある。

光州を占領した軍はダムダム弾を使ったとわれわれの友人たちは語っています。ダムダム弾は一八六八年以来、国際法と国際協定によって使用が禁止されている武器です。このことが露見するのを恐れ、軍は五月二日、すべての負傷者を病院から運び出しました。軍の方がよりよい治療ができるという口実です。われわれが聞いたところでは、光州で撃たれた人びとは、逃げるところを背後から撃たれています(韓国からの声・5・18付 資料参照)。

戒厳当局は光州に限って、夜間外出禁止令の時間を繰りあげる。

流れる血、叫び声……空挺部隊の暴虐行為に光州は恐怖の町に一変した。しかし学生や民衆は敢然と闘い続けた。むしろ怒りに燃えて抵抗した。

午後四時ごろには闘いは一段とエスカレートし、激しい投石戦が展開された。

戒厳軍当局も始めはタカをくくっていたに違いない。しかし予想外に激しい学生と市民の抵抗によりやがて軍の重大さを感じ始めた。

全羅南道の戒厳司令部分所は「光州市一円の夜間外出禁止令を従来の午前零時から三時間繰り上げ、午後九時から(午前四時まで)とする」との公告四号を発表した。

学生や市民と戒厳軍との衝突は深夜に及んで一旦静まった。

デモ群衆はこしょう弾、催涙ガス弾などを撃ちながら鎮圧しようとする警察に火炎ビン、石、角材で立ちむかっていた。

警察が興奮したデモ群衆を鎮圧できなくなると、一時五分頃、軍用トラック三〇台余りに分乗した特戦団戒厳軍(空挺部隊)が道庁の前で江南路の四通りに進出、それぞれ装甲車四台を前に立て群衆を包囲して押し戻し始めた。

……錦南路に投入された一〇〇〇名余りの空挺部隊は棍棒と着剣したライフルでデモ隊の人びとの肩や足をめったやたらに殴り、突き始めた。錦南路の一带はまたたく間に血を流して倒れる群衆と、それを見た市民たちの悲鳴で阿鼻叫喚のちまたと化した。群衆は軍の無差別暴力に押され、忠壮路の横道に逃げるか建物の中にとび込んだが、軍人たちは横道や建物の中まで彼らを追跡し、市民たちをひき出し、道にひざまずかせ、あごを蹴る、あるいはうつぶせにして頭と体を蹴るなどの暴行を加えた。道のあちらこちらでは市民たちが手を頭の後ろに組まされ、二列に並ばされ、ひざをつかされていた。

軍人たちは特に若者たちを、パンツだけを残して裸にし、めちやめちやに殴打した後、後ろ手に縛りあげた。

恐怖に動けなくなった女子学生の下腹部を蹴りあげ、胸を殴り、帯剣で着衣を破ったりした。ビルの屋上で見ていた市民たちは、殴られ、血を流す市民たちの姿を見て悲鳴をあげ、泣いた。軍人たちはこの後、装甲車で市を回りながら市民たちをつかまえて殴打、連行した。

分隊や小隊にわかれた軍人たちは中心街の建物、住宅などをしらみつぶしに捜し、暴力をふるった(日誌)。

これに憤激した全羅南道光州の全南大学、朝鮮大学をはじめとし、各単科大学、一部の高校生、民主市民たちは平和的デモを行なった。だが金斗煥らは三万余名の戦闘警察を動員し、市民たちの前後を包囲し、ペッパー・フォッグ(こしょう弾と呼ばれる催涙弾)を撃ちながら包囲網を締め、退路を断った。さらにソウルから急派された三〇〇〇〇余名の空挺部隊ブラック・ベレーたちは狂った処刑人のように銃剣をふりかざし、あたかもカボチャを刺すように、手あたりしだい刺しまくり、血が河のごとく流れる死体を軍のトラックに投げこんでいった。彼らはそれでもたりに校門を突き破って襲いかかり、逃げまどう市民たちと若い女学生たちを銃剣で切り、きざんで殺した(「金斗煥の光州殺りく作戦」光州の朝鮮大学校民衆闘争委員会が五月二日に光州でまかれたビラ。資料参照。以下「殺りく作戦」として引用)。

二五日に帰国したある日本人旅行者は次のような学生たちの声を紹介している。

私たちは一七日夜まで平和的で秩序あるデモを続けていた。それなのに突然一八日、空挺部隊が来襲し、市民に襲いかかった。そこで一挙に、市民の怒りに火がついた。

その時の死傷者はどこへ行ってしまったのか今もってわからない。

大学への戒厳軍の進駐、市民、学生への襲撃、そして金斗煥への怒りが、事態をここまで悪化させた原因だ。

それを口コミで書いた市民たちは次々に市内中心部を集まり始め、二〇日の夜には五万人にふく

五月一九日 午前

この日、空挺部隊をはじめとする戒厳軍の残虐行為は絶頂に達する。妊婦の腹を裂く、女子学生を裸にして刺殺するといった無惨な光景が街頭を修羅場に変える。だが同じこの日、光州民衆は反撃に起ち上がる。

早朝から戒厳軍は光州民衆に対する先制の弾圧を加える。

前日の全土戒厳令を受けて、韓国政府は一九日から大学休校令を正式に発動し、全国の各大学には戒厳軍が配備され、戦車も配置された。ソウルでも登校してくる学生たちは軍によって追い返された。ソウル駅前には数百人の学生が集まってきたが、機動隊の弾圧によって解散させられ、少なくとも一〇人の学生が逮捕された。

学園だけではなかった。二〇日からは臨時国会が予定されていたが、戒厳司令部は一九日、閔寛植国会議長代理に対して国会議員も一切国会議事堂に入ってはならないと通告した。戒厳司令部はまた、与党の民主共和党、野党の新民党の両党本部を閉鎖するよう命じた。まったく戒厳軍当局の勝手放題であった。

一方、午前四時の通行禁止の解除と同時に戒厳軍は光州市内全域で検束を開始し、前日に倍する暴虐を市民に加え始めた。

五月一九日、全市街地を銃剣で武装した戒厳軍が市内の所々を捜索し、学生、青年の約一〇〇名を無差

特に二〇代の青年が軍に狙われ、無差別に殴られ、殺される。軍は郊外まで逃げる青年たちを追い、命乞いをする者、無抵抗の女子学生をも殺りくす。

この時から軍人たちは市内の中心地だけでなく、中央路、開峰路などの横道を捜し、狩猟でも楽しんでいるように二〇代の青年たちを捜し出し、相手をまわす殴打した。軍人たちはひざまずいて命乞いをする市民も殴り、逃げる青年を足がけして倒しては、五、六名がかりで踏みつけた。

こうして軍人に見つかった若者はどうすることもできず、これを見ていた市民たちは、こんなことがありうるのかとじだんだんを踏んでいた。

……戒厳軍は追われてカトリックセンターに逃げた二〇名余りの学生たちをむけて催涙ガス弾を発射し、建物内に乱入して一〇〇名余りを殺害する。錦南マンション管理事務所の地下室で顔にペンキを塗った死体一〇体が発見される。

忠壮路二街、全一ビル四階の屋上に戒厳軍が乱入し、学生一〇名を殺害して地上に投げ出す。北洞で戒厳軍が娘からんだのに母親が抗議したところ、戒厳軍は母と娘を殺害する。市民劇場の前で高校生を綱で縛り、装甲車につないで引きずり回り、後で殺害する。その時、市民劇場の前で憤慨した市民たちが戒厳軍二名を殺す。現代劇場の前で市民、学生一一名が殺害される。怒った市民たちに戒厳軍も殺された(「日誌」)。

一九日にソウルを発って光州に入ったある目撃者の

当に恐ろしく凄惨極まりない、歴史が始まってからこのかた、このような虐殺現場を見るために仕組まれたかのような、つまりこのような惨劇を又もや見なければならなかった。

果たして彼らと同じ血を分けた我が民族だろうか。同じ言葉を使用し、同じ国籍を持った私の国の人間だというのであろうか。

……女子大生らしき三人の娘さんが、空挺部隊によって少しづつ裸にされていた。ブラジャーとパンティまでをすべて裂き、その中で最も恐ろしい形相の空挺部隊兵が、軍靴で娘を蹴とばしながら、「早く消え失せろ、このアマども。今がどんな時だと思っただけでモロなかすのか」

たけり狂う狼のようにわめいた。しかし、このと

戒厳軍は学生を多少過激に扱った

五月一八、一九日の軍による民衆虐殺について、戒厳司令部は口をつぐんでいた。後に戒厳司令部は「光州事態経緯・真相・処理」という文章を発表し、各国に送りつけたが、この中には一八、一九両日の戒厳軍の動きについては敷衍しか触れていない。

その全文は次の通りである。

若い軍人が激烈な騒乱の渦中で阻止任務を遂行することで、当然示威学生を群衆の前面で制止、連行せざるを得ず、学生たちを打ちながら多少過激に扱い、逃げる学生を追撃してつかまえるうちに器物が破壊する場合に出会った。

手記が「引き裂かれた旗」としてまとめられている。その筆者はこの日のできごとを次のように書く。

羊のようにおとなしい市民であった。しかし、この日あれほどおとなしかった羊が、とうとう民主守護という祭壇に捧げられる血のいけにえとなっていた。

……あちこちから聞こえる威声、腹わたが裂けるような悲鳴、臨終を告げる、絹を裂くような声、声……。

大地は口を開けて、若い魂がしぼり出した血をゆっくり吸って酔いはじめている。天はこだまする威声で乱れ裂けていた。デモする学生と見物していた市民は、逃げるいとまもなく、蜂の群のように飛んで来た空挺特攻隊に包囲され、死力を尽くして逃げまどっていた。

まさか、何もしない市民を殺しはしないだろうという、単純で幼稚な信頼感を抱きながら中心街に入った私は、とにかく生きなければという、最も基本的な本能にしたがって必死に逃げた。

後を追って来る銃剣の、ぞっとするような感触を肩に意識しながら、あるビルの中に必死に飛びこんだ。有難くも、先に来ていた人が一瞬のうちにジャッターを降ろしてくれたので、鉄槌で頭骨を割られ、銃剣によって胸が裂かれる惨劇を免れることができた。

……逃げおくれた七〇歳くらいのおじいさんの頭をめぐって空挺部隊の鉄槌が降ろされた。老人の口と頭からは噴水のように鮮血がほとばしり出、悲鳴をあげる間もなくばたきと倒れた。血と肉がもりあがり、内臓がびくびくするので、本当に私はどうしたら良いのか、全身にわけのわからない戦慄がはし

き、乙女たちは逃げるのではなく、みんな胸を押えて道ばたに座りこんでしまった。私は、彼女達が早く逃亡することをどれほど切に願ったか知れない。しかしこの愛らしい娘たちは、私の祈りに反して地べたに座ったまま、動こうとしなかった。

このとき一人が怒鳴った。「このアマども、生きるのが嫌なようだな。それなら仕方がない」

その瞬間、娘たちの背中には銃剣が刺し込まれ、噴水のように血がほとばしった。倒れた娘たちの胸に銃剣でX字を書き、生死の確認もなく清掃車に投げ込んでしまった。人知れず埋葬をするのか、火葬にするのか、それは知る由もない(「引き裂かれた旗」)。

前述の朝鮮大学生のアピールもこの日の状況を次のように述べている。

このような蛮行に全市民は憤激し、抵抗するにいたった。しかし、素手の市民たちはかえって銃剣でやられてしまった。孫のような女学生が血を流して死んで行くのを見て、空挺部隊の胸ぐらをつかんだ七〇歳の老婆はかえって銃剣で刺し殺されてしまった。

男子学生たちに石を運んだ女学生たちは、真昼間、市民たちが見守る前で銃剣で切りぎまれ、血を見て叫ぶ市民たちにむかって、空挺部隊は血のついた銃剣をふりかざして殺すぞと叫んだ。女学生たちの服はズタズタに破られ、素裸にされたまま血を流しながらトラックに乗せられて運び去られた。

さらに、市民の抵抗に当惑した空挺部隊は、通りかかる市内バスや乗用車までも止めて、若者たちを手当たり次第に軍靴で踏みじり不具にして連行

り、石段にへたへたと座り込んでしまった。そばに立っていた若いおばさんも、足を踏みならしていたが、「チャンスン」(長丞)のように地べたに座りこんでしまった。

弱者の怒りは、本当にくやしいものであった。訴えるところも、よりかかるところもない弱者のくやしきは、本当に孤独な悲しみであった。

殺人現場、それもまったく無惨で残酷なる殺人現場を直接目撃するのは、今度がはじめてである。しかし殺人劇の残酷さは、これで全部ではなかった。二名の空挺部隊兵に犬吠たいに引きずられて来た婦人は、臨月に近い妊産婦であった。

「このアマ、袋に入っているものは何だ」

私は何を聞いているのかわけもわからず、彼女の手を見つめたが、手には何もなく、何かを入れられるような袋も見えなかった。

「このアマ、何も知らんのか？ 男の子か？ 女の子か？」

横にいた奴がせき立てているのを見て、やっと私は何を言っているのか判った。婦人は蚊の泣くような声で「知らない」と言っている様子だった。

「それでは俺がおしえてやろう」

瞬間、婦人が反抗する間もなく、ワンピースが引き裂かれ、肌があらわになった。空挺部隊兵は銃剣で彼女の腹をぐさぐさと刺した。ねじりながら刺したのか、すぐに腸がとび出した。彼らは、再び彼女の下腹を剣で切り裂き、胎児を取り出して、まだうごめいている婦人に投げつけた。

……私は可能な限り、露地裏だけを運んで走った。幸にも手に持っていた物がなくて良かった。あゝ露地を抜け、大通りの前で私は踏み止まってしまった。ほとんど反射的に身を空箱の後ろにかくした。本

していった。市外バスターミナルでは、このような蛮行に抵抗する市民たちとの戦いの中で、空挺部隊の銃剣に刺し殺された若者たちの死体が待ち合の室に並べられ、まだ片づけられていない死体は、夜遅くまで道ばたに放置されていた。生きのびた青年たちはじゅうつなぎにされ、道ばたに死体のように並べられていた。この時の空挺部隊の合言葉は、「若い奴らは全部殺してしまえ」であった。

全斗煥の親衛隊である空挺部隊によって無惨にも殺りくされた光州市民の悲惨さは筆舌につくしがたく、目をおおるばかりである。年老いた人たちは、異口同音に「六・二五(朝鮮戦争)の時の人民軍もこれほどには残忍ではなかった」と痛嘆していた。

いま、光州全土では、若いという理由だけで罪となり、命を失うか、不具者にされる悲惨な運命にさらされている。

「光州市民の七〇％は殺してもよい」「犬を何匹殺したのか？」などという言葉が空挺部隊の隊員たちの間で交わされている。

さらに怒りを禁じえないのは、このような殺りく作戦の前に、警察幹部たちの家族はみんな安全地帯に避難したという事実である。そのみならず、血を流す女学生たちと死体を市民たちが病院に運んで応急措置をほどこすと、空挺部隊は病院の中にも押し入り、看護婦を殴り、器物を破壊して、治療さえも受けられないようにしている。

ベトナム戦争において良民を虐殺した蛮行の実例を、同じ兄弟たちに対して行なうことができるというのか(「殺りく作戦」)。

兵庫県に住む宮川正則さん(四九歳)は仕事で渡韓しており、五月一日から二六日まで光州に滞在した。

そして戒厳軍が光州を制圧した二十七日に帰国し、空港で次のように語った。

軍の発砲は私の目の前でも繰り返され、足を撃たれて動けなくなった女性や、老人たちのこめかみに銃口を突きつけて射殺したり、子供を抱いた母親に向けて発砲、母子とも殺したり、少なくとも十数人の市民が殺されるのを目のあたりにし、震えあがった。軍の無差別ともいえる殺りに市民の怒りが高まり、デモ隊は日に日にふくらんだ。デモ隊の学生たちは私たちの寮にも寝泊まり。近

三 光州民衆は反撃に転じる

五月一九日 午後

午後から街頭の状況は一変する。空挺部隊の残虐行為に怒った市民たちが鉄パイプや角材、スコップなどで武装し始める。道庁周辺には続々と市民が詰めかけ、その数は五万名となる。闘いはますます激しくなり、MBC、CBS、東亜日報などの各光州支局も襲われ、街の至る所で激烈な戦闘が展開されていった。

一九日午前の闘いまではデモ隊も投石する程度であった。しかし午後からはスコップや棒、鉄パイプなどを握る

くの企業主や一般市民までがバスや車をはじめ物資をデモ隊に寄付したり、主婦らがたき出しに協力したりで、全市民一丸となって戒厳軍と対抗しているようなふん囲気だった。

工場の寮でデモ隊側の学生らとの同居生活中、私を日本人と知った学生らはみんな好意的で、親切にしてくれた。

……騒乱がこれだけ大規模になったのは、軍隊の殺りくが市民の反政府意識をエスカレートさせたためだと思ふ。デモ隊の市民たちは「こんな政府は民主政治ではない」とののしっていた(毎日 5・28)。

ようになり、火炎ビンも登場する。

昼になって一旦デモ隊はひいた。空挺部隊による午前中の虐殺のニュースは町中に広がっていた。

そして午後、再びデモ隊が市街に登場した時、デモの姿は午前とは一変していた。市立光州高校など三校の高校生約一〇〇〇人、中央女子高校の女子高校生約二〇〇〇人も授業を放棄してデモ隊に合流した。デモは中学生、高校生から老人まで男女を問わず、まさに光州市の総ぐるみの闘いになっており、手には角材や鉄パイプが握られていた。

この時であった。逃亡していた市民達の喊声が更に荒々しくなり、興奮は絶頂に達しはじめた。誰かの口から

「市民たちよ、みんな立ち上がりましょう。私たちの息子がみんな死んで行きます。工具であろうが、鉄であろうが、手当り次第持ってきて戦いましょう」

ワァーという喊声とともに、市民が徐々に集まり始めた。あつという間にある製材所の角材があるだけ持って来た。今まで見物をして追い散らされていた民衆が、逆に戦う姿勢に急変していき、事態は険悪に変化していった(引き裂かれた旗)。

「日誌」の筆者はこの有様を次のように記している。

(午前十一時頃) 群衆たちは錦南路の新築三階建てビルの工事現場から角材と鉄筋、鉄パイプなどを持ち出し、軍と正面衝突し、これに軍の無差別暴力に興奮した周辺の市民たちも加わった。

同じ「日誌」に、別の記者がこう書いている。

この日の午後、市民と学生がデモに出始めたのは錦南路である。市内に侵入した特戦団(空挺部隊)が朝鮮大学キャンパスに食事のためひいていった午後一時半ごろから徐々に集まり始め、衝突になった。午後七時半頃には群衆は七〇〇〇名余りだった。警察は三〇〇〇名と推定している。全員が鉄パイプなどを持ち、興奮していた。この人たちは錦南路の両側を封鎖した警察に石や火炎ビンを投げ、乗用車を燃やしたりしていた。

四〇代の中年の男たちや女たちも参加した。デモ隊はポニー乗用車など車四台をひき出し、火をつけた後警察の阻止線に突っこませたり、ドラムカンや転がしたりした。デモ群衆はタクシー乗り場の鉄

柵ガードレールなどを壊してバリケードをつくり、警察に押しつけた。群衆は手に鉄パイプと角材を持って喊声をあげ、興奮の絶頂にあった。

午後二時半、学生や市民たち、主婦や子供たちも含めて一万五〇〇〇名のデモ隊が行進を始める。その手には角材等が握られていた。道庁前広場には全南大生、専門学校生など三万人が座り込んでいた。デモ隊は一擁に五万人にふくれあがった。

午後三時ごろから警察のもとに鎮圧用火器が到着した。警察はこれ以後、阻止線をはって見守ることにした。軍のヘリコプター二台が建物の屋上を低空飛行しながら、市民と学生の諸君、理性を失えば混乱が起こります。ためらわずに即時解散しなさい。参加するならばあなた自身にも、あなたの家庭にとっても重大な不幸となるだろう」と半分威嚇しながら民衆の自戒をうながした。しかし民衆は動揺しなかった。ヘリコプターの放送に対して民衆は角材などを高くあげ、上に向かって大声で叫び、擲弾をあびせた。忠壮路の中央路では警察の阻止にもかかわらず、人々は続々と集まってきた(「日誌」)。

この三時頃、「光州市内の有名人士が道庁に集まり、戒厳軍に市民側の提案事項を伝達」という記事が五月二三日付の『韓国日報』に載っている。詳細はまったく不明だが、事実とすればいわゆる戒厳軍との「交渉」の最初のものである。

共同電はこの日の様子を次のように伝えている。

民家すれすれに旋回するヘリコプター。巻き上がる催涙ガス。路地裏に出没し、軍兵士や警察機動隊

と衝突を繰り返す学生や一部市民。ソウルから高速バスで四時間半南下した韓国第五の都市、光州は騒乱状態の一步手前だった。

大通りにはM16で武装した陸軍空挺部隊が完全に交通を遮断、路上には投石に使われた石片やガス弾が一面に転がっている。数カ所で捕まったデモ参加の若者が上半身を裸にして路面にうつ伏せになっているところを、兵士が背中を棒で強く打ち続けている。その近くでは「私の家で働いている若者だ。許してくれ」と泣きながら兵士に許える中年の女性の姿もあった。

だが網の目のような路地に踏み込むと、軍とデモ隊の力関係は一変。どこからともなく現れた学生たちがヤジ馬とともに約一〇〇〇人単位で、兵士たちに投石、兵士たちが怒って追いかけるとクモの子を散らすように姿を消す。

これに対抗するために、軍用ヘリが頭上を低空で旋回、兵士を満載したトラックの列がひんばんに市内を移動するなど、軍の動きもあわたたしい。兵士の表情にも極度の緊張感がうかがえる(一九日光州発)。

学生や市民たちは攻勢にでる。そして放送局に押しかけ、一時占拠する。また戒厳軍一個中隊を包囲し、降伏させて武装解除する。

この日の別の共同電は、次のような文章を送っている。

目撃者の話によると、地方官庁やマスコミ機関が集まっている市内中心部の繁華街、錦南路で同日午

前一時前、国立全南大の学生約三〇〇〇人が集まり、道庁に向けデモを始めた。さらに他大学の学生や、見物に現われた一部市民たちがデモに合流、付近の主要道路を封鎖して規制に入った。警察と各所で投石してわたり合った。デモ隊側は路地に逃げこみながらゲリラ的な動きに出て、午後には韓国文化放送(MBC)、キリスト教放送(CBS)光州支局に押し掛け、窓ガラスを壊したあと、一時、数百人が同放送局内に入った。デモ隊により放送局の車をはじめ七台程度の車が焼き打ちに遭った。

デモ隊は民家に逃げ込んだり、ヤジ馬にまぎれりして付近は混乱状態となり、見物人のうちの子供一人が警備陣の装甲車に巻き込まれ病院に運ばれたが、重体。市内の五病院には次々と負傷者が運び込まれた。

通りには目を刺す催涙ガスが立ち込め、引き倒された電話ボックスや、工事現場から持ってきた角材、石片が一面にちらばって嵐のあとのような惨状を呈していた(一九日光州発)。

この日、デモ隊は戒厳軍一個中隊を武装解除させている。

午後三時頃、三〇〇名の群衆は錦南路にあるカトリックセンターのキリスト教放送の周囲に集まり、建物をふさいでいた戒厳軍一個中隊を完全に包囲して強制的に武装解除し、放送局の中に人質にした。ホン・ヨンピョ放送局長の説得で三〇分後に解放したが、引き続き放送局を占拠したデモ隊は調整室などの器物を破壊し、放送は一時中断された。

三時一七分頃、食事を終えた戒厳軍は道庁前と江南路の四方面から群衆を包囲し、圧力を加えてき



私たちは一時退避しようとしたが、火事には至らなかつた。これらの人びとはそれからMBCの車庫で乗用車五台に火をつけ、MBCの社長が直営する電子製品文化商會に火を放った(「日誌」)。

警察機動隊が動揺を始める。警察の一部はデモに合流し、軍と警察の間に離間が生じる。

警察機動隊はこの頃にはかなり戦意をなくしている。五月二日付の「韓国からの声」(資料参照)は、「あるところでは警察隊までもわれわれの戦いに参加しています」と誇らしく書いている。

町絵ぐるみの闘いになった時、その町出身の警察官、機動隊は自らの父母、兄弟姉妹、友人、恋人たちを敵として立ちむかうことを強制されたのである。動揺は当然であった。

日本カトリック正義と平和協議会のまとめた文章は以下のように伝えている。

一、戦闘警察(機動隊)が制服を脱いでデモに加わった。

二、五月二〇日の時、全羅南道警務課長が家で学生に飯食を供し、作戦課長が学生を逃がしてやったが、人々の前で特戦隊に射殺された。

この作戦課長のことであろうか、「日誌」の五月一九日の項に次のような一節がある。

軍人たちは頭を割られ昏倒した市民たちを運ぶ警

察にまで棍棒をふるった。部隊を指揮していた一人の空挺部隊の中佐は、負傷した市民たちを運ぶ作業をしていた全羅南道警務課長を負傷させ、「市民や学生を逃がすなら、お前たちも同調者とみなす」という暴言をあびせた。

……この状況を見ていた一人の警察幹部はハンドマイクで忠告路にたむろしていた市民たちに、「早く帰れ。軍人たちがぶつかるかと殺されるぞ」と叫びながら、気も動転した様子で涙を流していた。

全羅南道の全警察の最高責任者である安炳夏道警局長は五月二六日に更迭されている。光州が戒厳軍によって制圧された翌二十七日、彼は逮捕された。「職務放棄」の容疑であった。

一八日の空挺部隊の派遣の時に、全羅道の出身者を除外したという情報があるが、それも理由のあることだったのである。

この日の夕刻からデモは郊外も含めて市の全域に広がり、至る所で鎮圧軍と衝突する。軍や警察はもはや点と線しか確保できない。

午後四時四〇分ごろには東鶴洞の鉄道沿線地区など周辺にまでデモが広がった。この頃には多くの市民が、市の全域で散発的な放火や投石を行ない、鎮圧軍との間に流血の悲劇が起きていた。

この日に入って戒厳軍の兵力は何度も増強された。さらに木浦、麗州地域を除いた八警察署から一八〇名余りの警官隊が出動したが、市の全域に広がったデモを鎮圧することはできなかった。軍と警

CIA部長らに死刑確定判決と韓国の政局は揺れる。

二〇日、李搦現文化公報相は午後四時からの閣議で申鉉鎬首相以下全閣僚が辞職することを決定したと発表した。申内閣総辞職の理由として李文化公報相は次の点をあげている。

一、昨年一二月の発足以来、最善を尽くせなかった。

二、崔大統領が外国訪問中に国内の治安を維持することができず、前例のない騒ぎが発生したことに責任をとるためである。

この日は本来ならば臨時国会が開かれるはずであったが、前日の非常戒厳司令部の一方的通告で無期延期されてしまっていた。二〇日朝、黄瑒周新民党院内総務ら四三名の新民党議員が議会封鎖を破って強引に登院をはかろうとして、武装兵士に実力で阻まれた。新民党は六六名の全国会議員が辞表を提出した。

一方、「三金(スリー・キム)」の中でただ一人連行を免れていた金泳三新民党総裁は同日朝、自宅で内外記者団と会見し、戒厳令当局を真こうから批判した。戒厳司令部はその直後、金泳三氏の自宅へ軍隊を派遣、以後自宅に軟禁し続けている。「この記者会見は禁じられている政治的屋内集会である」というのが戒厳司令部当局の言い分である。

この日、韓国大法院(最高裁)は、昨年一〇月二六日に朴正熙大統領を射殺した金載圭KCIA部長に内乱目的殺人と内乱首謀未遂の罪で死刑の判決を下した。

金載圭については、キリスト者など民主勢力からも助命嘆願運動が起こっていた。カトリック正義と平和協議会の資料によれば、二二日午後、処刑を目前(二

察はやつこのことで主要地点と道路、つまり点と線確保することができただけという状態であった。午後五時一〇分頃、市の中心部にある光州高校の前でデモ隊五〇〇名が投石しながら前進、角材で猛烈に特別鎮圧部隊に立ちむかっていた。そして軍が接近できない状況の中で装甲車を包囲し、ワラを集めて火をつけ、火炎ビンを投げつけた。……午後五時二〇分頃、錦南路で再び、一〇〇〇名余りが集まり、空挺部隊の兵力が周辺の地域に移動したときに放火し、激しいデモを繰り広げ、軍と衝突した。午後六時五〇分頃、公共駐車場と光州高速バスターミナルを占拠した市民たちは、第三一師団兵力と衝突し、タクシーをつかまえ、火をつけた。黒煙があたり、火災かとさえ思われた。この日、全市街に広がったデモは、午後八時二〇分まで続いた。午後七時頃からは雨が降り始めた。東区芝山洞の裏山で喊声とともに火の手が上がり、火は五〜六分燃え続けた。……暗くなると市内の車の通行がとまり、人があまりいなくなった。一時光州は火の気のない暗黒の世界に変わり、静けさの中に不安感がただよっていた。軍と警察は午後七時頃から市街地を回り、マイクで市民たちは家に帰れ、とふれてまわった。空挺部隊は周辺の一部の商店に閉店を要求した。また軍は光州の幹線道路や、江南路の中央路開峰路などの中心部につながる重要幹線道路を占拠した。

……午後九時半ごろから白雲洞、池元洞方面から

戒厳軍が現われ、全ての住宅街を捜索した。その際、学生に対する殴打を止めさせる両親まで殴打するなどし、多数の死傷者を出した。二九日、一日の間に数百名が死亡し、数千名が負傷、数千名が連行されていた。大部分の死亡者、負傷者は戒厳軍によってどこかに持ち去られた(「日誌」)。

五月二〇日

前日に続いて光州市民は一層激しい攻撃に出る。夜にはデモは十万名に達した。そして市庁、道警察署、消防署などが一時占拠された。デモ隊はしだいに最後の拠点である道庁に対する圧力をかけ始め、闘いは道庁攻防戦に集約されてゆく。KBS、MBC、CBSなどの放送局が襲撃され、MBCは全焼した。夜間の外出禁止令も完全に無視した闘争が展開され、戒厳軍は民衆に銃を向け、発砲した。夜を徹した市街戦が続く。

ソウルでは申内閣が総辞職、新民党の全議員が国会に辞表提出を決定、金泳三氏は自宅に軟禁され、金載圭元K

四日に処刑された)にして弁護団と会見した金載圭は次のように語ったという。

- 一、私が維新の核を取りつぶしたにもかかわらず、その残党が権威を恣にする今日、私の起した事件なしに民主化を期待することができたのだろうか。
- 二、多少紆余曲折はあるが民主化は達成するであろう。しかし暴力になじんでいる維新残党による流血が心配である(光州事件は知らないでいた)。
- 三、私としては今死ぬのが最も良い時期であると考え。私と私の一〇・二六事件は歴史と国民の正しい評価を近い将来に受けるであろう。
- 四、大法院の判事四名中八対六の賛成で、六名の少数意見があったということは幸いなことである。それは私のためだけではなく、この国の民主主義と法曹界の独立のために肥料となるであろう。
- 五、何の未練もなく逝く。この間の皆様方の労苦に感謝する。

光州ではデモは午後に入ってから始まり、主婦も学生も中年の市民も「ひとつの心」と唱和しながら闘い始めた。

二〇日の朝を迎えた光州は静かだった。群衆の姿もあまり見えない。

ただ「市内の要所は空挺部隊や警察機動隊が固め、軍ヘリコプターが市上空を巡回するなど、依然緊張状態が続いている」(二〇日光州発 共同)という状態であった。

戒厳司令部はこの日、さらに地元師団である第三

予備師団(一万二〇〇〇人)の戒厳兵を投入して戒厳体制をとっていた。

この日デモ群衆が街頭に出始めたのは二時半ごろ、市内中心地の錦南路にある喫茶店付近に五〇〇名余りの市民が集まり始めてからである。

私服姿の高校生や主婦、五〇代の中年男性まで含めた群衆たちは、この日の明け方六時、金アンブさん(三五歳 労働者)のバラバラに引き裂かれた血だらけの死体が錦南路近くの鶴洞で発見されたことなどを報告しあい、興奮の熱気はさらに高まった。市民たちは「ここに集まったわれわれはみんなひとつの心、ひとつの心」と言い合いながら互いに決戦の決意を固めていた。空挺部隊が光州市民七〇%を殺してもよいという指示を受けたという噂がとび、いっそう市民たちを刺激した。

同じ時間、東区大仁洞の前では、六〇〇〇名余りのデモ隊が戒厳軍や警察と対峙、投石戦を繰り広げていた。

午後三時を前後し、東区東洞洞では中学生三〇〇名余りが道で銃を持っている軍人たちに石を投げた時、催涙弾とこしょう弾で追散らされた。

午後三時半には、すでに錦南路のデモ群衆五〇〇〇名余りが道を埋めていた。

彼らは警察が催涙弾とペッパー・フォグで阻止し、押し返してくるとそのまま道に座りこみ、太極旗(国旗)をうち振った。座り込みに入った市民たちは軍隊に押しまくられると忠壮路と現代劇場の方に一度退き、「集まろう、集まろう」というスローガンを叫んで一〇〇〇〇名が再び結集、軍や警察と一進一退を繰り返した(日誌)。

民衆は波のようにおしよせ、数をまし、道庁へ通じるすべての道路は封鎖される。

午後四時五〇分頃、デモ隊は道庁に通じるすべての道の六方向から波のように押し寄せ、大型の植木鉢とドラムカンなどを警官隊にむかってころがした。一部のデモ隊は包丁を持ち、「一緒に死のう」と叫んだりした。

これ以後、道庁につながる六方向の道路すべてに、三重、四重の警察阻止線が張られ、その後ろに軍人が進駐し、デモ隊との間に緊張が高まった。

午後五時二〇分頃、錦南路入口付近のデモ群衆は、スクラムを組み、道庁に向かって体あたりを試み、警察と衝突した。

彼らは大都ホテル前で座りこみをした後、「全斗煥は退陣せよ」などのスローガンを叫び、代表者を選んで警察阻止線の前に派遣し、「光州市民を敵として扱う軍と死ぬか生きるかの対決をする。警察はどいてくれ」という要求、交渉を試みた。この間、デモ群衆は道に座り込み、「愛国歌」「本当の男」「我々の所願(統一の歌)」などの歌を歌いながら太極旗をうちふった(日誌)。

タクシートの運転手たちが二〇〇台の車を連ねてデモに合流した。タクシィやバスが市民の武器に変えられる。デモ隊は勇敢にも何度にもわたり、バスを先頭に戒厳軍の阻止線に体当たりしていった。

『韓国日報』五月三日付によれば、午後四時頃には無等競技場では営業用タクシィの運転手たちが集まって戒厳軍の残虐行為を糾弾する集会を開いていた。

午後六時にその集会を終えたとタクシィの運転手たちは「戒厳軍をひいてしまえ」と叫びながら、市民のデモに参加するため、ヘッド・ライトを照らし一斉に警笛を鳴らして、約二〇〇台の車両デモで錦南路までの二・五キロを走った。

六時五〇分頃、錦南路を中心とした一万人余りのデモ群衆は興奮のつぼとなった。無等競技場に集まって一九日の軍の鎮圧過程を糾弾していた光州市内の営業用タクシィ運転手二〇〇余名が到着。軍の

阻止線突破の先頭に立つと宣言して、始めて隊列に加わったからである。

最初に錦南路にあらわれた三〇台あまりのタクシィは運転手だけが乗っていて、ヘッド・ライトをつけ、デモ群衆の先頭に列を作って進んだ。七七八台の大型バスと三〜四台のトラックが後ろについた。

この時、群衆の中から一人の青年がバスの屋根に飛び上がり、高校生三〇〇〇名余りが光州市民の決起に加わるために出発したと叫んだ。デモ隊側から喊声があがった。

午後六時五五分、バスがヘッド・ライトをつけ、デモ隊の投石の中を戒厳軍の阻止線に向かって疾走していった。催涙ガスで視野を失ったそのバス

は、光州観光ホテル前で街路樹にぶつかって止まった。その時、一〇〇〇名余りの軍兵士がライフルの台尻と棍棒で車の窓を壊し、運転台に坐っていた二〇代の青年を殴り始めた。車内には二〇代青年八人がいて、鉄パイプなどを持って軍人たちとぶつかっていた。

一〇分あまり続いた衝突が終わるとバスの中には青年九名が倒れていた。頭が割れ、顔がつぶれ、血を流した青年たちは軍人にひきずられ、すぐそばのハバハバ写真館の中に引き込まれた。

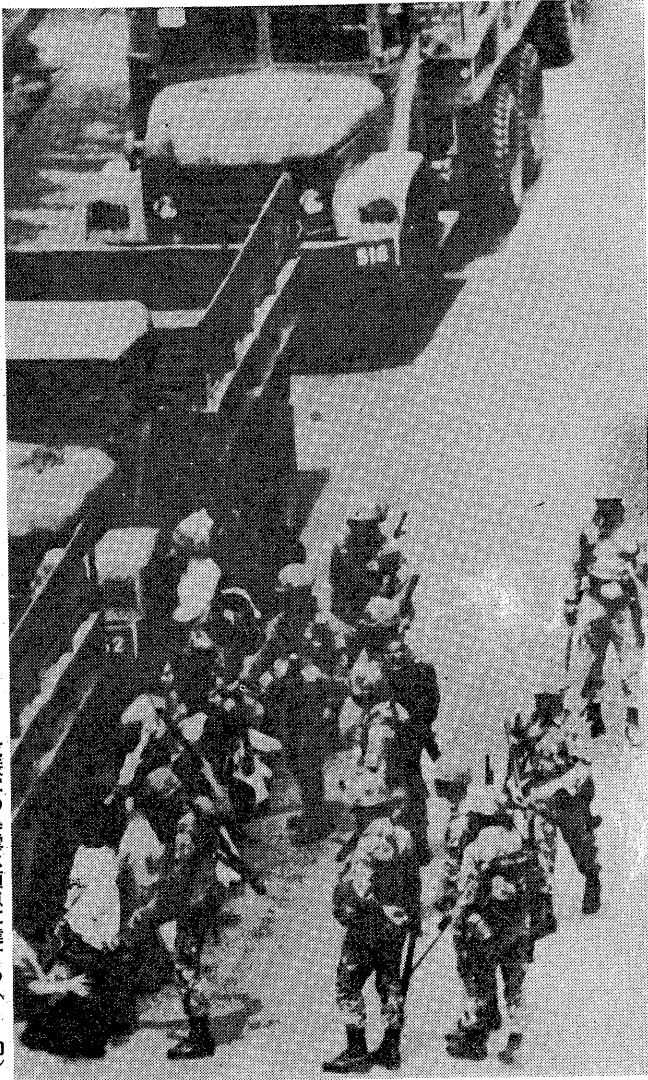
彼らはすべて意識を失い、ぐたぐたとなった状態だったが、この若者たちを二〇名あまりの軍人が靴で蹴ったり、棍棒で殴り続けた。群衆五〇〇〇余名が悲鳴をあげ、写真館に飛び込み、軍人の暴行をやめさせようとした。三名の市民が近くのロンドン薬局で若者たちの手当てをするために薬とタオルなどを要求したが、軍人たちは市民の接近を一切禁じた。

しかし四〇代の一人の婦人が阻止をふりきって狂ったように負傷者たちに飛びつき、道ばたに流れた血を見て「この血を見よ、これが国軍のすることか」と言って気を失った。

五〇〇〇余名の市民たちは、棍棒にも圧倒されず、「負傷者をわれわれに引き渡せよ」などと要求した。こうして彼らは比較的重傷でない五名を引き取り、残りの五名は後で到着した救急車に乗せられた。

夜七時二六分に忠壮路で待機していたデモ群衆は、天日旅客所のバスに乗って警察の阻止線に突っ込んだ。バスは道庁前の噴水台にぶつかって止まったが、警察はすばやく逃げ、人命の被害はなかった。バスの中の二人の青年が連行された。

戒厳軍の暴虐は頂点に達する(5・20)



車場を占拠し、バスを奪取してきた他のデモ隊と合流した。彼らは大型バス五台ずつを二列に並べて先頭に立て、「アラン」を歌いながら軍と警察の阻止線に向かって接近した。

軍人たちはデモ隊の氣勢に圧倒され、一旦阻止線を全一放送前まで後退させた後、交通信号台やガードレールを壊してバリケードを作り、催涙弾、ペーパー・フォッグを使ってデモ隊の接近をはばもうとした。

しかしこの時建物の中から女性たちが手に手に棒を持って現われ、道にそれを投げながら合流し、デモ隊は軍警の阻止線一〇メートルまでじりじりと進んだ。

午後七時四十分頃、デモ隊の中からバスが突進してきて噴水台の前に止まった。同時に噴水台を中心とした四方からデモ隊が愛国歌を歌い、波のように押し寄せ、催涙弾が飛び交い、喊声と悲鳴までまじる中を警察阻止線を包囲し始めた。たちこめた催涙ガスの中でバスを先頭に立てたデモ隊は軍と肉弾戦を繰り返した。

午後八時前後、錦南路の全一放送付近では悲鳴と喊声絶えなかつた。二〇分余り続いたこの衝突が終わるとエンジンのかかった数十台のバス、トラック、タクシイの間には頭が割れたり、腕がもぎ取られて血だらけのまま気を失った負傷者など二〇名余りが点々と倒れていた。

二人のガイドが頭の割られた運転手の姿の三〇代の青年を抱きかかえて慟哭していた。

そして「倒れた負傷者たちを病院に運びたい。危篤だから救急車を早く送ってくれ」という警察無線の泣きそうな声が、この戦闘の残酷さを物語っていた(日誌)。

続き、市庁が民衆によって制圧される。KBS、MBCなどの放送局も襲撃され、放送が中断される。MBCのビルも炎上。

午後八時二〇分頃、デモは一旦静まった。だが一〇分余り後、デモ隊は六方向から道庁にむかった。消防車を奪取し、道庁前の市内外バスの駐車場もすでに占拠した。バスを奪ったデモ隊が警笛とサイレンを鳴らし、ワットトキの声をあげると勢いはますます激しくなった。

午後八時三〇分頃、消防軍三台を前にたてた錦南路のデモ隊は消防ホースから放水して催涙ガスを除去しながら軍の装甲車に体当りした。デモ隊の消防車と軍の装甲車が押しつたり、引っぱたり、相撲のように格闘した。

同時刻、東区のMBCのビルでは、デモ隊がビルに放火して炎があがった。光州KBS(韓国国営放送)の送放局もデモ隊の乱入と破壊で放送が中断された。一方、市庁の阻止線が破られ、市庁はデモ隊によって完全に占拠された。

光州市郊外では、デモ隊は給油所を占拠、空きカンにガソリンを入れ、火をついたり、火炎ビンを作って投げ始めた。市内に至る所で黒煙や火柱がのぼっていた。

MBCの火事はすぐそばのバク・チョンナム外科医院に燃え移り、入院患者の脱出で混乱した。午後五時頃から電話線がすべて切られた。行政が完全に麻痺した市庁では六〇〇名余りのデモ群衆の総攻撃に軍の阻止線は手をうつ余裕もなくくずれた。

午後九時一〇分頃、労働庁の前のデモ群衆がバス

デモ隊の数は増えつづけ、昼間六万人だった人数は夜になって一〇万人に達する。高校生の呼びかけに闘争力も続々と集められる。

午後六時すぎ、大学生を中心に高校生、工具のほか、主婦も参加して約二〇〇〇人が集会を開いた。高校生が学生帽を持って闘争資金のカンパを呼びかけると、またたく間に帽子からあふれんばかりのカンパが集まった。このあと、数人の学生が乗った一台のバスがデモの鎮圧にあたる軍、警の待機地点に突進、最前列の兵士は一斉に両側に逃げ、バスは催涙弾の攻撃を受けた。窓ガラスなどは打ち割られ、兵士が学生を引きずり出して、棍棒などでなぐりつけた。

衝突は断続的になお続き、同七時二五分ごろには学生らが奪ってきた一〇台のバス、さらに学生の呼びかけに応じてみられる数十台のタクシイが非常線に向かって前進した。その約一時間後には、バス、大小のトラックなど計約三〇台が乗取った消防車二台を先頭にサイレンを鳴らして放水したりしながら進んだ。同九時ごろにはデモ隊が市の中心部にある四階建ての文化放送のビルを襲って放火、大きな火災となった。

これに対し、軍、警側は催涙弾に加えて黒い煙幕弾を発射、ライフルで武装した兵士で応戦した。これらの衝突でデモ隊側にはかなりの逮捕者、負傷者が出た模様だ(二〇日ソウル発 朝日・藤高特派員)。

警察署、派出所、消防署などに引き

に火をつけ、警察の阻止線を脅かし、同二〇分頃には高速バス一〇台をもって阻止線を突破した。このなかで威平警察署のチュン・ホンギルなど警官四名が死亡し、五名が負傷して病院に運ばれた。

一方、午後八時三〇分過ぎ、周辺地域のデモ隊は警察署、派出所、消防署などを次々と攻撃し、破壊が続いていた(日誌)。

MBCのビルの鉄筋五階建て(四階建て?)のビルは約四時間で全焼したという。

時事電は、夜一〇時すぎには市の中心部の一〇カ所以上から火の手があがっているのが目撃されたと伝えている。

市内は騒然としていた。

なぜ放送局などのマスコミ機関が焼きうちにあつたり、攻撃の対象となつたのか?

昨夜にひき続き放送局が襲われた理由は、光州の事態に対するマスコミの報道が戒厳当局の発表するものばかりであるということに反発したためと言われている。

例えば、「韓国からの声・1」(5・19付 資料参照)「わが国の政府の発表、新聞の報道は事実を極端にまげています」と書いている。

また「韓国からの声・2」(5・22付)も、「今晩から放送されたニュースはすべて事実を歪曲したものです」と書いている(注・二二日に戒厳司令部は光州の事態に関する報道を、もちろん検閲をしたうえではあるが、一旦解禁した)。

空挺部隊は麻薬を与えられていたか
——いくつかの証言

「海外のみなさんへ」(5・23、資料参照)の筆者は、空挺部隊の行爲があまりにも残酷であったため、「長い期間かけて故意に洗脳され、二三日飢餓状態におかれ、アルコールと覚醒剤だけを飲まされたことよってなされた行為としか理解できません」と伝えている。

もちろん、麻薬を与えられなくても、殺し屋として特殊な訓練を積んだ職業軍人集団が光州のような市民殺りくをやる可能性は多いにあるだろう。しかし、ベトナム戦争中、米国の海兵隊が危険な任務に出勤する際、麻薬を与えられていたことは多くの兵士の証言がある。

カトリック正義と平和協議会は韓国から送られてきた資料をもとに空挺部隊の殺りくの様子を次のようにまとめている。

- 一、特に殺りくのやり方が残酷である。まず裸にし、帯剣にてぐりと刺し、あふれる血潮を手で押さえようとすると手を後ろ手にし、さらに帯剣で背中を刺し殺すような行為を平気で行なっていた。
- 二、女性の乳房を切り取った事実を戒厳司令部でも認めた。ただし、カミソリで切り取ったものであって戒厳軍がしたのではけつてないと言っている。
- 三、臨月に近い妊婦の下腹を刺して腹わたが出るや更に帯剣でついでに胎児を引き出し、それをまだうごめいているその婦人の顔に叩きつ

けた。このことは数人の目撃者が生存し、証言している。

四、ベトナムのソンミ村虐殺事件とは比較にならない程の悲惨きわまりない自国軍人による虐殺の蛮行であった。老若男女の区別なく十歳位の少年と中学生が特に多く殺されたことである。光州のふたりの神学生も殺された。この光州事件には全羅道の人間を全滅させるようなやり方であると批判が高まっている。

そして以下の二点についてはまったく疑問の余地がないと伝えている。

- 一、空挺団を派遣する時、全羅道出身者を除外した。
- 二、幻覚剤を飲ませて殺りくさせた。

さらに、ソウルの信頼すべき情報筋から送られてきた資料には、次のように書かれており、「海外のみなさんへ」の筆者の推測を裏づけている。

光州に投入された戒厳軍は、光州に投入される二日前から「光州に北のスパイが侵入して光州市民をそのかして反乱している。そのため君たちを猛訓練しなければならぬ」として二日間も飯を食わなかつた。そして進入前にお酒に薬を入れて飲ませた。

この事実は、戦列から離れて投降してきた戒厳軍から直接聞いて録音しており、また一筆とってあるので間違いはない(われわれは、それを保管している)。

五月二三日に発せられた「海外のみなさんへ」(資料参照)は、当局の発表だけをのせるマスコミに対するいらだちを強く表明している。

今、私たち光州市民は誇りに思っています。しかし同時に私たちは恐ろしい孤立感を味わっています。正義の学生たちは、夜がしのび寄ると寂しさを隠すことができないでいます。これは、主にマスコミの海外報道が、私たちの期待以上に弱く、皮相的なものでしかないからです。ソウルからの放送は虚偽と不誠実に満ちているので私たちを驚愕させました。もし報道がいまわしい完全な検閲によるものでなかったならば、私たちの闘いはすでに成功を収めていたであらう。

実際に決起した光州の民衆にとって、自分たちを「暴徒」扱いする韓国マスコミの態度は、それが検閲のためと分かっていても許せないものであったろう。民衆による道庁制圧後も、光州の民衆たちはもはや国内の新聞記者をほとんどあてにしていなかったようである。

翌日付の「日誌」は次のように記している。

アメリカのCBS、NBC、日本のNHK、TBS、イギリスのロイター通信など外国の記者たちが取材に来る。市民や学生たちは国内のMBC、KBS、東亜日報の記者たちには取材させないで外人記者たちを熱烈に歓迎し、取材に協力する。

「海外のみなさんへ」も次のように書く。

特に私は、『タイム』と『ニュース・ウィーク』

事に襲われた時に、学生たちは消火に努めていたことを、私の妹が目撃しています。

ある韓国人活動家は、放送局が「民衆放送局」になることを恐れた戒厳軍が自ら火を放った可能性を示唆している。

ここで韓国のマスコミ人たちの、全土戒厳令以後の闘いについても触れておこう。

一九日夜、韓国日報、中央日報、東洋放送などソウルにある新聞、放送、通信各社の一線記者たちは軍政への移転を意味する今回の事態にどのように対処するか、徹夜の討論を行なった。

テーマは以下の行動にふみきるかどうかであった(二〇日ソウル発 共同)

一、一層強化された事前検閲の拒否。

二、検閲抗議の意思表示としての白紙紙面作成。

三、政府、戒厳司令部の発表報道の全面拒否。

そして中央日報の記者協会は、全国非常戒厳令の発動と、同社の記者一人が連行されたことに抗議して、二〇日から取材活動拒否に入っている(二〇日ソウル発時事)。そして東亜日報などの各社も戒厳軍の発表を載せることを拒否して、取材拒否に入っていた。

夜を徹した闘いが続く。民衆は鉄パイプ、びん、ハンマーなどで戒厳軍を圧倒する。力関係はすでに民衆の方に決定的に傾き、道庁は陥落寸前である。戒厳軍の一部も民衆への弾圧を拒否する。

が可能な限りのページをさいて、光州の事態を報道してくれたいことを望みます。なぜならこのふたつの雑誌には多くの韓国人読者がおり、人びとは検閲によって切りとられた空白部分の大きさから、私たちの悲劇の大きさを知ることが出来るからです。私たちは、私たちの悲劇と現在の危機をどうしても知らさなければならぬ必要性を痛感しています。

朝日新聞の斎藤特派員は光州の犠牲者の遺族を訪ねた時の体験を次のように伝えている。

妻と子供合わせて三人。それに母親を養う腕のいい大工職人だった。遺体確認に出かけた妻に代わって母親が泣きながら話した。

「一緒に出かけた仲間の話では、あの子は銃も持たなかった。投石もしなかった。ひと言だけ非常戒厳令解除と叫んだだけだったのに……」

母親の話聞いていてる最中、若い男三人が飛び込んできた。三人とも銃を握っている。

「おまえたちは何者だ」「殺してしまえ」と胸にねらいをつけて一人が叫ぶ。取材趣旨を説明する。

「正確にこの事態を世間に知らせたい」と言い残して若者たちは去っていった。タオルの覆面を取った顔は幼なかつた(二三日ソウル発)。

また光州市に二三日から二五日まで光州に滞在した日本人旅行者も次のように語っている。

「この街を見て感じたことを正確に外部へ伝えて欲しい」——学生たちはこう繰り返した。学生たちによると、今回の事態は「政府のいうように不純分子の煽動による暴動ではなく、あくまでも全市民あげた顔は幼なかつた(二三日ソウル発)。

光州の戦闘に戻る。

午後九時からの夜間外出禁止令は完全に無視された。夜間外出禁止令以後も民衆の総力戦が展開されるのはこの日が始めてであった。

午後一〇時頃には市の郊外を警備していた軍の阻止線のいたるところからM16銃の連発音が響き、至る所で撃ちあげられる曳光弾と信号弾が火の気のない光州市を夜空を明るく照らして、事態の深刻さを語っていた。

午後一〇時一〇分頃からは道庁を包囲したデモ群衆が、時々刻々、軍と警察の阻止線に圧力を加え、一部のデモ隊はあちらこちらから道庁のフェンスを乗り越えようとしていた。

道庁ビル三階の道庁事務室はこの頃閉鎖され、張炳泰全羅南道知事は一階の庶務課に逃げ、道内の消防署に万一の事態に備えて待機するよう要請した。

午後二〇時三〇分頃、東区東洞洞前の道路では空挺部隊とデモ隊が衝突し、一進一退の攻防戦を繰り返した。

郊外の軍の阻止線は至る所でくずれた。東洞洞の衝突の催涙ガスで失神し、戒厳軍につかまった三〇代のある青年は死亡した。警察はガス車で死体を道庁に移し、防空壕に入れ、その夜をすごした。

午後一〇時三〇分を過ぎて、道庁周辺一帯は、負傷した学生、市民、警官などでごった返していた。警官の中には過労で倒れて運ばれてくるものも続出した。

これら負傷者たちは救急車に乗せて運ばれたが、その際デモ隊は戒厳軍兵士であるかどうかを確認し

の運動だ」という(読売 5・26)。

もっともその期待された各国のマスコミがどうであったかと言え、十分に応えたとはとてもいえない報道ぶりだった。

放送局の焼きうちについては、いくらか矛盾した報告がある。

朝鮮大学生のピラ「全斗煥の光州殺りく作戦」は次のように書いている。

世界の歴史においても見ることができない蛮行に憤激した光州の愛国市民たちは、重武装した空挺部隊に対して素手で対抗した。

さらに、このような事態を目撃しながらもあんなに文化放送を焼き打ちし、何力所かの派出所と軍用トラック、ペーパー・フォッグ車を焼き打ちするにいたった。公営のバスターミナルにおいては、市民が火炎ビンで軍と対決し、火の海となった。

空挺部隊が犯した蛮行に比べればとるに足らないこのような消極的な抵抗に対し、全斗煥は市民たちの破壊行為の結果このような事態が発生したといわんばかりの虚偽報道をしている。

しかし、一方で「海外のみなさんへ」は次のように書いている。

抵抗運動の中心勢力は、全く理性的な行動をずっととってきた。例えば、光州中央警察署は、近所の住民たちの説得のお蔭で、極度の興奮状況のなかでも、すくなくとも三回は攻撃を免れました。MBC放送(文化放送)局が、原因不明の過程で火

すでに大勢は決まりつつあった。特に警察はすでに戦意を失い、むしろデモに加わる者がいた。また市民たちも、このように戒厳軍の兵士と警官とを区別し、警官を市民に準じて扱った。

午後一〇時五〇分、西区林洞の後ろの方でバス一台とトラック五台を奪取したデモ隊は、つるはし、角材などで武装して錦南路の方へ接近した。デモ隊が通る道では銃声と悲鳴がおこった(日誌)。

この戒厳軍の発砲について、二〇日ソウル発のAP電は「光州駅を占拠しようとしたデモ隊を阻止するため兵士が始めて発砲した」と報じている。

この日、戒厳軍司令部は高まる光州民衆の戦闘意欲を少しでも柔らげようと連行された学生や市民のうち一六七人を釈放すると発表した。この時の談話は「戒厳軍は皆さんの息子を構成された国軍だ」「戒厳軍を敵対視してはいけない」「二〇日光州発 共同」と述べたという。しかしこの釈放が実際に行なわれたかどうかは確認されていない。

今や、戒厳軍の反民衆殺人集団としての性格は誰の目にも明らかであった。

戒厳軍は民衆に向かってM16を発砲する。しかし民衆はひるまず、包囲の輪を縮める。

今や、戒厳軍の反民衆殺人集団としての性格は誰の目にも明らかであった。

午後一時五分頃、デモ隊の包囲圧縮で道庁が危うくなると、市の郊外では再び曳光弾、信号弾の音とM16の銃声が豆をいるように響き、道庁の噴水台の前では二個大隊兵力の空挺部隊が投入され、最後の阻止線を設けた。
夜中を過ぎてもデモ隊の喊声とのぼる火柱は絶えなかつたし、道庁には農城洞派出所など、デモ隊に占拠されかかっている官公署からかかってくる最後の電話が続いた。
この夜、ずっと続いた光州市全域の市民デモで行政活動がすべて中止され、行政麻痺の無政府状態におちいった(日誌)。

市内の病院は総合病院、個人病院を問わず、かつぎこまれた死傷者で超満員であった。
デモ隊の一人はAFP通信の記者にこう語っている。
重傷者は二〇〇人を越えている。急患用棟は重傷者であふれており、病院の医者によると多くの民衆が銃弾にあたるか、こん棒でなぐられるか、負傷している。絶え間なく運びこまれる負傷者のために病院の入り口にもベッドが用意された(二日ソウル発 AFP)。

またデモに参加していた別の若者はこう語っている。
軍の兵士たちが前夜(二〇日)、公園の木に男女の死体をつり下げ、過去四日間に学生六〇〇人が逮捕され、食料も水も与えられていない(同前)。

午前八時三〇分、……駅前ではバスなど車両四台を全焼させており、二〇日夜、バリケードとなった各種の車輛相当数が、焼けたまま、道端に打ち捨てられている。
午前九時。デモ群衆は錦南路二一三街一帯に移り、シユプレヒコルを続けた。戒厳軍は道庁前に密集して防衛の体制をとり続けた。九時二〇分ごろ、一部のデモ隊はバス、トラック、ジープなどを



民衆の怒りは爆発した(5・21)

この日学生や市民は装甲車を奪い、銃と弾薬を奪って本格的に武装する。デモは二〇万人に達する。人口約八〇万のうち、赤ん坊や老人を除き、市民のほとんどが街頭に出て闘った。戒厳軍の最後の砦、道庁は夕刻ついに民衆の手に落ち、全市が民衆に占拠される。戒厳軍は退却し、クーデター権力は光州において麻痺し、光州は「自由光州」となる。

市街戦は前夜から徹夜で続いている。

早朝二時、道庁周辺のデモ隊が集結すると、マイクで女性の甲高い声が流れた。
「光州市民の皆さん、絶対に家に帰らないで下さい。われわれは武器がありません」声はさらに続いた。「戒厳軍将兵の皆さん、両方の手を集めて固めましょう(市民と軍の共闘を呼びかけたもの)。われわれは戒厳軍の皆さんの愛している兄弟姉妹です。一〇万人の市民が現在道庁に向けて進もうとしているため、戒厳軍が私たちに空砲と三、四発の催涙弾を撃ちこみました」

さらに女性の声は一段と高くなり、「絶対に退くな。この催涙弾で死ぬことはない。前進しよう」と叫んだ。
夜明けになって、新たな市民、学生たちがデモ隊に合流、錦南路三街あたりで集結しながらシユプレヒコルを繰り返した(韓国日報 5・23)。

軍側から奪って、その窓ガラスを割るなど再び暴れだした(韓国日報 5・23)。

その頃、光州最大のホテル、光州観光ホテルは「全斗煥の弟を出せ」と叫ぶ五〇〇〇のデモ隊に包囲されていた。これは同ホテルで全斗煥の弟が滞在しているという噂が市内に流れたためであった。

正午過ぎ、デモ群衆は走っている車を見つけたら、奪い取っては喊声をあげて走り回ったので、市内の道は車であふれた。街頭には、中、高校生、女学生の姿も多数見られた(韓国日報 5・23)。

この段階でデモの参加者は二〇万人を越えた。それはまさに「民衆総決起」そのものであった。

この日の集会でまかれたピラの一つに、全南民主民族統一のための国民連合会と民主青年、民主救国総学生連盟の名による「民主守護、全南道民総決起文」(資料参照)がある。

このピラは、空挺部隊による虐殺行為を糾弾し、光州の警察にどちらに立つのかを迫り、市民は石と棍棒を、勤労者は工具を、農民は鋤と鋏を持って決起することを呼びかけている。
そして次のように締めくくられている。

勝利の日まで全道民は武器をもって毎日正午を期して、全南道庁前広場、光州公園、錦南路、新光州駅へ集まろう!

光州市では遂に民衆の武装決起にいたる。光州の民衆はいかに銃や弾薬を

民衆がデモ隊のためにパン、飲み物などを持ちより、ガソリンも無料で提供する。デモの参加者は二〇万人を越え、民衆は自らの秩序を自らの手で作り始める。

各国の通信社は民衆デモの様子を次のように報告している。

三日目を迎えた反政府デモは夜を徹して続けられ、二一日午前四時ごろ一応下火となった。しかし夜明けとともに、市民たちは投石や壊れたビンが散乱する通りに再結集を始めている。

空挺部隊は二一日、増強された。二〇日の目撃者によると、デモの指導者たちは携帯スピーカーで参加者たちに演説し、またパンを満載したトラックが、少なくとも一台、夜中、デモ隊にパンを配って走っていたという(二日光州発 AFP)。

デモに加わっている車のガソリンはガソリンスタンドが無料で提供、一般家庭からはパンなどの食糧、飲み物などが差し入れられているという。デモには中学生や高校生なども多数参加、これを市民たちが拍手で迎えているという(二日ソウル発 共同)。

「韓国日報」五月二三日付は、二一日の朝の様子を次のように伝える。

午前七時ごろ、興奮した群衆たちが錦南路と光州駅前との間を軍のジープに乗って走り、ジープにはM16小銃を構える青年たちの姿が見えた。

奪い、武装を開始したのであろうか。

戒厳司令部は二一日午後、光州市および周辺地区の警察武器庫からデモ隊によって各種銃器三五〇三丁と実弾四万六四〇〇発など、数百台の軍用車、バスなどが奪われたとして、以下のような「報道文」を発表している。

一、一八日から四日間、光州市では、一五万人のデモ隊が、暴動に変わり、二一日午前、光州市内にある防衛産業企業「アジア自動車工場」で、製作した装甲車一台と軍用トラック三〇台を略奪し、光州市内を駆け回りながら市民を扇動した。

一、羅州市内に進出した五〇〇余人の暴徒は、羅州警察署管轄内五カ所の支署を占拠して、武器庫からカービン銃三〇〇丁と実弾二〇〇〇余発を略奪、バス七台に分乗して光州市周辺を走りながら、銃を乱射した。

一、また、この日、暴徒は光州市内の全南医大一二階の屋上に略奪した自動小火器LMG二基を設置、約三〇〇メートル離れた全南道庁舎に向かって射撃を加えたため、同庁舎職員と戒厳軍は朝鮮大学に移動した。

一、光州市内は完全に恐怖のつぼとなつている。また暴徒は、光州市上空を飛んだ軍用ヘリコプターに対しても銃撃を加えた。

一、二一日午後四時半現在、暴徒によって略奪された武器弾薬の状況は次の通り。

- カービン銃 二二四〇丁
- M1小銃 一三三五四
- 三八口径短銃 二二丁
- 四五口径短銃 一六丁

実弾 四万六四〇〇発
 火薬 四箱
 雷管 一〇〇本
 軍用装甲車 四輛
 軍用ジープ 八〇輛
 軍用トラック 五〇輛
 軍用レッカー車 四〇輛
 大型バス 四〇輛
 ダンプカー 一〇〇輛
 その他車輛 八輛

(新軍 共同)

重武装した軍人たちと対抗しなければ、やたらに大死にする者の数ばかり増やす無謀さをとり、彼らは作戦を変えたのである。

いまや彼らの手には、角材と工具、シャベルとツルハシの代わりに、カービン、LMG小銃、手榴弾が握られた(引き裂かれた旗)。

まず、始まったのは軍需工場からの軍用車輛の奪取である。これは午前中のことであった。

アジア自動車工場が襲われたのは(二二日)午前
 一〇時半、装甲車一台、催涙ガス放水車一台など一
 〇〇台以上の車が奪われた(二二日ソウル発 共同)。

最初はこのように自らの働いているところも含めてさまざまな工場から武器が集められたようである。例えば「アジア自動車工場が襲われた」といっても、「引き裂かれた旗」には道庁前広場にさまざまな車が結集した時、「アジア自動車工場の整備員数百名がやってきて故障した車両を整備して再び動かした」とある。こういった労働者たちが自ら率先して、自分の働

いている工場から闇闇に必要なもの(この場合は装甲車)を持ちよったとみる方が自然である。

火器の奪取と市民の本格的武装が始まるのはこの日の午後からである。武器の奪取先は警察の武器庫(ここには郷土予備軍の武器の多くも保管されている)、工場にある郷土予備軍の武器庫、および軍の武器である。光州の近郊市にも調達隊が出かけ、みずから武装するとともに、武器を光州へ持ち帰った。

午後四時四〇分、バス二台に乗った群衆は和順警察に放火、西派出所も炎上した。警察署長と市長はそれぞれヘリに乗って逃げた。……午後二時三五分、一部の群衆は羅州に行き、交番四カ所、予備軍武器庫から武器を奪取、光州に行進しながら発砲した。同三時ごろには、和順の武器庫から武器を奪取、光州に向かっていくという報告があった(韓国日報 5・23)。

和順警察庫から奪われたのは「カービン銃二〇〇丁、M1ライフル一〇〇丁と小銃弾一〇〇〇発、ダイナマイト(二二日ソウル発 UPI)であった。また羅州警察からは「対空機関銃二丁・銃弾四万数千発」「二二日ソウル発 読売・島元特派員」が奪われた。

この他にも軍の武器庫も襲われている。

デモ群衆は三一師団、和順、松汀里(光山郡)、羅州、咸平などで武器を略奪してきた。銃が約四〇〇〇丁、実弾が約五万発、手榴弾、ダイナマイトなど、充分に戒厳軍と闘えるだけの武器を確保したという(引き裂かれた旗)。

工場については前に引用した宮川さんが次のように

園に集まれ!

道ばたに立っていた人物がM16で武装した運転席の学生にM16の弾倉を渡した(AWSJ 5・23)。

この時戒厳軍はまだ道庁を中心に市内の拠点から、市民に対する銃撃戦を行っており、市民一人ひとりが、身を守るためにも、銃をおびて戦う必要があった。武器の大量配布はこうして緊急の闘争上の必要であった。

この日「市民軍をつくらう」という呼びかけが行なわれたという報告(二二日ソウル発 東京・吉田特派員)があるが、当日の戦闘の状況下で武器をとったすべての市民が直接に「市民軍」なのではなかった。「市民軍」をつくるためには、この日の大衆武装をもう一度編成しなおさなければならなかった。

この日、闘いの必要上無統制の市民武装が行なわれたという事実が、戒厳軍が退却したあとの、武器の回収、集約の必要性を生みだすのである。それは後に述べるように、無秩序の武装の制限と、武装部隊の編成と(二二日の側面をとらなう)、進行した。

午後一時頃、デモ隊は車で戒厳軍に体当たりして阻止線を突破しようとし、戒厳軍は民衆を銃撃した。最後の決戦が行なわれる。民衆は勝つ。午後五時、道庁は民衆の手に陥ち、戒厳軍は午後五時すぎ撤退する。

錦南路では二〇万(一説には三〇万)名のデモ隊と一万人の戒厳軍のにらみ合いが続いていた。

語っている。

デモ隊は全薪工場に備えつけの銃六八丁を持ち出し、警察の派出所を襲撃して奪ったピストルなどで武装、双方の撃ちあいが続いた(毎日 5・28)。

武器の奪取がこうして急速にすすんだことは、すでに権力の機能が、三日間にわたる大衆デモで麻痺におちいり、闘いの正義が権力の正統性をゆるがせていたことを示している。第三一師団の武器庫も開けられたという「引き裂かれた旗」の報告は重要である。第三一師団は地元予備師団であり、最初から光州の民衆との戦闘に動員されているが、当然士気は上らず、抗命がおこっていたことが伝えられる。

また武器の奪取が和順をはじめ近郊の警察署から始められたのは、近郊警察力が光州市内に動員されて手すだつたという理由もあるだろう。また一カ所で武装した市民たちは、次の武器庫に武装してのりこむことができるので、奪取は急速にすすむのである。

国民皆兵のなかで光州市民の多くが武器の操作経験を持っていたことも急速な市民武装の前提であった。こうして獲得された各種の武器は、まず学生など、よく組織された民衆部分のみならず武装するのに用いられた。だがそれだけではなく、光州中心部に集約され、武器を欲する市民に広く配布されたようである。

この日、学生の車に便乗した「アジア・ウォール・ストリート・ジャーナル」の記者は次のように報じている。

車にはスピーカーがついていて、街を流しながら呼びかけていた。

「光州公園に武器がある。銃の欲しい者は光州公

二二日夕刻、道庁は民衆が制圧した。

この時の様子を、五月二〇日から二二日まで光州に滞在していた共同通信の鈴木特派員は次のように報告している。

同(二二)日朝六時ごろ再び集まり始めた市民は、度重なる解散警告を無視して集会を開き、国旗を振り、国歌を歌い、「軍はすぐ帰れ」「戒厳令即時撤廃」などと呼び、猛烈な投石で軍を圧迫した。

二二日午後、市内目抜き道の錦南路を中心とした攻防は市街戦ともいえる激しさだった。機関砲付きの装甲車を先頭に、銃を腰だめにした歩兵が続く。市民も正確な投石でこれに対抗。ビルの屋上からはフットボール大の石やコンクリートブロックが降り注いでいた。

突然それまでの催涙弾発射音とはまるで異質の、

光州刑務所襲撃について

戒厳司令部は五月二二日、民衆が光州刑務所を襲撃したと強調しているが、民衆側の報道にはこの襲撃のことは言及されていない。「光州事態経緯・真相・処理」をそのまま引いておこう。

「とくにこの日(二二日)武装暴徒たちは間諜および左翼囚一七〇余名が含まれる二七〇〇余名の服役罪囚が収容されている光州矯導所を五次にわたって襲撃し、これらを脱所させて暴徒に加わせるため、矯導所を守っている戒厳軍と交戦、両側に死傷者を出す暴挙を恣行した」

二二日の各言論機関の代表への説明でも、全斗煥はこの点を強調している(六二頁参照)。

「海外のみなさんへ」の筆者は書いている。

私は……二〇日の夜からなされた道庁前の抵抗運動を目撃しています。二二日の午後一時頃、無差別の銃撃がはじまりました。一〇歳ぐらいの子供が撃ち殺されました(警察署の路地で目撃)。また、錦南路のcockは働いているところを殺されました。

午後一時二〇分頃、全一ビルの二階屋上で戒厳軍がデモ隊にむけて銃撃を始める。またたく間に八名が倒れ、一時三〇分頃、四〇名余りが倒れる。三時ごろ数十名が倒れる。五時頃、六名が倒れる。(日誌)。

錦南路の中心街でバスとタクシーを先頭にしたデモ隊は阻止線の突破を試みた。車はサイレン、クラクションを鳴らし、午後零時三六分、道庁の裏手で、警察機動隊にぶつかると投石を開始した。道庁側は取材記者に対し午後二時までに撤収せよ、と最後通告(韓国日報 5・23)。

すでに各地で奪ってきた銃で武装したデモ隊も銃撃でこれに応戦した。だが勝負は明らかであった。戒厳軍は死を恐れぬ民衆の前進に後退するしかなかった。

自動小銃連射音が道庁前広場の方で、五、六回と聞こえた。この軍の最初の発砲でかなりの市民が死傷したらしい。

危険なので一時避難したが、約二時間後の同四時ごろ、銃声が途絶えたところで取材基地にしていたホテルに帰り、シャッターのすき間からのぞいてみたら、錦南路に市民の四遺体が放置してあるのが見えた。

軍のヘリコプターが超低空で群衆に解散を呼び掛けるが、このころには予備軍倉庫や、警備が手薄になった警察を襲って奪った小銃で武装した市民の逆襲を受けて、早々に退散する始末。

「北」との対立が続く韓国では、市民に定期的に軍事訓練を行ない、銃の扱いに慣れている人が多いのも、政府にとっては裏目に出ているようだ。ホテル六階から見下ろすと、どの市民も兵士のような身のこなしで、ビルの陰から陰へ移動していた。日が暮れるころにはデモ隊側の「勝利」がはっきりしてきた。それまで街頭を警備していた軍、警察の姿はどこにも見えない。

光州市は二日夕、市民対軍の市街戦さながらの衝突の結果、道庁など都心部から周辺の住宅地をも巻き込み完全に武装した市民の手に落ちた。軍は二一日午後五時ごろ、市内朝鮮大学構内に撤退、同市内では予備軍兵器庫から持ち出したとみられる自動小銃を手にした市民が、軍から奪った大型トラック、ジープなどに国旗を立てて乗り込み、時折空に向けて発砲しながら縦横に走り回って氣勢を上げていた(二日ソウル発 共同)。

そのトラックに、「全斗煥を八つ裂きにしろ」と大書した横断幕を掲げて行進する学生たちを写したUP

Iなどの写真は、各国の新聞、雑誌に掲載された(もともとも光州の民衆が武器をとった時点から報道が禁止されたインドネシアのように、光州の報道が禁じられた国もある)。

「引き裂かれた旗」の筆者はこの日のことを次のように記している。

一晩中響き渡る銃声、戦争映画で聞いた連発するあの銃声。カービンと、LMGでひきつづき撃ち込まれる銃弾は、一体誰の胸を狙うためにあのように残忍に撃ち込まれるのであるか。すでに都心のアスファルトは鮮血で染まり、戒厳軍の残酷な無差別発砲に夜を徹した群衆は、五〇〇名以上が血を吐いて倒れた。これは高校三年生の甥たちが、夜を徹して彼らに火炎ビンを投げつけて抵抗し、見られない姿で帰ってきて伝えた言葉である。私は犬死にをしてはならないとやめさせようとしたが、「友達が死んでいき、兄弟たちがみんな死んでいくのに、自分だけ生きようとして逃げよと言うのですか?」と、興奮を押さえられず、むしろ私に向かってきたため、私は言う言葉がなくなってしまった。

血を見た学生と市民の心は怒りと呪いで興奮の極に達した。市内のすべての運転手は、各々車に乗ってきてデモ群衆を乗せてカーパレードをくり抜けはじめた。街路にはどこに行っても切れ目なく市民が出て、デモ群衆に拍手と歓呼でもって激励を送り、若者は我れ先に車に乗った。高速バス、市内バス、軍用トラック、装甲車、ブルドーザー、霊柩車、將軍専用防弾車など、写真でも見るのできないいろいろな車輛数百台が動員されたのであり、アジア自動車工場の整備員数百名がやってきて故障した車輛

た。高速バスの屋根の上に登った数十名の学生が、喊声をあげ、銃剣の代りに角材と工具で車体を叩きながらスローガンに強いアクセントを加えていた。車を確保したデモ群衆の機動力は、恐ろしいものであった。

弟は、オープンカーにたい松をつけて市内を走りまわり、市民の決起を促す街頭放送をして汗を雨のように流しながら、彼らとすでに合勢しており、私はこれを止めさせたくなかった。それでも生死をかけてともに闘争する熱い真心に心の中でどれ程有難く思ったかわからない。

おびただしい犠牲にもかかわらず、勝利した民衆の心は解放感に満ちあふれていた。

市を制圧した形のデモ隊は、軽機関銃で武装し、弾薬帯を空中に投げ上げながら軍用車を取り回している。血なまぐさい衝突がやんだあとには、お祭り騒ぎのようなシーンも見られ、制服姿の女学生や、時には子供たちまで戦車に乗っている姿がみられた。デモ隊はそれぞれ韓国国旗を振っていた(二日ソウル発 AFP)。

敗北し、市から撤退を余儀なくされた戒厳軍は、さらにもう一度一人の兵力で市の中心部の奪還を計るが民衆の反撃で失敗する。民衆側はすでに武装しているのである。

ヘリコプターで現地に飛んだ李煥性戒厳司令官は午

後七時半、特別談話を発表、「光州市の騒乱は不純分子およびスパイが事態を悪化させるために各種の流言蜚語を流布し、公共施設に放火するなど計画的に地域感情を刺激、扇動したため」であり、「戒厳軍は暴力で治安維持を乱す行為に対し、やむを得ず必要な措置をとる権限を有している」と警告した。

この談話の直後、戒厳軍は約一万人の兵力でもう一度、市の中心部に攻撃をかけた。

しかし民衆の側は、羅州警察から奪ったばかりの対空機関銃をビルの屋上に据えつけ、これを迎えうった。

市民が中心部の全南大付属病院の屋上に軍から奪った軽機関銃二丁を据えつけ、射撃を始めたため中心部接近に失敗、市民は一部を残して数万人が徹夜で街頭を占拠し続けた(二日ソウル発 共同)。

警察は約三五〇〇人の警察官が、ごく一部を全羅南道庁内の道警察局に残して大部分が中心部から離れた朝鮮大学などに退避、道庁に残る警察官も街頭に出られない状態(二日ソウル発 共同)。

完全な民衆の勝利であった。

光州の民衆は、戒厳軍との文字通り死にもぐるの市街戦の結果、戒厳軍を完全に蹴ちらし、偉大な勝利をかちとったのである。

この日光州に投入されたのは「空挺部隊と第三一予備師団の計一万余の兵力と伝えられるが、二一日午後遅くには空挺部隊がいったん市街からひき、地元の第三一予備師団が光州市の周囲を取り囲んで警戒中といわれる」(二日ソウル発 読売・島元特派員)。

また「日誌」は、この日投入された兵力を「陸軍第二四師団、空挺部隊二個旅団」と伝えている。

を整備して再び動かした。列をなすデモの車に油を供給するのに惜しみがなかった。一滴でも多くあげようと、通り過ぎる車を呼び止めて与えた。車輛ごと血で書いたプラカードと、まだ乾き足りない鮮血が流れる車体のスローガンが市民の心をゆり動かした。

泣きながらも、つい笑ってしまった姿も多かった。

戒厳司令部の広める「流言蜚語」

戒厳司令部は、二一日夜のソウル放送で、「流言蜚語」がとんでいるとして、その内容を次のように発表した。

- 一、現在の事態が悪化すればするほど金大中(元大統領候補)は韓国の偉人となる。
- 一、崔圭夏大統領も戒厳軍によって軟禁されており、先の特別声明(五月一八日)も軍人によって作成された。
- 一、金大中の家宅捜索で六〇億ウォンの韓一銀行発行の手形と数千ドルの外貨が見つかった。
- 一、光州では多くの市民が死亡し、軍の発砲命令が下った。
- 一、光州市内のバスターミナルには死体が並べられており、道庁の広場と全南大学の前は血の海となった。
- 一、現在、光州では民衆が蜂起し、自動車、放

送局を破壊している。ここで軍人が発砲し、八人が死亡した。

- 一、全州市では学生一人の葬式が行なわれ、光州市では四十余人が死亡した。
- 一、光州市では空挺部隊が銃剣で市民を刺し殺し、女子学生は下着だけを残り、裸にされた。
- 一、一部市民が竹やりで武装し、戒厳軍に抵抗している。
- 一、デモ隊と軍の衝突の際、一台の装甲車が子供をひき殺した。
- 一、光州カトリック教会の建物の中に六人の死体があるが、一人の女性の死体は乳房を切り取られている。
- 一、慶尚道出身の軍人が戒厳軍に便乗して全羅道民を殺している。
- 一、光州騒乱事件は慶尚道と全羅道の地域戦争で、慶尚道出身軍人が全羅道人を掃滅すると脅している。

嘘らしいことも混っているが、「空挺部隊が銃剣で市民を刺し殺し、女子学生が裸にされた」などという真実も含まれている。

すでにこの頃には、光州虐殺の真相が、直接口から口へとソウルをはじめ韓国全土へ伝わっていた。

そのすべてを「流言蜚語」として否定し、民心を混乱させるそくな心理作戦が、この奇妙な「流言蜚語」発表だったのであろう。

それとともに、光州事態を、金大中氏の扇動と全羅道の地域的感情という文脈に押しこもうとする巧妙な毒素もふりまかれていた。

しかし、軍の士気は落ち、一部は武装解除された。

光州の軍隊も既に二〇日ごろ指揮が乱れ始めたと言われており、予備軍や機動隊も、二〇日ごろまでに市民に同情する傾向を示し始めたため、これら予備軍や機動隊は戒厳軍によって「武装解除」されたともいわれる(二三日ソウル発 共同)。

「引き裂かれた旗」の筆者は次のように書く。

空挺部隊が撤収したといううわさが聞こえる。現役の大尉が直接伝えるところによれば、空挺部隊内に全南出身の一人が内務班に加わっていたのが火種となったという。

市民を無差別に虐殺する彼らの実態に憤慨した兵長が、横にいた五名の兵士を射殺し、自分も自殺したと言う。隊列が乱れた空挺特攻隊は都市郊外に一旦後退し、一般戒厳軍が要衝を掌握したまま、デモ群衆に向け継続して無差別発砲を行なって来た。アスファルトの上ねばりついているある幼い少年たちの遺体を見れば、どんな木石のような人間であれ、黙って見物するばかりでいられるだろうか。

確かに民衆の犠牲は大きかった。

この夜、戒厳司令部はこの日の衝突で「軍、警察の五人、市民一人の計六人が死亡した」と発表した。しかしそれを信じる者は誰もいない。

「日誌」の中である記者は、「(この日の)死亡者の数は確認されていないが数十名になると推定されている」と記している。しかし日誌の別の記者はこう書き記す。

私は自由と民主主義がこの集会に具現化されていたことを誇りに思います。金と名のる学生指導者は市民たちに、かく言う自分さえ北から送り込まれたスパイではないかと疑ってみるべきだ、と力説しました。そして、日本やアメリカの放送を聞かないこと、そして聞いたりしたことではなく、自分自身が目撃したことのみを話すようにと注意していました。

二二日光州発のロイター電は、同日現在の市民たちの要求を紹介している。

- 一、軍の実権を握る全斗煥の辞任
 - 一、金大中氏の釈放
 - 一、崔圭夏大統領を代表とする「かいらい」政府の辞任
 - 一、全斗煥国軍司令官の即時処刑
 - 一、政権の民主勢力への移譲
 - 一、逮捕、拘留されている学生、反政府人士の釈放
 - 一、戒厳令の解除
 - 一、大学の即時再開
 - 一、マスコミによる光州市の事実の報道
 - 一、発砲の即時停止
 - 一、政府、マスコミによる全羅道と慶尚道の住民感情に関する歪曲の中止
- デモ隊を乗せて市内を往き来する車には「全斗煥に死を」と大書されていた。

この日、收拾対策委員会が組織される。道庁には民衆の防衛と市民自治のための部局がおかれる。光州の市民自

この日、一日で数百名が死亡、数千名が負傷、また連行者も数千名に及ぶ。全南大付属病院、キリスト教病院、赤十字病院は超満員になる……。

。全南大学付属病院——死者三九名。重傷者数百名。

。朝鮮大学病院——死者一三名。重傷者数百名。

。キリスト教病院——死者二一名。重傷者八五名。

四 自由光州の出現

五月二日

すでに光州市全域は民衆の手にある。戒厳軍が撤退した道庁前広場で一〇万人集会が開かれる。

「事態收拾対策委員会」が生まれ、戒厳軍との交渉が始まる。デモは光州から全羅南道全域に広がっている。戒厳司令部は金大中氏の取調べの中間発表を行なう。

この二日から五日間、光州市は文字通り解放され、民衆の管理下におかれるのである。

道庁前広場には朝から続々と人が集まってきた。その数は一〇万人に達し、午後からは「反政府市民決起大会」が整然と行なわれた。

民衆大会が連日、道庁の前で開かれ、医科大生が死体三〇体を道庁の噴水の前に置いて決起大会を開催する。全斗煥は退陣せよ!

治が始まる。

二二日、收拾対策委員会という機関が、市の有力者を構成メンバーとして組織された。

光州に二三日から二五日まで滞在し、学生代表の話を直接聞いた日本人旅行者の報告(読光 5・26)によると、これを組織したのは学生たちである。

二二日から学生たちは神父、牧師など各界代表による收拾委を設け、対策を練っている。「勝利のうちに、かつ正当な方法でこの運動を展開したい」という学生指導者はこういったが、その具体的な内容になると深刻な面持ちで首を振った。学生たちの心からは、軍隊の再襲来の恐れが消えていないようだ。

YMCA、YWCAの総務、前市長、青年商工会議所会頭、弁護士など一五名から成るこの收拾対策委は、おそらくその名の示す通り、再び軍の無差別殺りく作戦を招かず、しかも要求を最大限に貫きつつ、いかに事態を收拾するかという問題に対処する委員会であった。むしろそれは市民の要求を代弁する戒厳軍との交渉機関であったように思われる。だが一方では、道庁内部には自治と秩序維持の機関が作られている。前述の日本人旅行者によれば、道庁内は次のようであったという。

これらは三階建ての道庁の正面一、二階を占拠し、治安対策、收拾対策の本部を置いている。道庁の玄関と、部屋の入りに、自動小銃で武装した学生が、出入りの人々を厳しくチェックしている。

戒厳軍が運び去った三〇〇体の死体と数千の負傷者はまだ確認されていない。

光州の歴史的な一日が終わろうとしていた。しかしこの日、闘いがあったのは光州だけではなく。デモは全羅南道の木浦、羅州、和順、長城、梁山浦、靈岩へと全羅南道全域へ波及していった。

殺人魔全斗煥を処刑せよ!

戒厳令を撤廃せよ!

金大中氏を釈放せよ!

などのスローガンを叫ぶ。道庁会議室に死体六〇体余りを移す(日誌)。

学生自らが市内の治安を担当するための組織を構成した。占拠された道庁が学生の臨時本部となるや道庁前の広場と錦南路市街は人の波にうずまり、再び秩序ある「市民決起大会」を持ち、「戒厳令撤廃」「全斗煥の退陣」「金大中の釈放」「拘束者の釈放」等のスローガンを叫んだ。宗教界、学生代表、学界、法曹界、言論界等の人士で收拾委員が自ら構成された(真相)。

二二日の市民決起大会に参加した「海外の皆さん」の筆者は次のように書いている。

私は道庁舎前の広場で市民集会、示威運動に二二日の午後七時一〇分まで参加しました。私は学生指導者たちの完璧な純粋さにショックを受けまし

(読光 5・26)。

戒厳司令部は後に道庁に「闘争委員会」が組織され、その下に一〇の部署が作られたとしてその人員構成を発表している(戒厳司令部のまとめた「光州事態経緯・真相・処理」)。

- 闘争委員長 金鐘培(二七歳、朝鮮大生 貿易三)
- 行政副委員長 許圭晶(朝工大)
- 外務副委員長 鄭祥龍(三一歳、普成企業営業課長)
- 企画部長 金英哲(二三歳、YWCA信協)
- 状況室長 朴南宜(二六歳、骨材運搬運転士)
- 機動打撃隊長 尹錫樓(二四歳、砂利工)
- 治安部長 金俊奉(二二歳、会社員)
- 代弁人など。

戒厳司令部の発表は、光州事態を北のスパイや金大中派の陰謀としてえがき出すため、「暴動」が組織的、計画的であったという側面を誇張している。だが、起ち上がった大衆の構成と收拾委自体の構成から見ると、收拾委員会が闘争から生まれた新しい秩序をすべて取りしめたとは思われない。收拾対策委と重複しながら、何らかの闘争委員会的性格の機関が存在した可能性は高い。

いずれにせよ道庁は光州の市民自治の中心となり、光州は組織された市民・学生によって運営される。自治については「真相」がくわしい。

男女大学生が治安隊を組織して銀行と農協米倉庫を守り、一部知覚のない青年の横暴を迅速に正確に防いだと言う。光州警察署の玄関と壁には「本警察

署は我らの財産 器物破壊は税金課重 自ら保護し
ましよう。学生一同」という標語がはられていた。

戒厳軍が外部との通信、交通を遮断させ、生活必需品と食糧が供給されない中にも買い占め、売り惜しみ行為と暴利をとる者がなかった。いつ解けるかも知らない事態の中でお互いに食糧を分け合って食べ、銃傷による患者が急増して血が不足すると献血する市民の数が無限に並び立って、今も献血の血が余っている。

婦女子はアモ隊員に自ら飲食と薬品を提供し、腹が減っている戒厳軍にも憎しみを忘れたように食べ物を提供して与えた。

事件の全貌が発表されていないが、三名のスパイ容疑者を捕えた。いわゆる治安部不在の十日間、いたる所に散らばっている石ころ、ガラス、催涙弾の破片を掃き出す市民達、銃撃の危険を省りみず、患者を運搬、看護した医者、看護婦たち、生命を投げ出し若人を保護した運転手たち、いつの時よりも最も善良だったいわゆる不良輩と見捨てられていた人々、棍棒をふりかざした空挺隊員の前で余りにも悲しく、悲しく泣いていた婦人の温かい心、破壊と放火してはならないと留めた我ら全ての光州市民達!! それは我らが知る暴徒の行ないではない。

(真相)

これこそが民主主義であった。
学生たちは「大学生」という腕章を腕にまいて街頭に出、秩序の維持にあたっていた。收拾対策委員会も市民に、委員会の指示に従うよう呼びかけたピラを配布していた。さまざまなピラがまかれ、議論が重ねられ、それを通してものが決まっていた。すでに一八日からは民衆による「新聞」も作られていた。二

六日まで九号続き、民衆の要求が掲載されていた。前に引用した日本人旅行者は、市民自治下の光州について、特に学生たちの秩序維持活動について次のように伝えている。

二二日以後、光州市内では、軍人、警官の姿が一人も見られない。学生と市民代表たちの統制により治安面では一応、秩序が保たれている様子で、一種の「市民自治」の状態にあるようだ。

現在、道庁は学生たちに占拠され、市役所には職員は姿はない。完全な行政不在だ。一般自動車の通行は禁止され、大通りを行くのは自転車とバイクだけ。時折、学生たちが、奪った軍用トラックやジープに乗って市内を走って行く。車の上には太極旗を、そして車体には「戒厳令解除」「全斗煥退け」のスローガンを大書した幕をかがけている。商店、食堂などはほとんどシャッターをおろし、銀行、旅館も門を閉ざしている。市民は昼間は自由に外出できるものの、不安げな表情だ。

市外への電話は依然不通。町はきれいに清掃されているが、焼き打ちされた派出所のあと、つじつじにまっ黒に焼けただれて骨組みだけをさらしているバスや乗用車の残骸が、また郊外のいたるところや車庫には、窓ガラスが割れ、タイヤがパンクしたままのバスが何台も放置されている。その胴体には「光州市民は生きている」の大きななぐり書きがあった。

学生と市民がいま最も神経をとがらせているのはいわゆる「不純分子」あるいは「スパイ」の摘発のようだ。市民はそろって「反共」を強調し、これまでに三人のスパイ(男二人、女一人)をつかまえ、当局へ引き渡したという。私(旅行者)が町を歩い

条件にして、武装を解くというものであったと思われる。

結局のところ、この日の交渉では、第四の項目以外は戒厳軍が拒否し、「市民代表が中央広場に集まっていた群衆に交渉経過を報告したが、若者たちからヤジリ倒され」る光景もあったと伝えられる(二三日光州発 A.P.)。

武器の回収が呼びかけられる。それは武器の集約であって、戒厳軍への引渡しのためではない。

すでにこの日の朝の大衆集会で、收拾対策委への武器の回収が呼びかけられていた。

武器の回収は戒厳軍への武器の引渡しではない。それは萌芽的な市民権力による武器の集約である。自然発生的な、むしろ強いられる武装蜂起を、「勝利のうちに、かつ正当な方法」で発展させるという極めて困難な問題に直面した運動指導部の苦渋に満ちた選択がここにあった。

武器の統一集約はふたつの可能性を開くものだった。收拾対策委による交渉が妥結し、市民の要求が受け入れられた場合には、武器を統一的に引き渡す。交渉が決裂した場合は統一的、組織的に武器を使用し、徹底抗戦する。武器集約はこの二面作戦に備えたものだったと理解される。

事実、武器の回収は、ただちに民衆の非武装化を意味してはいない。回収された武器の一部は組織された市民部隊に再配布されているし、民衆学生部隊による武器の奪取はこれ以後も続くのである。

ていた間に、拳動不審者とみられるためか、立ちどまるたびに市民たちから尋問に近い質問を受け、結局三回も、道庁を占拠している学生たちのもとへ連行され、身分をチェックされた。このため学生代表たちからじかに話をきく機会を得た。学生たちの、私に対する扱いは丁寧で礼儀正しかった(読売 5・26)。

戒厳軍側との第一回交渉が行なわれるが、交渉は不調に終わる。

この日、成立したばかりの收拾対策委は、さっそく戒厳軍との交渉に入った。日本のマスコミの報道によれば、收拾対策委の要求は六項目(あるいは、民衆の武装解除を含めて七項目)であるという。

- 一、これ以上軍を投入しない。
- 二、軍の鎮圧は過剰行為であったことを認める。
- 三、連行された学生、市民を釈放する。
- 四、死傷者に対して政府が補償する。
- 五、事態收拾後は報復しない。
- 六、この要求条項を放送などで全国民に伝達する。

しかし現地にいたシム・ジェ・フーン記者は、要求は全斗煥の退陣を含めた七項目であるとして、第一回交渉の経緯を次のように伝えている。

光州市民代表は昨日、現地軍司令官と休戦交渉を行なったが成功しなかった。光州市を市民が支配してから三日目に、市民側は初めて交渉に応じたので

新首相朴忠勳はアリバイづくりの「收拾特使」として光州へ向かう。

前夜に就任したばかりの朴忠勳首相代理はこの日の朝、金鐘煥内相ら三閣僚とともにヘリコプターで光州へ向かった。新首相の最初の仕事はこれであった。

しかし「治安悪化」を理由に、市内には入らず、郊外の軍事基地に降り立ち、そして光州民衆に対して、「明らかに敵側スパイがまき散らしていると考えられる流言蜚語にまどわされぬよう」呼びかけ、ソウルに戻っていった。これは新内閣は説得を試みたという形を残すためのアリバイづくりの訪問だった。

新任内閣の総理チームが光州に来るといふ報道を聞き、市民たちはそれにすべての期待をかけたが総理を迎えるべく再び道庁に集結した。

すでに戒厳軍が退却した道庁は、廃墟の都市、戦場あとの殺伐とした敗戦都市の姿を呈していた。数十万の群衆は、道庁前で熱い日差しと渇きも何のその、五時間も座って待った。

市民たちは道庁の地下室から死体を取り出してきて、広場に積みはじめた。忍耐と自制でもって発砲を抑制し、数多い軍警の犠牲を払ったという政府の報道が、どんなにふざけた流言蜚語なのかを、総理の前にはっきり見せてやろうというつもりだった。

道庁の地下室に、火焰放射器に焦がされ裂かれた死体が、四七五体も放置されているのを見た市民たちは、再び憤りで歯をふるわせた。
五時、六時、市民たちは徐々に気付けして散らば



遂に民衆は光州市全域を制圧した(5・22)

全斗煥が報道機関の代表にたいしておこなった光州事態の説明(五月三日)

光州は包囲し、木浦などからの流入を遮断した。光州空港とは無線連絡がついている。困難はつづいており、奪取された武器は報道されているより多い。市内の金物屋も略奪対象になっている。群衆や高校生がM1銃をもって派出所に入ると、警官は銃をなげすてて逃げるケースが多い。これ以後、武器を奪取された者は軍法会議にかける。軍の装甲車(アジア自動車庫分もふくむ)二〇台が奪取された。空挺部隊の服装をした怪漢がトラック一〇台に分乗し、無等山にのぼりながら、「ついに湖南の人びとは起ち上がり、慶尚道の軍人たちを殺そうと起ち上がった」と扇動した。これらの連中が沿岸沿いに北に越境を企てる可能性があり、海軍が海上封鎖中。米空母は五月二三日にやってくる。軍は市街戦を覚悟した一大作戦を準備中である。軍には高度な訓練を受けた兵力が充分におり、作戦にさいしては二時間以内はじめた。死体は、再び地下室へ移された。総理は市民と会って対話しようという約束を無惨に反故にし、光州には足も踏み入れなまま暴徒という名を残し、再びソウルへ飛び去った。戒厳分所長の事態報告だけを受けて、「事態收拾特使」はこのようにして、就任後はいじめでの出張に不渡りを出してずらかっってしまったのだ。戒厳軍とだけ面接して行ってしまったのだ。「治安不在、無法の都市」「暴徒が牛耳る都市」という名を残して行ったのである(引き裂かれた旗)。

この時点で、「光州暴動・金大中の策謀、金大中・共産主義同調者」という筋書きを発表したことは、全斗煥の光州鎮圧作戦の政治的筋書きが決定したことを意味していた。戒厳司令部は後に「光州事態」が「悪化」した二つの理由として、一つに「北韓の間諜とこれに協力する不純危害分子たちの策動痕跡」をあげ、次にこう述べている。二つには不純な政治目的を達成するため学生騒擾事態を背後操縦してきた金大中が、光州市の全南大と朝鮮大内追隨学生(主として復学生中心)たちを操縦扇動してきた騒擾事態が発端となっており、事態の悪化と暴動化の過程で光州市内の骨髄追隨分子たちが段階的、組織的にこれを激化させた(光州事態経緯・真相・処理)。

全斗煥はこの日までに戒厳軍による光州の軍事鎮圧をほのめかしている。米國はウィッカム指揮下の韓国軍部隊の自由使用を認めることで、光州鎮圧へ決定的な役割をはたす。この日の午後、全斗煥はソウルの報道機関代表を召集して、光州事態の説明を行ない、ここで光州軍事制圧の方針を明らかにしている(前頁参照)。「北の扇動」と光州事態を位置づけることは、光州民衆との闘いを、「北」との戦争に準ずるものとして扱うことを意味した。それは二三日の米空母の到着、海軍による海上封鎖をとらぬ本格的作戦であった。

この時点で、「光州暴動・金大中の策謀、金大中・共産主義同調者」という筋書きを発表したことは、全斗煥の光州鎮圧作戦の政治的筋書きが決定したことを意味していた。戒厳司令部は後に「光州事態」が「悪化」した二つの理由として、一つに「北韓の間諜とこれに協力する不純危害分子たちの策動痕跡」をあげ、次にこう述べている。二つには不純な政治目的を達成するため学生騒擾事態を背後操縦してきた金大中が、光州市の全南大と朝鮮大内追隨学生(主として復学生中心)たちを操縦扇動してきた騒擾事態が発端となっており、事態の悪化と暴動化の過程で光州市内の骨髄追隨分子たちが段階的、組織的にこれを激化させた(光州事態経緯・真相・処理)。

内に鎮圧する自信がある。しかしこの作戦を展開する場合、良民が人質となる可能性がある。光州では暴徒たちが、奪取した車輛で家々をまわり、合勢を強要し、班長などを脅迫している。市民も暴動の正体を知って戦々兢兢となっている。光州市行政は麻痺して、深刻な食糧不足が広がっている。「持てる者をよっつけろ、つかまえる」というスローガンまで登場した。金大中関係ヤクザ組織四派がデモ隊に合流して活躍中である。二〇日、軍が撤退するとき、全南大屋上で機関銃が乱射され、四名が犠牲になった。光州刑務所は占領されていない。武装暴徒はここを攻撃中である(相当数の思想犯がいる)。無縁で来た結果、統一革命党の刑務所爆破の指令がつづけて打電されている。高度に訓練された空挺部隊を投入し、刑務所を防衛している。

全斗煥の光州鎮圧作戦は、米國の支持なしには不可能であった。地元の第三一師団には動揺が伝えられ、ソウルには光州に呼応する民衆の動きを予防するため首都警備師団をはりつけておかねばならなかった。韓国軍が米軍司令官ウィッカムの許可なしに動かせる兵力は二万人であり、これはすでに全力動員されていた。その事態のなかで、アメリカ国防総省は、この日、光州鎮圧のため、米韓連合司令翼下の韓国軍を移動させることに同意したと発表したのである。また、同日、米国防総省は米國がE3A早期空中警戒管制機(AWACS)二機を沖繩の嘉手納基地に配備したことを明らかにした。前田特使が急拠派遣される。申内閣が総辞職した五月二〇日、日本政府は前田利一元駐韓公使(元アフガニスタン大使)を、特命全權大使としてソウルに派遣することを決定していた。前田特使はこの二二日午前、朴東鎮外相らと会談している。これは五・一七クーデター後、初の日韓政府当局者の会談であった。新聞は外務省筋の情報として次のように伝えている。

金大中氏の「中間捜査報告書」が作成され、全斗煥は光州事態のおのれの筋書きを作り始める。

この日午前一一時、戒厳司令部は金大中氏の「中間捜査報告書」なるものを発表した。

ここに言われている收拾とは戒厳政府のものである。彼は事実上、光州民衆の早期鎮圧を要求したのである。そして木浦で日系企業が襲撃されたというニュースが伝えられると日本の外務省は、ソウルの日本大使館と東京の韓国大使館に対して「日本進出企業の警戒強化を徹底させる」(朝日 5・23)よう申し入れた。日本政府は二二日という決定的瞬間に、全斗煥を支え、光州鎮圧作戦にゴーサインを送ったのである。

五月二三日

戒厳軍は光州に対する圧力を強める。軍のヘリコプターが警告ビラをまく中、收拾対策委と戒厳軍の交渉が続くが、夕刻には決裂する。戒厳軍は重戦車、対戦車ミサイルなどを増強し、光州の緊張が高まる。

解放三日目を迎えた光州は緊張が高まっていた。

二万人のデモ隊がカービン銃や手榴弾を持ち、トラックとバスを使って道庁周辺にバリケードを築いた。この行動は軍が光州を再奪取しようとしているという噂が広がるなかでとられた。道庁前のバリケードは朝鮮大学と全南大学の学生が作ったもので軍が十数台の戦車を郊外に進出させたという報告が届いた直後に作業が行なわれた。光州市役所には「最後まで闘いを続けよう」「北は誤解するな」というスローガンを書いた旗が掲げられた。

この日、戒厳司令部は武装した市民は発見しだいで地域住民は地域感情に誘発されて多く応じた。政治発展についてはハッキリ約束する。こんどの事態が鎮圧されたあと、火の気が拡がらぬと判断すれば、内閣があきらかにした政治日程を絶対忠実にまもる。言論の協調をたのむ。言論問題については現地記者たちの事態報道を許可する。光州市民はデモが全国に拡がっていると理解していた。いまはKBS光州放送をきいて、この事態が全国に拡大していないことを確認している。正確な事実を知る必要がある。五月二三日午後からは、個性ある報道をすることを許す。しかし検閲は形式上やらなければならぬ。最近の言論の実態はよく知っている。誰がどういう風にあそんでいるのかもよく知っている。経営者が経営権を行使しえないのもよく知っている。これは重要な問題である。この事態が終わってもこのようなことを続けるなら、調査したところに従って逮捕も辞さない。しかしそうしたいことがないよう内部的に努力してくれ。経営陣にまかせろ。(翻訳・本編集部)

射殺すると警告するビラをヘリからばらまいた。火器、爆発物を所持する者は誰であろうと暴徒とみなされる」とビラには書かれている。

市から脱出しようとした市民四人がこの日、近郊で殺されたと伝えられた。

デモ隊の集合地である道庁には、デモ隊が殺された人びとの名前をばらだした。家族に知らせるためである(NYT 5・24)。

この日も大衆行動は続く。

朝から約五〇〇名の市民が道庁前に集まった。

道庁前には犠牲者の遺体五二体が並べられていた。この遺体は道庁に仮設された死体置き場に置かれていた。AFP電によれば、この他にも市内の四病院に計八一人の遺体が保管されており、少くとも一三三人の死者が確認されたという。

午前二〇時ごろには高校生たち四〇〇人が金大中氏釈放などのシュプレヒコールをしてデモをした。

そして午後からは戒厳令の解除を求める五万人のデモが展開される。デモ隊はこれを「平和行進」と名づけ、「われわれは暴徒でもなければ反逆者でもない」(三日ソウル発 UPI)と語っていたという。

強まる戒厳軍の圧力に対抗して武装の組織化が行なわれる。

この日も武器の回収がよびかけられ、実行されていた。だが同時に「ニューヨーク・タイムズ」紙のストークス記者は次のような注目すべき報告を行なっている。

この日に一五〇〇の武器が市民委員会によって、一部は学生の助けをかりて集められた。住民は三人組の狙撃隊に組織され、三人組は市の中心部に通じる道路の両側のビルの上、三階に配置された(NYT 5・24)。

軍の圧力が強化され市内突入の構えが明瞭となったこの日、バリエードの構築を始め、軍の再侵入にそなえる措置が市民たちによって強化されたことは疑いない。武器の回収が武装の組織化でもあったことを同記者は報じている。

「真相」によれば、武器の組織的再配布は、收拾対策委と軍の交渉が行なわれている最中、戒厳軍が実力で市内に押し入る構えを見せたため、開始された。

議論が進行する間に戒厳司令は約束を破って市内に武力進駐を指図するや、学生は手渡した武器を再び分配し、武装した(真相)。

この日道庁で学生代表とインタビューしたシム・ジュン・フン記者は「ファー・イースタン・エコノミック・レビュー」誌で報告している。

叛徒の本部となった道庁ビルで行なわれたインタビューの中で、学生スポークスマンは、要求のひとつでも受け入れられれば政府と話し合うと語った。

「しかしだからといってわれわれが武器を置くという意味ではない」と顔をかくした学生スポークスマンは語った。……学生の立場は、政府が空挺部隊の残虐行為を謝罪し、死者、負傷者、損害に対し補償をするならば武器を返すだろうと伝えた年長市民のメッセージと対照的である。彼らはまた、政府が光

州の蜂起を不法暴動と呼ぶことを止めるよう要請した。彼らにとっては、これは義挙であった(FEE R 5・30)。

戒厳司令部のビラが空からまかれ
る。だが市民は相手にしない。

高空を飛行してばらまかれたビラは、ことばこそ「呼びかけ文」だが、内容は欺瞞と術数でかためられた脅迫だった。放送内容も、かえって市民の感情を激化させるだけで、鎮めさせるものではなかった。

「政府は忍耐と自制で発砲できず、数多くの軍警が犠牲となりました。市民のみさんは土着スパイや暴徒らに幻惑されています。一日も早く理性を取り戻し、家へ帰って下さい。暴徒らと分離して下さい。何人かの負傷者はよく治療しています」などと、図式化されたまま硬直した嘘で市民をなだめすかそうという「呼びかけ文」を握った市民たちは、憤慨せざるを得なかった。

人をだますにもほどがある。こんなことがあるだろうか。

政府の発表といえ、大豆で味噌玉を炊くんだといっても、信じる人はもういない。権力に野合して言い訳をつくらう政府高官の姿勢に、良心ある人ならば激怒しないではいられない。

血の海になってしまった死の都市を、死にきれないで叫ぶ市民の喊声、どうしても暴徒と規定しなければすまない彼らのやり方は何なのか。勿論、これほどに混乱した間隙をぬってスパイが

合流したかもしれない可能性を、誰も排除することはできない。放火や殺人で恐怖の雰囲気をつくり出し、政府転覆を図るため「黒いお客さんたち」が接近して来ただろうという推測を、誰も否定はしない。

しかし、市民たちの行動は、決して彼らの幻惑からなされたものではない。どんな熱誠な反共闘士でも、今日の光州を見てそのまま部屋にひっこみ、自分だけ安易に過ごそうとするだろうか(引き裂かれた旗)。

收拾対策委と戒厳軍の二日がかりの交渉は無条件の武器引き渡しを要求したため決裂する。

一方、前日から引き続き、收拾対策委と戒厳軍との交渉は続いていた。

これに臨んだのは尹恭熙カトリック大司教や赤十字光州市社長ら一〇名と、全南大、朝鮮大の学生ら一〇名であった。

收拾対策委では、この交渉に臨むための会議を道庁で開いている。その間「数万の市民たちが道庁前広場に座り込んで、成り行きを見守っていた」(三日ソウル発 読売 島元特派員)。

会議の後、收拾対策委のメンバーは交渉に臨んだ。しかし、デモ首謀者の処罰をしないというこの保証をラジオ放送で全国民に伝えることなどを軍が拒否し、無条件の武器提出を求めたため、交渉は夕刻に決裂した。

二四日が、全斗煥の定めたDデー・光州軍事制圧作戦の日だったのではないか？ だが全斗煥は軍の意思を統一できなかったのではないか？

戒厳軍による光州制圧作戦が二四日に予定されていたことを示唆する兆候が多い。

① 二二日に米國務省は治安作戦のための韓国軍の使用を許可したと発表した。翌二三日、再び「米軍司令官指揮下の若干部隊が、騒乱地区に派遣されるために拘束を解除されつつある」と発表した。これは四個部隊で、この部隊は二三日に移動したとみられる。

② 二三日の收拾対策委との交渉は決裂したが、その中で軍側は、二三日を武器返却の期限としている。これは最後通牒である。同日午後、戒厳司令官署名のビラがヘリコプターで光州にまかれ、「集会をやめよ、当局に挑戦をやめなければ作戦を遂行する」「暴力に加わる者、武器弾薬を所持するものはすべて射殺する」と述べている。これも最後通牒である。二二日光州発のロイター電は、「戒厳軍の市内突入の可能性を示唆する」と報じている。

③ 二三日、市の周辺で軍は「戦車を先頭に一〇〇メートルほど包囲を縮めた」(三日ソウル発 時事)市内突入寸前の構えを示したのである。

④ 二二日の全斗煥の新聞社に対する説明以後、戒厳司令部は検閲を条件にマスコミによる光州報道を解禁したが、早くも二三日早朝には、ふたたび光州報道を一切禁止した。二三日ソウル発の共同電は、「今回の統制強化が何を意味しているかは明らかにされていない」といふかっている。戒厳軍当局は、突入による凄惨な流血を予想しており、報道をさし止めたものでは

ないか。

⑤ 最も疑わしいのは、二四日未明の「特殊部隊の光州突入」である。二四日ソウル発の共同電は、光州からの情報として「二三日午後一〇時頃、戒厳軍の特殊部隊が同市内に入り、強硬派グループ二四人を射殺した。この作戦で特殊部隊側にも数人の死者が出た」と伝えている。

この特殊部隊がその後どうなったのかについて情報はまったくない。しかし二七日朝の戒厳軍の突入時、やはり前日の夜中から特殊部隊が突入し、先導している。それとまったく同じパターンである。突入は二四日未明に予定され、一部発動後、急換中止されたのではないかと推測される。

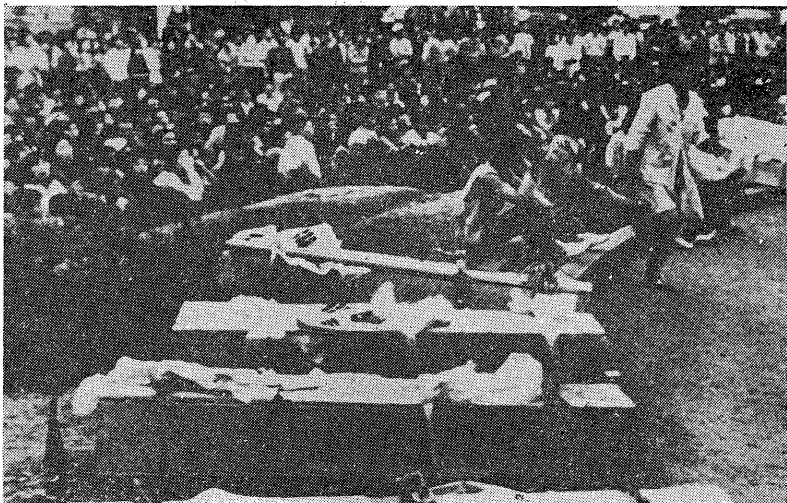
⑥ 二四日朝、予告抜きで金載圭の処刑が行なわれた。光州制圧と金載圭処刑を一挙に行なうことによつて、民心をふるえあがらせ、武断政治の力を示威しようとしたのではないか。それ以外にこの抜きうち処刑(金載圭夫人も通告されていなかった)をこの日に設定する理由はない。

そうだとすると、なぜ二四日の突入が延期されたのか。

この日、ソウルの日本人記者たちが受け取った情報によれば、光州事態処理をめぐって、將軍たちの間に激しい口論があり、軍は意思統一ができなかったという。この情報によれば、將軍のなかには、「お前が辞めればすべて解決する。辞任しろ」と全斗煥に迫った者もいると言われている。

五月二九日に「ソウルと光州の間」から発せられた「韓国からの手紙・4」(資料参照)は、全斗煥の意味深重な発言を紹介している。

五月二四日、ソウルでの記者会見で全斗煥將軍



五月二四日

民衆が制圧した光州はだいに平静さを取り戻し、自治は軌道に乗ってきた。だが他方、緊張は高まる。収拾対策委は拡大改組され、交渉は続けられるが、軍は交渉を無視し、市内に押し入ってきたからである。戒厳軍による完全包囲の中、食糧不足が深刻になってくる。

ソウルではこの朝、金載圭元KCIA部長が処刑される。

二四日には光州市内でも「軍が進攻してくる」という噂が流れていた。そして朝から約五万人が道庁前に集まってきた。

UPIの記者は、二四日の光州の様子を次のように伝えている。

反政府暴動の続いている韓国南部の光州市では二四日朝現在、学生たちは占拠した全羅南道庁舎を本拠に武器集めをしたり、死体の安置、保護に努めるなど、精力的に同市を「自主管理」している。

三日前まで四〇〇万全羅南道民の行政を執行していた道庁舎では、数十人の学生が机に座り、封鎖された市内を巡回するためチームの派遣をテキパキ指図したり、市民が軍隊・警察から奪ったライフル、カービン銃、機関銃、手投げ弾発射装置の回収にあたっている。

市内の電話が途絶えているため、学生たちは軍の携帯用無線電話機や野戦ラジオを背中にかついで互

大極旗を握った少年の死

武器のない学生たちの唯一の武器は角材とガソリン・スタンドから抜いてきた油だった。彼らは五つのドラム缶をトラックの上に積み、缶の中に油を一杯つめたあとエンジンをかけて戒厳軍に向かって運転し、綿のかたまりに火をつけて車に投げつけた。

驚くほどの火柱がたった。それを合図のように、戒厳軍の銃口からは再び火が吹きはじめた。装甲車の上で大極旗を振り、スローガンを叫んだ中学三年ぐらいの少年が、額と腹部から赤い血を吹き出しながら倒れた。その手にはまだ大極旗が握られており、そのまま車の上に倒れていた。

群衆に向かって降り注ぐ銃弾は、雨アタレのように降りしきった。

私の前で指揮していた青年が「アイグ」とひと声を残して倒れた。また続けてあちこちでも……。持ちあがるものを準備できなかったデモ群衆は背中へ背負ったり、角材で担架を作った患者や屍を運んだ。あの幼くして名もなく敢っていく花びらたち、大極旗を手に握ったまま、あんなにもすさまじく死んでいったあの無名の少年の血は、歴史にどのように記録されるだろうか。暴徒、不良輩、あるいは反国家団体の容共分子ないしはスパイにそのかされた逆徒と記録されるのだろうか。

誰も知らない野の草。香りも美しさも持ち得なかった野草のように、冷たい霜に散っていったあの幼い魂を、何と名づければよいのであろうか。

(「引き裂かれた旗」民衆の道庁制圧の項)

食糧不足が深刻になる。

交通の完全遮断によってコメ、野菜など食糧の不足が目立っている。コメはすでに四日前からなくなり、二四日現在、一合のコメも買えない状態になった、と伝えられる。牛乳や野菜の供給も極度に少なくなり、近郊から搬入される野菜は、暴動発生前の二倍から四倍の高値を呼び、それでもなかなか入手できない状況といわれる。

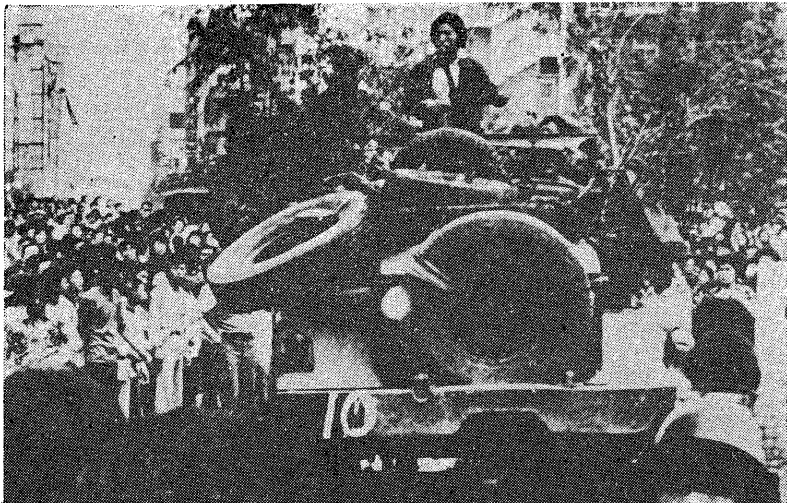
こうした事態に政府は二三日の臨時閣議で、食糧と煉炭の供給を決めたが、実際には「事態が進展しだい現地に供給する」との方針で、当局側の「兵糧攻め」という受けとめ方も強まっている(二四日ソウル発 サンケイ・星野特派員)。

二四日午前、光州を出た「引き裂かれた旗」の筆者も、食糧不足を訴えている。

食糧、生活必需品、野菜など、一切の補給路が遮断された光州の外廓を包囲した戒厳軍は、すべての車輛を封鎖しているため、遠からず貧しく飢えた幽霊の都市へと没落することは明らかだ。市内のすべての米屋の米が一粒もなくなり、売り切れたのは、去る二二日だった。

かますごとの米でも買っておいだ人びとならいざ知らず、庶民の大多数は米がなくなり、すでに食事に事欠いている実情にある。おかずの材料がなくて醤油でご飯を一さじづつ食べなければならぬ市民の心は怒りに疲れ、今は生きる意欲さえ徐々に失っている実情だ。

飢えに飢えて怒った日雇い労働者、または細々と生きてきた庶民大衆が、いま食べるものを求めるた



民衆が街を管理する(5・24)

いに交信し合っている。庁舎前の駐車場には一〇台のジープが待機。中には四人から六人ずつ学生が乗り込み、いずれもカービン銃かM1ライフルを持ち、いざという時に備えていつでも発射できる構えだ。手にはカービン銃、腰にナイフ、ベルトに二個の手投げ弾を装着して大威張りの大学生もいた。

庁舎わきの広場には一八人の犠牲者の木製棺が安置され、その上には白いシートか韓国国旗がかけら

三日後、血の襲撃を実行した全斗煥の未来を占うのに、二四日夜の事態は記憶しておく必要がある。

め市内に一本に出た。とりかえしのつかない、もう一つの凶悪な事態をもたらすきざしがすでにあらわれているのではないか。

光州を救え、という気運は韓国全土に広がっていた。しかし韓国政府はこれを妨害したのである。

五月二四、二六日、光州には食糧がなくなった。またこれ以前に病院に血が不足する等のことがあった。これに対してソウル、特にカトリック側は二五日全体の修道女が献血に参加したが、このような食糧及び救護品の供給までも妨害したという事実があった。これは最悪の場合、飢え死にさせてしまおうとするものと言わざるをえない。新聞も二七日まで救護運動の報道をしなかった（カトリック正義と平和協議会の資料）。

收拾対策委が拡大、再組織される。

この二四日、收拾対策委は道庁で今後についての方針を協議した。その結果は次のとおりであった。

尹恭熙カトリック大司教を中心として市民代表五人で構成されていた事態收拾委員会は、市民、学生たちを真に代表していないとの声を受けて、同日までにいったん解体、二五日には丙時採全羅南道副知事を委員長とする「全道民收拾対策委員会」が設置される運びとなった（二四日長城・光州近郊発 共同）。

しかし二四日の戒厳軍との交渉も「報復しない」という保証をめぐってのも別れに終わってしまった。もは

やこの時、軍側には交渉の意図はなかったのである。翌日、收拾対策委の委員長は変わっている。

光州における一五人の市民から成る委員会は、次のような人々が含まれている。

金チャンギル（全南大学農科大学 委員長）、金チョンベ（朝鮮大学 副委員長）、李ジョンギ（全羅南道副知事）、チェハンマン（市議会顧問、抗日運動に従事した経歴の持ち主）、李ヤンセン（YMCA理事）、張チュートン（――）、尹恭熙（カトリック司教）。

学生の指導者二人は、戒厳司令部との協定によってあらゆる政治的的要求が満たされるようにがんばったが、副知事の意見は政治的なたりきめを延期し、市と住民の生存を保障させようということであった。しかし月曜日（五月二五日）に、学生たちは副知事を委員会から退かせ、代りに弁護士を委員長とした。その日、学生たち（学生以外のものも含む）のかなり大きなグループが武器を携えて山に逃れた（韓国からの声・4）――副知事の名が共同電と違うのは原文のまま。

この日も午後三時から道庁前広場には約五〇〇〇名の市民が集まって集会を開き、全斗煥のわら人形を燃やして、あくまで闘い抜く決意を確認していた。

五月二五日

道庁前では三万人の集会が開かれ、迫り来る危機にもかかわらず民衆の士気は高い。崔圭夏大統領が光州に飛び、説得という名の最後通告を発表、再び緊張が高まる。

で戦う」ともいった。銃を手にしたヘルメット姿の学生が激しく出入りする。机の上には無線機が……。女子学生も意外に多い。

バス、タクシーは動いていない。自転車と徒歩が唯一の交通手段だ。ガス、水道、電気は正常であるが、信号機はすべてストップ。商店街も大半がシャッターを下ろしたままで市場だけが活気を取り戻していた。

激突の舞台となった錦南洞。同市随一のオフィス街も死んでいた。一二階建ての全一ビル前には武装学生五、六人が鋭く目を光らせていた。銀行、ホテル、劇場を含むすべての施設はどこでも休業、ビルの割れた窓ガラスが無残な姿をさらけ出していた。清掃されたイチョウ並木の目抜き通りにはいままお焼けさびた車が二、三台。

弾こんをとどめたアーチ下をジープや軍用トラックが時折突っ走る。太極旗を掲げての学生パトロール隊。銃、黒っぽいヘルメット、覆面、タスキとスタイルはさまざまで、不気味でもある。「われわれの統制は行き届いている。暴走するのは一部の暴徒だ」と学生らは異口同音に語っていた。

道庁前広場の建物には赤や黒文字のビラが数枚はられていた。市民―学生をつなぐ「壁新聞」でもある。「民主市民に訴える」「秩序を回復しよう」などなど。足を止めて見入る市民は多い。だが、口は重く表情は険しい。ビラの中には身元不明の遺体写真も。家族を求め「死者の声」だ。女性を含めて二人。その近くには黒焦げのイチョウの木が幹だけを残していた（二五日光州発 東京・山崎特派員）。

この日、午後から行なわれるはずであった合同葬は延期されている。理由は明らかでないが、祭壇に線香

をあげようとする市民が長い列を作っていたという。なお、一八日から二日にかけての一連の衝突の犠牲者について、AFP電は四五〇人ほどが死亡したのではないかと伝えている。またUPI電は四〇〇〜六〇〇人が死亡し、四〇〇〜六〇〇人が負傷したのではないかとという情報を伝えている。「マスコミ」に発表された死者の数はこれらが最大である。

崔圭夏大統領が光州に飛んできて夜ソウルで特別談話を発表する。外国人には光州一帯からの退去命令がでる。

崔圭夏大統領はこの日、ヘリコプターで光州に飛んでくる。そして郊外の軍用基地で張炳泰全羅南道知事や戒厳軍当局者から報告を聞き、「乱暴行為は憎いが、彼らもわが同胞であり、国民である。引き続き忍耐と自制をもって賢明に処理して、人命の被害を最小限にして事態を收拾するよう最善を尽くせ」と関係者に指示し、「軍がいろいろ苦難に耐えて自制と忍耐をもって最善の努力を重ねたことに對し、その労をねぎらう。犠牲になった英霊に對し深く哀悼の意を表する」（二六日ソウル発 朝日・藤高特派員）と語ったという。

そして夜には「今からでも遅くはない。過去を一切問わないから、すべてを水に流して帰ってほしい」と呼びかける談話を発表した。これはしかし強硬策の前の一つの儀式とも言うべきものであり、光州の民衆に対する一種の最後通告というべきものであった。

韓国外務省は日本大使館に対して「外国人は光州、

内ゲバとかスパイの毒針といった怪ニュースがマスコミから流される。

光州の民衆たちは意気軒昂である。AFPの記者は「市民軍」と名のる二〇〇〇人の学生や市民が武器を再び手にし、「戒厳令廃止と全斗煥の退陣が実現されない限り戦う用意がある」と語ったと伝えている。

道庁前広場には今日も「民主守護国民総決起大会」という三万人の集会が開かれていた。

光州に入った東京新聞の山崎特派員は次のように報告している。

韓国の全羅南道の道都・光州市は完全に学生の手に握られていた。小銃や手投げ弾で武装した学生ら数百人が市中心部の主な建物を占拠、二五日午後には、学生たちの呼びかけで「民主守護国民総決起大会」と名付けた三万人規模の市民集会が道庁前広場で開かれていた。参加者たちは、一、維新残党の排除 二、崔圭夏過渡政権の退陣 三、全斗煥国軍保安司令官の解任などのスローガンを掲げて市内をデモした。これは急進派学生が主導権を握りつつある様子とうかがわれた。同時に、崔圭夏大統領が当地を視察後「今からでも遅くない」と、急進派学生らにとっては「最後通告」とも響くような色合いの呼びかけを行なったことから、市内には戒厳軍の突入が間近のことを予感する緊迫した空気が漂い始めていた。

「われわれは民主主義が欲しいのだ」――道庁内の一室で学生幹部が口をきいた。温和な表情だが、口調は厳しい。「軍、政府が暴虐の罪を自ら認めるま

木浦の市街区から退去するのが望ましい」との退去勧告をだした。

また光州の民衆に対しても戒厳軍司令部はローカル放送で、近く軍事行動があるとして「法に忠実に従う市民は、市中心部から退去しよう」との勧告をしている。そして一方で「光州市民は暴徒の横暴と略奪で恐怖と不安におのいており、政府と戒厳軍が秩序を回復してくれることを望んでいる」と述べ、早急に軍



平静さの中に緊張が高まる（5・25）

事制圧が行なわれる必要のあることを主張した。明らかに戒厳軍の総攻撃が迫りつつあった。この日、ソウルから発せられたメッセージは次のように書きだしている。

わたしたちはどうしたらいいかわかりません。軍隊の巨大な力がわれわれを圧迫しています。韓国の兵士たちは米軍の協力のもとにわれわれを死へと追いやりま。抵抗することは死を意味することだとわれわれは十分承知しています。けれどもわれわれは、わが国が憎悪と残忍さから解放されるために、死ぬ覚悟ができています〔韓国からの声・3・5・25付〕。

民衆どうしの「内ゲバ」とか、スパイの「毒針」といったニュースがマスコミから意図的に流される。

この日の戒厳軍の発表は「一部過激派が再武装して学生決死隊を組織、全羅道庁など公共機関を再び手中に収め、食糧などを集めている」(二五日ソウル発 朝日・慶尚特派員)としたうえで、次のように伝えられた。

一時、自主收拾の希望がめばえたが、強硬派の反対で行き詰まり、いったん回収された武器を強硬派が奪い返し、公共の建物を占拠しはじめている。暴徒化した勢力は二〇歳前後の軍隊経験のない若者が多く、銃器に慣れなため、誤発などが多く、多数の死者を出している。……二五日朝、市民

この時事電は、その後、「この報道が事実とすれば『光州の暴動は北のスパイが入り込み扇動している』」この事件を機に北は工作員を浸透させている」などという、韓国軍部の主張を裏付けることになる(「同前」と続ける。

二五日にこういったニュースがたて続けに流されたことは実に奇妙である。二四日の総攻撃をしそこった全斗煥は次のDデーに備えて、光州を世論から孤立させるマスコミ操作を行なったと思えない。いざれにしろ、これらのニュースは、戒厳司令部以外のソースからはまったく確認されていない。

「内ゲバ」と報道された道庁内の撃ちあいは、二四日夜から二五日朝にかけて、軍が送りこんだ特殊部隊及びスパイとの銃撃戦である可能性がきわめて高い。二日後の二六日、二七日朝の全面攻撃の前段として、軍はやはり同じような作戦に出て、道庁内で撃ち合いを演じているのである。

二六日の状況について戒厳司令部は「ここで戒厳軍は二六日夜、市内に秘密裡に暴徒を仮装して浸透させた要員と買収してあった動乱分子をして、道庁内爆薬の信管を抜いて使えなくし、銃器を作動できないように工作する過程で、暴徒たちに見つかり、一名射殺、一名重傷の犠牲を払いつつ、ついに成功させ」(光州事態経緯・真相・処理)たと発表している。二四日も同じことがあり、これを戒厳司令部はいち早く、「内ゲバ」として市内と外部に流したのである。

学生の穏健派收拾委員会と強硬派が衝突して多数の死者を出したが、多くの市民は当局による秩序回復を望んでいる(二五日ソウル発 サンケイ・星野特派員)。

穏健派と強硬(過激)派の「内ゲバ」説を多くのマスコミが大きく報道し始めた。日本の新聞のほとんどがこの論調である。こんな情報まで伝えられた。

道庁を占拠している武装グループ三〇〇(四〇)人が二五日早朝、急進派と穏健派に分かれて対立、二人が射殺された(二五日長城・光州近郊発 共同)。

一方で奇妙な「スパイ」の話も伝えられる。先ず、ソウル市警察本部は二四日、ソウルの駅前で「北のスパイ」を逮捕したと発表する。

(ソウル市警察本部は)光州市の暴動を扇動する目的で朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)から最近送り込まれたスパイを二三日に逮捕、乱数表など四十数点を押収したと発表した。……逮捕の際、所持していた毒塗りの針で自殺を図ったが失敗、自分の舌の一部をかみ切ったという(二四日ソウル発 共同)。

ところがこの「毒針」が、今度は翌日、光州に登場する。二五日午後、韓国の東洋放送は次のように報じた。

同(二五)日朝、光州市にある全羅南道の道庁前で朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)のスパイと思われるアジテーターを尋問していた学生一人がこの男に毒針で刺され、意識不明の重体となり、毒を口

局の筋書きに一致し過ぎている。現地光州からの報告は「回収した武器が強硬分子たちに奪取される」といった状況は一切伝えていないのである。

五月二六日

早朝、戒厳軍の戦車が一時、市内に進入、市民たちが捨て身で抵抗して引き下がらせる一幕もあった。民衆は四万人の集会で全斗煥の公開処刑を要求。この日学生たちはアメリカに收拾のための仲介を求めるが、カーターはこれを無視する。改組された收拾対策委と戒厳軍との交渉も決着がつかない。

戒厳軍の戦車が市の中心部にまで進入する。制圧への偵察行動である。

早朝、遂に戒厳軍は戦車を先頭に市内にまで進入してきた。しかし市民たちの必死の抗議で一旦、引きあげている。

戒厳軍が進駐する場合、市街地が血で染まる事態が発生することを憂い、收拾委員は非暴力の死で抗議しようとして決議してタンクの前まで死の行進を行なった。戒厳軍が譲歩して退陣し、戒厳司令と收拾委員が再び合議した。事態の收拾が司令官の権限外であることを暗示され、收拾代弁人は大統領との面談のためにソウルに発った(「真相」)。

同日午前六時半、少なくとも市内の二カ所で教台

「地域主義」報道は戒厳司令部の方針

韓国政府高官は五月二六日の朝、日本人記者団に会い、光州の事態について、軍の強硬措置もやむなしという韓国政府の方針に対する理解を求めた。東京新聞の吉田特派員によれば、それは次のような説明であった。

(韓国が)日本のような島国だったら、いつまでも放置しておく。この国の情勢がそうでないことを理解してほしい。……(光州の事態は)韓国の政治、経済などの格差が原因となり、そのような状態を招いたもので、歴史的背景から考えてほしい(五月二六日ソウル発)。

日本のマスコミに光州民衆決起の本質に迫ろうとする報道はほとんどなかったといってもよいだろう。その代わりにどっと出てきたのが、慶尚道と全羅道の格差、差別感情の問題として把えようとする「解釈」であった。

韓国政府は日本のマスコミに対して、「北」の脅威と、慶尚道と全羅道の格差を強調し、誘導している。光州の民衆決起を、いわゆる「全羅道の地域主義」で説明しようとする日本のマスコミに多くあらわれた論調こそ、韓国政府の望むところであった。

で吸い取ろうとした学生一人もこんな睡状態になった。男はそのまま逃走したという(二五日ソウル発 時事)。

の戦車、装甲兵員輸送車を伴った部隊が約二キロ市内に進駐。兵隊が直ちに建物の屋上に陣取り、あるいは砂袋をかさねて機関銃の銃座を設けたりし、有刺鉄線のバリケードで通りを断した。

これに対し市民グループの全道民收拾対策委三〇人のメンバーのうち一六人が、進入してきた部隊のところへ歩いていき、撤退を要求した。代表らは同地区の戒厳軍副司令官と話をした結果、部隊と戦車などが約五〇〇メートル後退した。このあと対策委メンバーは地区司令官に会うためジープに分乗して出かけたが、部隊が後退し始めると、市民の間から大きな歓声がわきあがった。

この三分あと、カービン銃を手にした四人の学生を乗せたジープ二台が群衆のすぐうしろに近づくと、兵士たちは一時神経質な動きをみせた。部隊はいったん後退した戦車を元の場所に呼び戻したりして緊迫したが、学生ジープがUターンして走り去ると、戦車の方も姿を消した。

光州市の町はずれでは、武装した若者と戒厳軍が、約二〇〇メートルの無人地帯をはさんで対峙し、二六日朝には時折銃声が響いていたという。しかし市民のリーダーの一人は「ほとんどは学生に向けて撃っているが、一度だけは学生が兵隊と銃火を交えていた」と語った。

收拾対策委の一人金チュンベッキン(六四歳)は「道庁舎の地下には大量のダイナマイトや弾薬がある。事態が悪化すれば、人々はこの爆薬の上に身を投じて爆破するだろう」と決死の覚悟であることを明らかにした(二六日光州発 UPI)。

AFP電は、この発言を「われわれが占拠している道庁を戒厳軍が攻撃しても、そこには道庁を爆破して



あり、機関銃の銃声が約二時間続いたことを伝えている。

光州の民衆たちは全斗煥の公開処刑を求める。

この戦車の進入は全面侵攻に備えた一種の強行偵察であった。市民たちは早速、抗議の集会を開いた。

約五〇〇〇人の光州市民は同日午前一〇時半から集会を開き、平和解決交渉が進んでいる間に政府が軍隊を市の中心へ向けて進めたのは裏切り行為だと非難した。

また午後には約四万人の光州市民が道庁前で反政府集会を開いたあと、崔圭夏大統領の行った秩序回復の呼びかけに挑戦、政府側が危機的状況をつくりだそうとしており、誠意ある態度をとっていないと非難した。デモ隊は「戒厳令解除」「全斗煥保安司令官打倒」などと叫びながら目抜き通りを行進、約二時間後流れ解散した(二六日光州発 UPI)。

いやそれだけではない。この日民衆は「全斗煥の公開処刑を要求する」(同前)声あげた。

こうした市民や学生たちの動きを時事電は、武装グループが約二〇〇〇人、そして他に市民、学生、高校生ら一万人が同調する動きをみせしていると伝えている。彼らは独自の「闘争歌」を作り、会長、副会長、各部門の担当部長を選出するなど指揮系統を整えていた(二六日光州発 時事)。

市民、学生たちは決戦に備えていた。

「アメリカ政府・崔大統領・ガッデム」 変わる民衆の米国観

ジョン・マーム記者とウィリアム・シェワーツ記者はソウルからこう伝えている。

不満をかきまない市民もいる。米第八軍基地のそばでアメリカ人が意を探ったある運転手はいきなり怒鳴り出した。ふつうは私的会話でなければ韓国人が触れたがらないテーマについてである。

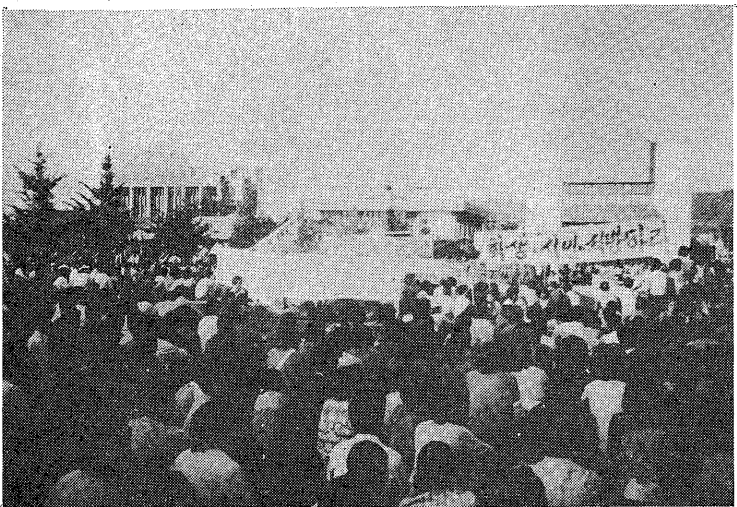
「アメリカ政府、崔圭夏大統領、ガッデムノ(くたばれ)」と彼は叫んだ。全斗煥を知っているかと聞かれると、運転手は片手をハンドルから離して、ライフルを撃つまねをし、「ダンダンダン」と言った。この運転手は三八歳で、光州のことはよく知らぬが、大勢死んだことは確かだと言った。

外国の商社員や銀行家は、一〇月二六日の朴射殺の時よりビクビクしているようだ。こうした外国人の多くは、将来の見通しについてもっと心配している。「この二、三日銀行家は一〇月二七日より一層慎重になった」とある外人の銀行マンが言った。「一〇月二七日には人間がひとり(朴正熙を指す)いなくなっただけだ。一二月一三日(一二月二日の全斗煥による「粛軍」クーデターの翌日)には、政府はまだ手つかずに存在した。だが今は、国会もなければ政治家もいない……」

ディナーや商談の席上で交される会話はもっ

学生たちはアメリカに仲介を要求するがカーターはこれを拒否。アメリカの人權外交の本質が明らかとなる。

二六日、光州の学生たちは報道陣に次のような意図を表明した。



民衆は連日道庁前につめかけた

アメリカは韓国政府に働きかけるべきだ……アメリカが韓国の強固な同盟国として仲介に乗り出し、事態の収拾に寄与して欲しい(二六日光州発 AFP)。

しかしその光州民衆の願いは完全に裏切られる。アメリカはこれを黙殺したのである。

米國務省報道官は、光州の反政府勢力が米國に事態の調停を望んだという報道について「そうした報道あるいは情報は知っていたが、実際に調停の依頼



この死をけっして無駄にはしない

とビクビクしたものだ。彼らの話題は、もしこの国で秩序が崩壊したらどうやって脱出するかというものだ。保険のため数千ドルを米國に送った者もいるし、早めに休暇をとると言う者もいる。

「これだけ留米人が多いと米軍もわれわれを保護しなきゃいけないだろう。仁川からゴムボートで逃げる方がいいと思うよ」とある西側の銀行家が言った……(AWSJ 5・27)。

収拾対策委と戒厳軍の交渉内容

以下に掲げたのは五月二四日までの段階の交渉のまとめである(二六日光州発 朝日・藤岡特派員)。

戒厳当局がいかにか口先を弄し、この時に市民との間に交した約束を無惨に破っていったか、一目瞭然である。

対策委員会側の要求 戒厳軍の市街進入を一切禁止せよ。

戒厳当局の回答 市民側が先に発砲しない限り進入または事前発砲はしない。市内には現在一人の戒厳軍もない。

対策委 五月一八日の空挺部隊の行き過ぎた鎮圧行為を認めよ。

戒厳当局 現場の説明を聞いたところ、過剰鎮圧であったことを認める。

対策委 連行者を釈放せよ。

戒厳当局 連行者九二七人のうち七九人を除いて全員釈放した。今日(二四日)さらに対策委員会の要求によって三四人を釈放した。

は韓国政府からも反政府側からもなされなかった」と語った(二七日ワシントン発 毎日・古森特派員)。

ワシントンに滞在しているUS・アジア・ニュースの文明子記者の表現によれば「(アメリカ政府は)私たちが正式な要請を受けていない、と逃げている」(二八日ワシントン発)といった「正式要請」とは何であるか。戒厳軍に包囲されている光州の民衆にとって、あれ以上の「要請」が他にあったらどうか。

ワシントンの國務省は、外国政府が光州のような事態に有効に介入することはできないと述べた(二六日ワシントン発 読売・飯沼特派員)。

アメリカは極めて「有効」な形で、韓国民衆と敵対する側に立った。

この二六日、尹潽善元大統領、宗教家の咸錫憲氏、金大中氏夫人の李姪錫女史ら「民主主義と民族統一のための国民連合」は「時局に関する声明」を発表して、以下のことを崔圭夏大統領に要求した。

- 一、全斗煥將軍のすべての公職からの即時退陣
- 二、金大中氏ら民主勢力の人々の即時釈放
- 三、戒厳令の即時解除
- 四、今後の民主化日程の公表
- 五、軍と警察の中立厳守

ここで注目されるべきは、この声明がアメリカを「伝統的な友邦」と呼びながらも以下のように激しくアメリカを批判していることである。

われわれは最近、一連の米国の措置に対し、強い失望と怒りを禁じ得ない。米国はなぜ、全斗煥を助け、罪のない人々を殺傷するのか。米国はイランで

の政策失敗を韓国でまた繰り返すのか。米国は真の市民の叫び、学生らの絶叫に耳を傾るべきではないか。

アメリカはすでに五月二日に軍の移動に同意した時点で、その立場を明確にしていた。いくらカーターが「人権」を叫ぼうと、全斗煥の軍制に遺憾の意を表明しようとして、その本意はそこにはなかった。

カーター大統領は光州制圧後の六月一日、ケーブル・ニューズ・ネットワークとの会見で、あまりにもはっきりと、その本音を語っている。

(カーター大統領は)最近の韓国情勢について「共產主義の侵略、転覆活動に対する安全保障は、人権尊重および民主主義の確立のための前提である」と語った。

同大統領は、韓国政府が反政府運動鎮圧に強硬措置をとったことから「民主化が後退を余儀なくされたことは疑いない」としながらも、「同盟国や通商相手国を、われわれの基準からみて人権を十分に尊重していないというだけで関係を絶ち、ソ連の影響下に追いやることはできない」と述べた(六月一日ワシントン発 ロイター)。

人権も民主主義も、反共と安保が前提——これこそがカーターの本意である。これは全斗煥の路線と完全に一致する。

一方、このようなアメリカの態度に、これまで「米中同盟」の下で慎重な態度をとっていた中国も、二六日付の『人民日報』で次のようにアメリカを批判した。

なった。

午前九時すぎから、昨日改組されたばかりの「全道民收拾対策委員会」の最初で最後の戒厳軍との交渉が始まった。前夜からの協議では次のような方針が定められていた。

(收拾対策委は)二五日夜から徹夜で会議を開き一、崔圭夏大統領が今回の事態について誤りを認



戒厳軍の突入に備える

め公開謝罪せよ。

- 一、被害補償を行ない報復処分をするな。
 - 一、光州事件を「義挙」と規定せよ。
- 以上の三つの要求が受け入れられれば直ちに武装を解除するとの方針をまとめ、この会談(交渉)に臨んだ(二六日長城II光州近郊発 共同)。

そして洪南淳弁護士、金成鍾神父、慎錫淳朝鮮大学教授、金昌吉全南大学生代表一人が光州市郊外の戒厳地区司令部(共同電による。読売・島元特派員によれば交渉場所は道庁)を訪れ、韓俊烈司令官(少将)と交渉に入った。

結局、この交渉は平行線をたどり、「戒厳軍は当分の間、市内に進駐しないことを約束する、との合意がまとまった(二六日ソウル発 読売・島元特派員)だけであつた。

しかしその約束すら、まったくの嘘であつた。この夜から、すでに戒厳軍は鎮圧作戦を開始していたのである。

五月二九日付の『ワシントン・ポスト』紙にウィリアム・チャップマン記者は次のように書いている。

市民委員会によって先週末に配布されたリーフレットは軍司令官が次のような確約を与えたと述べていた。「市民が先に発砲しなければ戒厳軍は発砲しないし、市内に進入もしない。市内には戒厳軍はいない」とこの約束の問題についてはずっと混乱があつたが、今日の段階で市民たちは、この一件は言葉だけの問題で、できるだけ早く忘れた方がいいと感じている。

対策委 死亡者、負傷者の補償並びに治療は。戒厳当局 補償はもちろんする。対策を立てており、負傷者に対しては徹底した治療を行なう。

対策委 放送を再開し、事実の報道をせよ。戒厳当局 地域の放送が再開され次第、事実報道をさせるよう努める。

対策委 「暴徒」などの刺激的な用語を使用するな。戒厳当局 一般市民を暴徒といっているのではなく、この事態を悪用する者を指している。上司にやわらかい用語を使用するよう、すでに陳情した。

対策委 市の外へ出る通路をあげる。戒厳当局 民間人は出入りできる。手をあげて信号を送れば、保護するが、自動車とか武器の携行者は接近できない。

対策委 事態收拾後の処罰をするな。戒厳当局 事態が收拾すれば絶対に報復はしない。軍指揮官の名譽をかけて約束する。

米国は南朝鮮当局に「平和的な解決方法を要求」する一方で、彼らが(米韓)連合司令部に所属する軍隊を動員、人々を支配し、治安を維持する任務に当たらせるのを許している。米国は南朝鮮当局をそのかし、人民を鎮圧している責任から逃れられない(二六日北京発 共同)。

朝から收拾対策委は戒厳軍との交渉にはいった。結局これが最後の交渉と

五月二七日

未明より、空挺部隊を中心とする戒厳軍の全面攻撃が行なわれる。道庁を死守する市民側武装部隊は壮絶な抵抗を行なった。だが三時間後、光州は戒厳軍の手に陥る。

「それはまるで敵国の都市に対する攻撃だった」と戒厳軍の突入直後、光州市内に入った共同通信の鈴木特派員は書き出している。

真っ先に突入した部隊は一九日の乱暴なデモ鎮圧で光州市民の怒りを買った空挺部隊だったという。光州市は再三の流血の結果、戒厳軍のものとなった(二七日長城II光州近郊発 共同)。

午前二時、「午前四時までに投降せよ」と戒厳軍は突然、電話で通告してきた。それが最初の公式警告だった。

しかし一万七〇〇〇名に及ぶ戒厳軍の作戦は、すでにその前から始まっていた。朝日・藤高特派員の二七日ソウル発の記事によれば作戦は次のように前夜から開始されている。

前夜午後十一時(注1)。私服の空挺部隊が二七日午前一時(注2)にかけて一人、二人と市内に潜入し、バリケードを固めていた見張りの学生たちを逮捕。午前二時(注3)。作戦開始。戦車と装甲車を先頭に軍が一斉に市内に進入。

午前二時一五分(注4)。民衆と戒厳軍との間で激しい銃撃戦開始。

注(サンケイ新聞の星野特派員によればその時間



正規部隊は陸路から光州中心部に進撃した。戒厳軍の第一の攻撃目標は武装学生の「司令本部」となった全羅南道庁。降下部隊を乗せた大型ヘリコプターは攻撃型ヘリコプターの支援を受けて同日明け方、道庁近くに着陸、降下部隊が一斉にヘリコプターから飛び出した。

光州中心部に通じる検門所で待機していた正規部隊、戦車部隊もこれに呼応して進撃を開始(二七日光州発 ロイター)。

学生たちは決死的反撃を行なった。

(四時までに降伏すべしとの警告を受けて)学生たちは道庁前広場に面する別の建物から外に走り出て、「やってくるぞ」と叫びながら、道庁ビルに駆け込んだ。そして学生たちは、道庁にかけつけてくる仲間にライフル銃を配り始めた。この動きとは逆に三〇〇四〇人の高校生が道庁を離れ、家に送り返された。

大学生たちが高校生に「君たちは、ここにどまっておくには若すぎる」と説得したためである(二七日光州発 A.P.)。

闘いは道庁だけで行なわれたわけではない。特に公園における銃撃戦は激しかった。サンケイ新聞の星野特派員は、この間の戦闘をまとめている。

三時半ごろ、フラッシュのサインで装甲車を先頭に市内に入り、鎮圧作戦を行なった。

道庁方面で午前三時五十分から四時一分にかけて二十数発の銃声が聞こえ、続いて四時半には公園、ホテル、全日ビルなどでも交戦があった。

司令部に突入した。最初彼らは道庁を催涙ガスで包んだ。次に道庁の内部の二〇〇人の活動家たちに奇襲をかけた。

はじけるような銃声と、ズシン、ズシンという砲弾の爆発音が聞こえ、その後、軍隊は反乱の中心部を占拠した。

攻撃が始まったとき、若い女性の活動家がハンドマイクをつかみ、暗闇に向かって繰り返し、繰り返し呼びかけていた。

「光州のすべての学生・市民の皆さん。起ち上がりましょう。起ち上ってわれわれの生命と財産を守りましょう」 M16の銃声ははじけ、彼女の声は沈黙した。

一〇日間の光州反乱の最後であった(FEER 5・30)。

軍が庁舎を急襲した際、何人かの戦闘分子が焼身自殺したとも伝えられるが確認されていない(二七日光州発 UPI)という。

戒厳司令部は未回収の銃を発見するためと称して掃討作戦を続けていった。

一軒、一軒、民衆を捜索し、そして一部の学生が銃を持って逃げこんだと言われる郊外の無等山の山狩りを行っていた。

光州民衆の心は戒厳軍に対する怒りに震えていた。二七日朝、光州の街を行く男性はAFPのマリー・ローズ記者に対し、「光州市民はいま、心の中で激し

四時五〇分には道庁付近に八台の戦車が進駐して鎮圧。強硬派の武器・火薬庫を奪取した。五時、交戦中の公園で戒厳軍二人が負傷、支援部隊が投入され、市内は戒厳軍によって奪い返された(二七日ソウル発)。

後に戒厳軍の金大佐が認めたように「厳しい闘いだった」。闘志はもろろん民衆の方が勝っていた。しかし、その兵器の質と量において、そしてそれを扱う熟練度においては戒厳軍の方が勝っていた。

テニスボールと空挺部隊

五月二七日朝、光州民衆の敵意のなかに、空挺部隊はふたたび侵入してきた。

ストークス記者はその光景を伝える。

六人ほどの空挺隊員がM16ライフルの銃口をつき出しながら、彼らの勝利の朝、侵入してきた。そのとき子供が、恐らく子供であろう、屋根の上で遊んでいて、黄色いテニスボールをひとつ誤ってひきしから落とした。ボールは道路に落ち、はずんで、店のトタンがこいに当ってガンといううるな音を立てた。

兵士たちはライフルを腰だめにして、きつとぶりむぎ、銃をあげて撃とうとした。一人の兵士が、テニスボールをぱっとけとばした。あたかもそれが、不発の手榴弾であるかのように。兵士たちはボールをじっと見つめ、ボールを誰が投げたか、さがした。だが誰もいなかった(NYT 5・28)。

軍発表の逮捕者の圧倒的多数は労働者だった

光州事態のなかで逮捕された人びとの数は戒厳司令部発表によれば一七四〇名(五月二七日以後の検挙者五二五名を含む)、うち「開放された者一〇一〇名」である(例によってこの開放者は確認されていない)。したがって、現在とりしらべ中の者は七三〇名だが、戒厳司令部はこの七三〇名を職業別、年齢層別に分類している。それによれば、高校生および大学生 一五三名

(二四名は予備校生)

無職	一二六名
工具	八三名
労働者	七九名
運転手	五五名
農業	四七名
商業	四七名
店員	四四名
会社員	三七名
その他	五九名

となつている。無職(失業労働者)、工具、労働者、運転手、店員を、労働者とかぞえれば、逮捕者の七三〇名中、三八七名(五三%)が労働者である。光州決起の大衆的・階級的性格はここにも示されている。

年齢別構成は、二〇歳以下三二五名(四三%)、二〇代三一〇名(四三%)、三〇代七七七名(二一%)、四〇代以上二八名(四%)。

戦闘は午前四時に始まったが、戒厳軍が道庁前広場に突入してからの一時間四〇分間、戦闘は激烈をきわめた。その後は散発的戦闘が続き、午前七時、三時間にわたる戦闘が終わって戒厳軍は道庁ビルを奪回した。

……戦闘中、戦車は少なくとも三回にわたって主砲で、反政府分子がバリケードを築いた道庁ビルを砲撃し、兵士は重機関銃で攻撃した。これに対し反政府分子は、二、三丁の軽機関銃のほかは主にカービン銃で武装していた(二七日光州発 A.P.)。

シム・ジェ・フーン記者は自由光州の最後の姿を目撃していた。

五月二七日午前三時三〇分、戒厳軍は遂に市の中

五 おわりに—光州以後の闘いへ

五月二七日—六月上旬

道庁が完全に制圧された後、戒厳軍兵士は捕虜となつた学生や市民たち(女性や子供を含む)に乱暴の限りをつくしていた。

降伏した学生たちは銃の台尻で殴りつけられていた。そして後ろ手にしばられ、ひざまずかされて取り調べを受けた。逆エビの形でしばられ、横たえられた若者の顔を兵士が殴りつけていた。そうして、ロープで後ろ手にしばられ連行されていた。

この制圧後の道庁舎では、「道庁舎の廊下や二階の『状況室』には無数の弾こんや血の跡が残っていた。

全斗煥の汚職一掃の名による政敵狩り

六月にはいって全斗煥政権は綱紀粛清・汚職一掃のキャンペーンにのり出した。このキャンペーンは「国家保衛非常対策委員会」の常任委員会によって推進されているが、その議長は全斗煥自身である。

『タイムズ』紙のジャクリース・ディット記者によれば、このキャンペーンで摘発される罪状は、重い方から、

- 一、政府情報の漏洩
- 二、職務への真剣さの不足
- 三、流言蜚語をひろめること
- 四、収賄

という順序である。

これが汚職一掃キャンペーンでなく、全斗煥の政敵狩りであることはあきらかだ。そのうえ、このキャンペーンは、政府役人だけでなく、「有名人」にも適用となるとしている。だが財界人は適用除外になる。理由は財界を肅清すれば、「国民経済に害を与えるから」だとされている。

憎悪を抱いている」と語った。またカトリックの大司教、ビクトリナス・ユン氏は「情勢はいぜん一触即発で、市民の士気はくじけていない」と答えた(二十九日光州発 AFP)。

光州民衆の決意は、政府が復興資金を支出する計画を発表した時、はつきりとあらわれた。誇り高い光州民衆はこの政府の手による復興援助を「全くのスジ違いだ。私たちが政府に求めているのは援助ではなく、謝罪だ」と敢然とはねのけたのである(二十九日光州発 AFP)。

の見方を示した。金大中氏への反共法、国家保安法(最高刑はともに死刑)の適用が懸念されている。

この発表で、光州事態の死者を一七〇人(うち民間人一四四人、後に四人追加)、負傷者三八〇人(うち民間人一七二人)という数字を発表している。これまでの経過からみて、これがために過少の数字であることはあきらかだろう。

しかもその民間人の死者のうち、交通事故三二名、銃の暴発一五名、内ゲバや怒みによる殺人二九名、つまり半数以上が勝手に死んだというに至っては何をか言わんや、である。

韓国の民主勢力は光州民衆の死者は一〇〇〇人をはるかに越え、重傷者の数は一万人に及ぶと推測している。

六月五日、戒厳司令部は「一連の学生デモと光州の暴動事件を指導、扇動した」として、韓国記者協会会長の金泰弘合同通信記者ら二人(うち学生は一六人)を賞金一〇〇万ウォンをつけて公開の指名手配した。

六月九日、光州の事態に関し、反政府的な言動(例えば学生デモが人民解放のための行動であるとか、光州の闘いを人民蜂起であると語ったという)をしたという容疑で、文化放送の報道副局長ら二人、京郷新聞の外信部長ら五人、そして東亜日報の社会部記者の計八人のマスコミ関係者を拘束している。すでに六月二日には、光州事態の報道をとがめられ、共同通信の支局の閉鎖が命ぜられていた。

そして六月一七日、「一連の学生デモ、過激な労働運動、光州暴動事件の指導者、扇動者、不正蓄財の容疑者」として三三〇人を公開手配している。「光州事態の扇動者」らは殺人、内乱予備罪などの容疑となっているという。

全斗煥が全権力を掌握する。

光州制圧の翌日である二八日、全斗煥はさっそく前田特使と会談し、「政治的発展」を予定どおり進めるが、そのためには「安定の定着化が必要」と、治安維持を優先していく考えを明らかにした。

前田特使は六月五日に帰国するが早速、日本の外務省は九日から一二日にかけて木内アジア局長を派遣して、今後の対策を協議させている。

五月二八日、韓国政府は全羅南道の新知事に予備役少将でもある金宗鎬・錦湖産業社長を任命している。そして五月三十一日、大統領の諮問補佐機関という名目で最高機関の「国家保衛非常対策委員会」を設置し、この常任委員会委員長の座に全斗煥が着いた。

全斗煥はこれで名実ともに最高権力の座に着いた。この国家保衛委の二五人(兼任があり実際は二四人)のメンバーのうち、半分以上の一人四人が現役軍人で構成されている。

六月一日からKCIAは、釜山、大邱、大田、光州、全州、仁川、春川、清州、済州の主要九都市に、スパイの通報を呼びかけたりする「対共相談所」を設置した。

そして圧力をかわすためであろう。

翌六月二日、全斗煥はKCIA部長代理を辞任した。すでに全斗煥はKCIAの最高幹部四〇人中、三人を解任し、中級幹部一〇〇人を移動させ、KCIA生え抜き若手でもうめあわせ、KCIAを完全にコントロールできるようにし終えていたのである。

一方、民主勢力への弾圧も続いた。

五月三〇日、戒厳司令部は「光州騒乱事件」の全容なるものを発表し、金大中氏が背後で操縦していたと

非暴力行動から前へ進む 潜伏した学生指導者のインタビュー

以下はヘンリー・スコット・ストークス記者が六日七日ソウルで、地下に潜伏した学生活動家におこなったインタビューである。

逮捕学生は二六〇〇名

その学生は二八歳だと名のつたが、耳や眼の上にかぶさった黒い髪や、白い首すじや、はにかみがちの表情や若々しい肌の色からは一六歳ぐらいにしか見えなかった。彼は背広を着ていたが、それは「サラリーマンらしくみえる」ためだと言った。

彼は、先月の軍のクーデター後、身をかくした数千の学生運動指導者―その多くはキリスト者―の一人である。五月のソウルのデモに参加して以来、警察には名前が割れていると思わなければならぬ、だから記者に会うため表へ出て、身分証明書の手紙をもとめられる危険をおかすのは気がすまなかった、と彼は言った。

金と名乗るこの学生は、ソウルで六〇〇人、全国で二〇〇〇人の学生が、一七日の全斗煥による戒厳令拡大以来逮捕されたと見聞している。

軍の全面攻撃以前には、学生たちはきわめてよく組織されていた。ソウル国立大学の指導者は、五時間五万人の学生を街頭デモに動員できると語っていたが、これは大げさではなかった。政府発表によれば五月一日、全国で三五万の学生がデモに参加したのである。

地下生活の現状

現在、学生の指導者たちは散らされ、ひどい居住条件のもとで暮らし、資金の不足に悩んでいる。両親からは切りはなされてしまった。金君は、学生指導者は三人組をつくって会合しており、今週、軍に反対するデモを組織しようとしているとのべた。

だがデモをやれるかどうかはわからない。大学のキャンパスは軍に占領されているので安全圏でなくなった。この春の学園自治闘争の状況はもはや遠い過去の出来事になった。

光州闘争の教訓

金君の言葉から判断すると五月の光州蜂起は、軍に反対する闘いのこれからの戦略をたてていくうえで、学生たちの討論の出発点であるようだ。「まったく予想しない出来事でした」と金君は言う。むろん、戒厳令に反対する平和デモへの軍隊の対応のことをさしているのだ。「だがそれは、どんな犠牲を払っても権力を握ろうという軍の決意を示していました。われわれはそのことをずっと予想していましたが、われわれの予想よりずっと早かったです。連中は連中の真の姿をさらしました」

光州で殺されたのは大部分が民間人である。その多くは兵士に射殺されるか殴り殺された。兵士の残虐な行為についてはあまりにも多くの目撃証人がいて、疑いの余地はありえない。

このことから学生たちは、彼らの伝統的な非暴力行動の戦術が、もはや役に立たないという教訓を引き出した。非暴力でないとすればどうするかという質問に答えて、金君は答えた―「武装蜂起しかない」と(NYT 6・10)。

同胞よ、起ち上がろう

しかし、民主化を求める韓国民衆の心を、いつまでも戦車を押さえこむことはけっしてできないだろう。五月三〇日、ソウルの西江大商学部四年の金宜基君(二一歳)は一〇〇枚ほどのピラをまいた後、キリスト教会館の屋上から飛びおり自殺をした。

その葬儀が六月二日、ソウル大付属病院霊安室で行なわれた。この葬儀には、機動隊の厳重な警戒の中、咸錫憲氏、尹潽善元大統領ら民主化闘争のリーダーたち二〇〇人が参列した。そして金宜基君のまいたピラが堂々と朗読された。

そのピラ(資料参照)はこう呼びかける。

我われは今、重大な運命の岐路に立っている。恐怖と不安でふるえながら、犬のように、奴隷のように生きるべきか、それとも澄みきった青空を見上げ自由市民としてきれいな空気を思いきり吸い、歓喜と勝利の歌を歌いながら生きるべきか。

また再び、恥辱の歴史を続けるべきか、それとも我われの子孫に誇るべく、堂々とした祖先になるべきかの。

同胞よ、起ち上がろう。最後の一人まで起ち上がろう。我われの力を合わせよ。闘いは歴史の正しい方向に向かっていく。我々は勝つ。必ず勝つ。同胞よ、起ち上がって維新残党の最後の息の根に決定的鉄槌を加えよ。

光州民衆の一〇日間の闘いは韓国民衆全体の手に受け継がれた。

木浦での 民衆闘争

わしらは税金を払う、
すると奴らは
わしらを突き殺す。



光州から七〇キロの港町木浦—金大中の出身地—でも、光州との呼応、連携のもと、二日から民衆のデモがおこり、地域権力は崩壊した。しかし戒厳軍が光州包囲・攻撃に手いっぱいだったせいか、事態の発展は光州とはかなりちがう経過をたどったようである。光州決起とともに、全羅南道二六市部のうち一六市部で民衆が起ち上がり、市を制圧したという報告が随所にあるが、木浦をのぞいてその詳細はわからない。木浦の場合も不明な点が多いが、いくつかの現地報告がある。とくに、シム・ジェ・フーン記者と、AWS J紙のノーマン・ソープ記者のものがくわしい。デモは五月二〇日から始まったようである。シム記者はFEEER誌やNYT紙にこう書いてい

る。
光州の南西八〇キロにある金大中の故郷木浦でも反乱が起きた。おびただしい数の群衆が警察署を襲い、ライフルと車輻を奪取した。五月二日の夜、群衆はバスやタクシーにのって市内を行進し、税務署を襲い、KCIAの地方事務所を焼き打ちした。木浦唯一の放送局も放送が中止された(FEEER 5・30)。

「光州と同じく武装した市民に制圧されている港町木浦では、警官たちは制服を脱ぎ捨て、私服に着替えて逃げ出し、秩序維持の任務に着くのを拒否した。反乱者たちは市内のKCIA事務所に放火、ビルは焼け落ちた。

何百人もの警官が脱走したという。光州以外では、木浦は政府側武装部隊の規律が崩壊した初めて

の都市である。光州では昨日、警察署はめっちゃめっちゃになり、制服警官は一人も見えなかった(NYT 5・23)

だがこの頃までに、軍は光州を孤立させ、民衆の連絡を断絶するため、いたるところに検問所をもうけて交通を寸断していた。前日、光州に入ることを試みて失敗したシム記者は全羅道の各都市をまわろうと試みたあげく順天からこう報告している。

この市(順天)から車で光州地区をまわってみる。記者は多くの軍のバリエードや警察の検問で妨げられた。記者は軍の戦術の狙いは全羅道を多くの部分に分割し、それによって反乱者が主要都市間で合流したり、韓国他の部分に闘いをひろげたりするのを阻止することにあるという感じをうけた(同前)。

「木浦発」 韓国東南部の人口二万の港町木浦では多数の学生がデモをした。「全斗煥を打倒せよ」と学生たちは叫んでいた。店の前をデモ隊が通るとき、主人がとび出してきて、秩序整然としたデモ隊を指さして言った。「俺の息子も参加しているんだ。店をほっといてよけりゃ俺もデモにでるんだが」

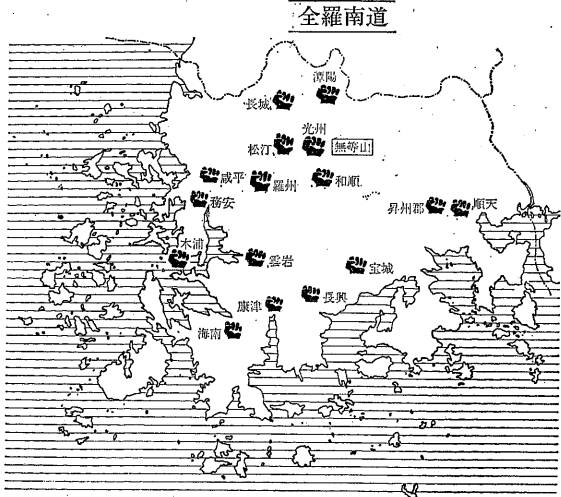
町はずれで韓国人のセールスマンが、外国人である私を赤いバイクの後に乗せてくれた。細い路地を抜けてゆきながら彼は肩ごしにふりかえり、大声で言った。「戒厳令のせいで心が重いんだ。戒厳令

てのは独裁だ。わかるかね」

鉄道の駅前の食べ物屋では、四人のホワイトカラー風のお客が坐っていて、外国人とみると話しかけてきた。「俺たちは朴正熙の戒厳令と二〇年もつきあってあきあきしてるんだ。今度の戒厳令はまったく必要がない。政府は民衆の心を誑かすべきだったんだ」

こうしたふうの民衆の意見は、今回のデモを共産主義者やシンパによって組織された暴徒の暴行としてえがきだす公式発表がまったく根拠のないものであることを示している。

抗議運動が木浦とそのほかの全羅南道の町にひろ



がったことは、民衆の感情がどれほど深いかを示している。そしてこの広がり方をみると民衆の怒りが容易におさまるものでなく、ますます広がっていくだろう。それは根本的な政治変革がなされぬ限り、韓国の安定をあやうくするかもしれない。「政府が変革への意志を示さぬかぎり、こうした事件は何度でもおこるだろう」と官界、民間双方に通じているソウルのある人物は言った。

ここ木浦では事態は変化していた。週末にはほとんどお祭りのような雰囲気支配していた。デモ隊は反政府の歌をうたって行進し、青シヤンの交通警官は見物人を整理し、手を振って自動車を通していった。暴力事件はほとんどなかった。

土曜日(五月二四日)のデモでは警察は自己抑制を示し、乱闘服を着なかった。デモ隊の方は、警察が秩序維持のため出動するなら歓迎すると言っている。「われわれは平和的に、非暴力的にデモをしたのだ」とある住民は言った。

この双方からの歩みよりで木浦には正常性の雰囲気にとりもどされた。二日前には学生は銃を持ち、空に向かって発砲しながら、交番や二カ所の鉄道駅市役所、税務署などを襲撃していたのである。

だが銃の大半は回収された。土曜日には目につく銃は、港を警備する警官のカービン銃だけである。二日間閉じられていた店のシャッターも土曜日には上げられた。

木浦の平穩さは七五キロ北の光州の状況と一つの対照をなしている。

光州と木浦は、他の十二ほどの全羅道の都市とともに、軍によって完全に隔離されている。列車もバ

スも船も出入りできない。木浦駅は学生によって管理されていて、駅前には反政府的スローガンを書いた立て看板が立てられている。

木浦の抗議運動は光州に二日遅れて五月二〇日に始った。運動を組織したのは一五名の地元指導者から成る委員会である。委員会には地元大学の学長、アムネスティ・インターナショナルの地元代表、新民主党支部長、組合代表、学生組織代表などが含まれていた。

市民委員会は市のかんりの部分を動員したようである。ある警官は見物人を別とすれば一〇〇〇名ぐらいがデモをやったと言ったが、これはどう見ても過少評価である。五月二二日には、学生たちが駅前での集会を終えるのを数百人の市民がしんぼう強く待っていて、それから一緒にデモに移った。五月二三日夜は数千名がたいまつデモをやった。

子供がデモに出ているという店の主人になぜこんなに多くの市民が学生に共感しているのかときくと、こう答えた。「政府はウソをつくことしかやらない」そして銃剣で突く身振りをして言った。「わしらは税金を払う、奴らは人民を突き殺す」

木浦民衆は二七日の光州制圧後も闘いをつづけた。この二十七日夜、約三万人が手にたいまつを持ち、「金大中氏を釈放せよ」「戒厳令を解除せよ」と叫んで約二時間のデモをした。

翌二八日も二万人、そして二九日も、木浦の闘いは続いていた。AFP電によれば、六月二日にはデモを防止する目的で、木浦市にある一三の高校全部が閉鎖された(六月二日ソウル発)という。

光州および周辺地域での市民の闘争をとおして市民たちが払ねばならなかった犠牲はどのくらいになるだろうか。正確な死者、負傷者、いままも続く逮捕者の数は知るすべもない。しかし、いくつかのデータをもとに死者の数を推定することができる。

死者の数をめぐって

まず戒厳司令部は光州など一六の市郡の総死者は一七四名と発表しているが、そのうち民間人は一四八名、そのほか軍人三二名、警察四名となっている。しかし戒厳司令部の発表(光州事態経緯・真相処理)は五月二〇日から二七日の七日間のみに限定され、一八、一九日の両日間の軍の市民に対する無差別虐殺は数えていない。

しかし、光州市民学生たちの推定は、光州市内だけの死者のことであって、市の郊外や他の市の死者は確認するすべもない。また、一八日から二〇日までの死者の多くは軍が運び去り、市民の確認がおよばないものが多数ある。

七〇〇名の学生がソウルから光州へ向かったが、目的地へ着いたのはうち三〇〇名だけ。大半の学生は途中、軍によって殺されたのではないかと推定している。



資料・韓国民衆の声

1 自由光州の中から

韓国からの声 (1)

以下の五通の「韓国からの声」と海外のみならず「は光州とソウルから直接送られてきたもので、韓国問題キリスト者緊急会議によって発表

まさかと思っていたことを軍隊がやってしまいました。わたしたちの同志たちは、また多く逮捕され、どこにいてもわがかりません。なぜ一部のわたしたちがまだ残されているのか、その理由もわかりません。

された。戒厳政府の厳しい警戒の網の目をくぐりぬけて届けられたこれらの手紙は、戒厳軍の残虐行為を明らかにするとともに、光州民衆の不屈の決意を表明している。

韓国からの声 (2)

のように発言し、どのような行動をとればいいのか見当がつきません。わが国の政府の発表、新聞の報道は事実を極端にまげています。学生たちが暴力行為に走ったという事実をまったくあきらめません。火炎びんは警察が投げたものですし、警官を負傷させたというパスを動かしたのも、学生ではなく、挑発するために雇われたと思われる人びとです。

民衆が全羅南道のほとんど全域を支配下におきました。光州と木浦以外に一六の郡を支配しています。彼らはこの地域のいくつかの警察署を占拠し、残忍な戒厳軍に対抗するために武装しました。戒厳軍は非武装の学生や市民たちを銃撃し、殺りくしています。あるところでは警察隊までもわれわれの戦いに参加しています。

韓国からの声 (3)

軍隊は光州を包囲し、政府との交渉が決裂した場合は町全体に侵入しようとして準備しています。

わたしたちのもっとも重要な要求は学生は無条件釈放、金大中氏釈放、金氏が光州にくること（それは金氏が自由であることを証明するためです）、そして全斗煥の解任です。

軍隊はわれわれ民衆を孤立させるために、光州にたいする通信施設をすべて切断してしまいました。今晚（二二日）から放送されたニュースはすべて事実を歪曲したものです。

たとえば、暴動を始めたのは学生でなく、軍隊です。また、外から煽動するために光州にきたという人はだれもいません。わたしたちはこれから何をすべきかということをよく知っています。運動は北上しています。いまや潭陽郡に達しました。やがて他の地域の民衆もこのたにかいに参加するよう望んでいます。

一九八〇年五月二二日

全羅南道より

チェハンヤン（市議会顧問、抗日運動に従事した経歴の持主）、李ヤンセン（Y M C A 理事）、張チヌン、尹泰熙（カトリック司教）。

学生の指導者二人は、戒厳司令部との協定によって、あらゆる政治的な要求が満たされるようにならばいいが、副知事の意見は政治的なとりきめを延期し、市と住民の生存を保障させようということであった。しかし、日曜日（五月二五日）に、学生たちは、副知事を委員会から退かせ、代わりに弁護士を委員長とした。その日、学生たち（学生以外のものも含む）のかなり大きなグループが武器を携えて山に逃れた。

五月二七日すでに知られるように、光州は軍の圧迫下に落ちた。軍が認めた数以上に多くの人々が殺された。光州の公園での学生、市民と軍隊との対決は、四分にわたる激戦であった。だれも何人が殺されたかわからない。軍事専門家は、これを数百人だろうとみている。

五月二四日すでにいくつかのビルの中で数人の死亡者を数えている。そのうち三〇人位は、確認不明、町全体にわたるビルの中で多くの死亡者がみられた。

病院では、毎日死者をだしている。五月二六日月曜、二六一人の学生の死者が数えられた。しかし、正確な数は、これよりもっと高いものと思われる。二つの軍のトラックに死体を満載して、銃剣のもとに走るのを目撃している。これ

ています。編集長自身も抵抗の姿勢をとっています。

光州では、公式の委員会が九二人の死者を確認しました。しかし本当は二〇〇人以上が殺されたといわれています。先週の光州における殺りくの目撃者たちは、軍隊が麻薬に酔ったかのようにひどい残忍性を発揮したということ。重傷を負って道路に横たわっている人たちは足げにされ、ついには銃剣で殺されました。五人の女子高生が兵隊につきまわり、衣服をはがされ、銃剣でつき殺されました。いっしょにいた同級生たちは、他言してはいけないといわれ、もし従わなければ同じような目にあうぞ、とおどされました。

一九八〇年五月二五日 ソウルより

韓国からの声 (4)

五月一六日、内閣は戒厳令を全土に拡大することを決めた。これは、保安司令官であり、中央情報部長代理をかねる全斗煥が会議場を部下たちによってとり囲

ませた中で、五分間で決めたものである。彼のことは、「我々は、戒厳令を全土に布告する、よいな」という一言であった。

光州をおそった空挺部隊は、タクシー運転手たちが、怒って車を軍隊に体当たりさせたために退却せざるを得なかった。

ある運転手たちは、学生を運んだというところで車を止められ、まるでなぶり殺すかのように、銃剣で突き刺された。「我々は全羅道民をみな殺しにする」というのが、空挺部隊の合い言葉のひとつであった。だから、子どもたちまで殺されたのである。

五月二四日、ソウルでの記者会見で全斗煥將軍は、韓国の記者たちにこう語った。「私は全羅南道のようなところは二日もあれば制圧できたろう。だが、それに同意しない人間もあるだろうから、別の解決を見出さねばならなかった」と。

記者たちに対して彼は記者たち全員の名前もよく知っているから、もし、戒厳司令官の命令に反する報道をするものがあれば、直ちに報復するといった。

ソウルから光州に行くには、何方所も軍の検問をくぐらねばならず、外国人ですら、旅行は困難である。

光州における一五人の市民から成る委員会、次のような人々が含まれている。金チャンギル（全南大学農科大学、委員長）、金ジョンベ（朝鮮大学、副委員長）、李ジョンギ（全羅南道副知事）、

韓国からの声 (5)

訳責・本編集部

人びとが仲間のあいだでも政治を口にするのを恐れるような状況のなかで、この手紙を書いています。たとえば教授たちは人にあうのを一切きき、電話が鳴っても居留守をつかっています。一人ひとりが軍靴の重圧を感じ、あえてまっすぐ立つことができないのです。

全斗煥が先日新聞記者にこう語ったと信じている人がいます——政府機構と政治家と社会全体の浄化が終われば私は軍務に専念する、と。でも我われにはわかっています、彼が嘘をならべていると。

誰も、もはや彼を信じません。あのアメリカでさえ、つまり戒厳令下のわが民衆の抑圧に韓国軍の使用を許すことによって光州民衆の虐殺を支持したあのアメリカでさえ、全斗煥を信じるにはためらいがあるようです。そのうえ、民衆のあいだには、米政府が光州の残虐行為を支持したこと、アメリカにたいする敵意が高まっています。

全斗煥の同級生で親友である金福童の行方不明にわれわれは注目しています。彼は陸士では優秀な生徒で、去年一二月二日全斗煥がクーデターをおこしたときは師団長として全を支持していましたが、われわれの情報筋によれば、全がやりすぎたための全と金の間に不和があったようです。噂では金は殺されたと言います。

軍中枢部自身が流しているある噂によれば軍は遅かれ早かれ、全斗煥と光州虐殺の責任者を処分するつもりだといえます。民衆は軍から謝罪を期待しているのだが、軍の方は、光州市民には謝りたいが兵士の動向を恐れて謝れないのだと逃げ口上を語っています。

光州を占領した軍はダムダム弾を使ったりとわれわれの友人たちは語っています。ダムダム弾は一八六八年以来、国際法と国際協定によって使用が禁止されている武器です。このことが露見するのを恐れて、軍は五月二二日、すべての負傷者を病院から運び出しました。軍の方がよりよい治療ができるという口実です。われわれがきたところでは、光州で撃たれた人びとは、逃げるところを背後から撃たれています。

いる外国人軍事専門家によれば、二〇〇体、あるいはそれ以上でなかったかといえます。

逮捕されたわれわれの仲間がどこにいるか、まったくわかりません。何人かはまだソウルの警察署に留置されているようだが、五月一二日から二七日の間に逮捕された人びとの大部分がどこにいるのかは不明です。金鍾泌は背骨を折られたという情報もあるし、金大中は声帯をつぶされたという話もあります。全斗煥は彼をうけ入れ、支持しない人びとをことごとく殺害しようとして決意していることを知っているの、われわれはこれらの噂を信じる方に気がかたむいています。金大中がすでに殺されたという噂も数カ所の情報源から流れていますが、われわれはまだこの噂を受け入れることをためらっています。

政府はすくなくとも二五人を、ソウルのデモの指導者としてえらび出し、一人当り一〇〇万ウォンの賞金を出すことにしました。ソウル国立大学の元指導者張珪杓の場合は賞金は五〇〇万ウォンです。これらの「指導者」たちは隠れているようです。警察と軍隊は彼らを追跡中で、彼らが逃げようとするれば発砲せよと命じられています。

犠牲者を助けようとしていたり、あるいは民主化を活発に推進してきた他の学生、市民組織——キリスト者の組織や人道主義的組織をふくめて——を政府が割出そ

うと努力していることをわれわれは知っています。

戒厳司令部の許可を得ない市民の集りは、日曜礼拝をのぞいて、ことごとく禁止されています。ソウルの中心部では数人が一緒に歩いたり、立ち止まっていたりしても危険です。たぐさんの軍人の巡察隊が夜も昼も街をまわり、通行人はくつかえし身分証明書を調べられます。

ソウルの学生や市民がデモを計画したとしても、この状態で、中心部にはまったく近づけないでしょう。すべての大学と短大は今でも閉鎖されており、いつ再開されるかはまったくわかりません。

釜山では、金大中と何かの関係があったという理由で四六人の学生が逮捕されました。民主的な人びとを数千人逮捕したばかりか、戒厳司令部は三五〇人のKCIA要員を金鍾泌と関係があったとの理由で逮捕しました。逮捕された新聞記者は全国で七〇〇人にのぼります。

光州と木浦その他の都市では軍による若者狩りが続いています。軍は、高いところも低いところも、昼も夜も、街頭も家の中も、天井裏も、しらみつぶしに捜索し、地下鉄、宿屋を巡検し、あらゆる街角を見張っています。軍の巡察隊に出会った若者はすべて銃口をつきつけられ身分証明書の提示をもとめられ、家へ帰れと言われれば家に帰らなければなりません。このため政府の線からはずれたことのない人びとの間にも恐慌状態が広が

りました。大部分の人びとはこの軍事独裁から脱け出したいと思っています。だがこの瞬間、独裁から脱け出す道はないのです。完全な悲観主義がわれわれをとらえています。この悲観主義は財界にもひろがるでしょう。政府は学校に授業の再開をせまっていますが、先生は生徒の顔を正面から見ることができないし、生徒もそうなのです。

全国で多くのキリスト教派は光州の死者たちの追悼祈禱会をおこなっています。最大の会衆を持つソウル中心部の永楽教会では、牧師が公然と光州の死者のために祈り、数千の会衆は泣きました。あるメソジスト派の牧師はソウルで説教して、ガリラヤ湖の嵐について、そして光州の嵐について語りました。嵐に恐れおののくイエスの弟子たちは、「恐れるな」というイエスのひと言で心を鎮めた、そしてイエスは嵐を鎮めたと牧師は語りました。そしてドイツでヒトラーが勝ったのはキリスト者がヒトラーを恐れたからだと言いました。我われはもう朴で充分だったのです。これを聞いた人びとは、祈りと説教の間中泣いていました。光州の人びとはお金をもとめているのではなく、われわれの祈りを、全世界の友人の祈りをもとめているのです。

われわれは確信しています。人びとが外からの援助——米国からの援助も日本からの援助も——なしに立ち上がり、全斗煥と彼の強盗どもを打倒する日が来る

ことを。彼らは誰にも支持されず、戦車と武器以外に何のさきをも持っていないのです。これらの武器のうちかつには多くの手段があるでしょう。だがわれわれの多くは死ななければならぬかもしれないとせん。

一九八〇年六月一八日

海外のみなさんへ

(この文書については英語版を参照して本編集部で改訳した)

私は現在の光州市における危機的状況について、私のつたないレポートを読まれることを皆さんに切に願っています。

私は外国人の報道者が私たちの市の悲劇の重要な光景を充分に伝えていないのではないかと心配しています。あなたたち(外国人報道者)は、エルサルバドルやガンダの状況と同様に、詳細かつ生々しく報道されているでしょうか。

私は、光州の女性の市民です。……私は、戒厳司令当局によって逮捕されることな状況に直面しなくてはならなかった生存と自由のための市民抵抗をいまだかつて見たことがありません。私たちはこのような重大な瞬間にもかかわらず北韓からのスパイたちが仲間の中に浸透するのを極度に警戒しなければならぬし、またたそうしています。私たちはあまりに手不足であり孤立させられています。

全斗煥將軍は、先の朴大統領とは大きく違っています。多くの国民は朴正熙の度重なる失政にもかかわらず、彼の死にあっては涙を流しました。しかし全斗煥が打倒されるならば、ウガンダの国民がアミンから解放された時のような解放感をお私たちは味わうことができるでしょう。彼(全斗煥)は吸血鬼か、さもなければ、少なくとも異常な性格の持ち主だと思えません。もしそうでないとするならば、あのような吸血鬼集団(空挺部隊)をどうしてあやつることができのでしょうか。私たちは全斗煥のこの先の生きる道は、海外逃亡か、さもなくば弾圧政策を強化して光州市一帯の市民の大虐殺を行なう他はないであろうということを知っています。

私たちは在韓米軍の司令官がこの国における軍事行動の窮極的な命令権を持っているという理由から、米韓連合司令部が結果的に私たちの悲劇に責任があると分析していますが、理由のないことでしょうか。もし全斗煥によって不安定な平和と非秩序がこの地域に再びもたらされ

とをもちとわぬ決心でいますが、どうか私の安全を考慮して下さいようお願いいたします。

まずはじめに強調したいことは、私の家族はだれも朴政権および継承者に危害を加えられていないということです。したがって、私の言葉は客観的であり真実であることを信じて下さい。私はここに物的証拠を示すことはできませんが、もし皆さんにテレパシーという人間の心をつなげるものがあるとしたら、皆さんが私を信ぜずにはいられないと確信しています。どうかこの手紙を文字通り信じて下さい。五月一八、一九、二〇日の空挺部隊の残酷な行為はとも信じられないほどでありました。

十九日の朝、私の父……は(空挺部隊の兵士が)忠壮路の二階建の屋根から負傷した人々を投げ殺しているのを目撃しています。同じ頃……銀行の近くで私の母が、若いデモ参加者が棍棒で頭を叩きつぶされ、脳ずいが露出してしまった場面を目撃しています。しかしこれらはまだ残酷な行為の中でも比較的ましなほうです。私は、このような死臭のただよう雰囲気の中で、残酷な場面を写真に撮れる勇氣をもつ人が果しているだろうかと疑うくらいです。彼ら(空挺部隊)の行為があまりにも残酷で非人間的なゆえに、彼らの行為は長い期間かけて故意に洗脳され、二三日飢餓状態におかれ、アルコールと覚醒剤だけを飲まされるこ

とによってなされた行為としか理解できません。

私は、何人かの年輩の人たちがこのような残酷な行為は一九五〇年の韓国動乱(朝鮮戦争)のときにもなかったと発言したことが、市民感情を奮起させたと思像しています。私たちは吸血鬼集団(空挺部隊)はいまこの名で知られているが、殺した数多くの市民の死体を焼いたりしてかくしたと信じています。

現在の光州が学生と市民勢力によって占拠されるようになった決定的な契機は、学生のデモ隊を運んだという理由で四人の同僚を殺された職業運転手の一団の怒りからです。

私は……二〇日の夜からなされた道庁前での抵抗運動を目撃しています。二一日の午後一時頃、無差別の銃撃がはじまりました。一〇歳位の子供が撃ち殺されました(警察署の路地目撃)。また、錦南ホテルのコックは働いているところを殺されました。

私は道庁舎前の広場での市民集会、示威運動に二二日の午後七時一〇分まで参加しました。私は学生指導者たちの完璧な純粋さにショックを受けました。私は自由と民主主義がこの集会に具現化されていたことを誇りに思います。金と名のる学生指導者は市民たちに、かく言う自分さえ北から送り込まれたスパイではないかと疑ってみるべきだ、と力説しました。そして、日本やアメリカの放送を聞

るならば、全ての光州市民が全の支配下におかれておられるかぎり、死者への恥辱と罪の気持から激怒をもって生きてゆくこととなるでしょう。そしてアメリカのとも思ふな友好国である大韓民国は崩壊の道をたどるかもしれません。そのような見通しを持つことはほんとうに恐ろしいことです。

特に私は、『タイム』と『ニューズウィーク』が可能な限りのページをさいて、光州の事態を報道してくれることを望みます。なぜならこのふたつの雑誌には多くの韓国人読者があり、人々は検閲によって切りとられた空白部分の大きさが、私たちの悲劇の大きさを知らることが出来るからです。私たちは、私たちの悲劇と現在の危機をどうしても知らなければならぬ必要を痛感しています。

私たちは、私たちの自由が私たち自身力によって勝ちとらなければならぬことを知っています。しかし、私たちは、SOSを私たちの若き闘士たちのために一〇〇〇度でも訴え、祈らなければなりません。

伝えられるところによりますと、ソウルおよび他の地域から多くの学生たちが、光州地域を包囲している軍隊の戦線を幾度も継続して突破しようとして撃ち殺されたということです。

私たちはまた、死亡した兵士も私たちの同胞（はらから）であることを忘れてはいけません。少数の反逆者によって、な

んと大きな悲劇がもたらされてしまったのでしよう。

このことを報道してくれる人は感謝をささげると同時に、幸運をお祈りいたします。

一九八〇年五月三日 午後六時

民主守護、全南道民総決起文

以下の二通は、光州市内でまかれたビラである。五月八日からの一〇日間、光州市の道庁前広場には連日、数万人の人々、時には一〇万、二〇万の人々が結集し、集会を開き、ビラをまき、語りあった。

四百万全南道民よ、総決起せよ！
全南の愛国青年たちよ、総決起せよ！
全南の愛国勤労者たちよ、総決起せよ！
全南の愛国農民たちよ、総決起せよ！
八〇万、民主市民たちよ、総決起せよ！
最後のひとりで、最後の一刻まで、

闘いぬき、あの憎むべき殺人鬼全斗煥を、凶悪な国民の背信者、維新残党どもをこたごに引き裂いて、デモをして殺されたわれわれの息子、娘たちの怨みを晴らしてやろう！ 共産党よりも極悪非道な殺人鬼全斗煥の私兵、特戦団(空挺部隊)は、われわれの若い学生たちを銃剣で刺し、腹を引き裂いて殺し、娘たちの耳をそぎ、婦女子を素裸にして腹を切り裂いて内臓を道ばたに投げ出し、甚だしくは幼い子供を銃床で頭部を打ち砕いて殺した。道民たちよ！ この痛恨すべき血のにじむ光州市民の憤りを知っているか？ 三千万愛国同胞よ！ 理不尽に殺された者の声が聞こえぬか！ 民主軍隊よ！ 答えよ！ さあ、吸血鬼、殺人魔の全斗煥と維新残党どもを殺すべきか？ さもなくば民主を叫ぶ純朴な愛国市民を殺すべきなのか？ 光州の警察よ！ 答えよ！ われわれの息子、娘たちが皆殺しにされても、われわれに催涙弾を打ち込むつもりなのか？ さもなくば民主市民の側に立ち、無惨に殺されゆく愛国市民を助けるべきなのか？

いまや、われわれは何を案じようか、何を恐れようか！
起ちあがれ！ 起ちあがれ！ 起ちあがれ！ われわれには憤怒と憎しみと救

国民主の一念があるだけである。
全国の市民よ！ 石と棍棒という棍棒を手にして起ちあがれ！
全国の勤労者よ！ あらゆる工具を手に取って起ちあがれ！
全国の農民よ！ 鋤と鎌を手にして起ちあがれ！
三千万愛国同胞よ！ 全て起ちあがるよ！
そしてこの地で決して放棄してはならない、再び奪われてはならない輝やかなしい民族の花を咲かせよ！
勝利の日まで全道民は武器をもって毎日正午を期して、全南道庁前広場、光州公園、錦南路、新光州駅へ集まろう！

一九八〇年五月二一日
全南民主民族統一のための国民連合会
民主青年、民主救国総学生連盟

全斗煥の光州殺りく作戦

ああ！ 民族史の大悲劇よ！
天はどうしてこんなにも無慈悲なのであろうか。
神聖な国土防衛の義務を国民からゆた

ねられた軍人が第二の居昌良民虐殺事件(一九五〇年朝鮮戦争の時に韓国軍によって行なわれた住民虐殺事件)を行なっている。

これこそ全国民が胸をたいたいて慟哭すべき悲劇でなくてはならぬ。

五月一七日の夜中を期して全斗煥とその一派は既存の非常戒厳令をさらに強化し、自分の意にそぐわないすべての政治家、民主市民たちを逮捕、拘束することによって、この国の民衆が期待していた民主主義に対するかすかな希望までも抹殺してしまった。

これに憤激した全羅南道光州の全南大学、朝鮮大学をはじめとし、各単科大学、一部の高校生、民主市民たちは平和的デモを行なった。だが全斗煥らは三万余名の戦闘警察を動員し、市民たちの前後を包囲し、ペッパー・フォッグ(こしょう弾)を撃ちながら包囲網を締め、退路を断った。さらにソウルから急派された三千余名の空挺部隊たちは狂った処刑人のように銃剣をふりかざし、あたかもカボチャを刺すように、手あたりしだい刺しまくりに、血が河のごとく流れる死体を軍のトラックに投げ込んでいった。彼らはそれでもたりずに校門を突き破って襲いかかり、逃げまどう市民たちと幼い女学生たちを銃剣で切りきざんで殺した。

このような蛮行に全市民は憤激し、抵抗するにいたった。しかし、素手の市民たちはかえって銃剣でやられてしまった。孫のような女学生が血を流して死ん

でいくのを見て、空挺部隊の脚ぐらをつかんだ七〇歳の老婆はかえって銃剣で刺殺されてしまった。

男子学生たちに石を運んだ女学生たちは真昼間、市民たちが見守る前で銃剣で切りきざまれ、血を見て叫ぶ市民たちにむかって空挺部隊は、血のついた銃剣をふりかざして殺すぞと叫んだ。女学生たちの服はズタズタに破られ、素裸にされたまま血を流しながらトラックに乗せられて運び去られた。

さらに、市民の抵抗に当惑した空挺部隊は、通りかかる市内バスや乗用者までも止めて若者たちを手あたり次第に軍靴で踏みじり不具にして連行していった。市外バスターミナルでは、このような蛮行に抵抗する市民たちとの戦いの中で空挺部隊の銃剣に刺殺された若者たちの死体が待ち合いに並べられ、まだ片づけられていない死体は、夜遅くまで道ばたに放置されていた。生きのびた青年たちは、じゅうつなぎにされ、道ばたに死体のように並べられていた。この時の空挺部隊の合言葉は「若い奴らは全部殺してしまえ」であった。

全斗煥の親衛隊である空挺部隊によって無惨にも殺りくされた光州市民の悲惨さは筆舌にたくしがたく目をおおおうばかりである。年老いた人たちは異口同音に「六・二五の時の人民軍もこれほどには残酷ではなかった」と痛嘆していた。いま、光州全土では、若いという理由

だけで罪となり、命を失うか、不具者にされる凄惨な運命にさらされている。「光州市民の七〇％は殺してもよい」「犬を何匹殺したのか？」などという言葉が空挺部隊の隊員の間で交わされている。さらに怒りを禁じ得ないのは、このような殺りく作戦の前に警察幹部たちの家族はみんな安全地帯に避難したという事実である。そのみならず、血を流す女学生たちと死体を市民たちが病院に運んで応急措置をほどこすと、空挺部隊は病院の中にまで押し入り、看護婦を殴打し、器物を破壊して、治療さえも受けられなようにしている。ベトナム戦争において良民を虐殺した蛮行の実例を同じ兄弟たちに対して行なうことができるのか。

世界の歴史においても見ることができない蛮行に憤激した光州の愛国市民たちは重武装した空挺部隊に対して素手で抵抗した。

さらに、このような事態を目撃しながらも相変わらず虚偽の報道をしている言論に対する報復として文化放送を焼き打ちし、何力所かの派出所と軍用トラック、ペッパー・フォッグ車を焼き打ちするにいたった。公営のバスターミナルにおいては市民が火炎ビンで軍と対決し、火の海となった。

空挺部隊が犯した蛮行に比べればとるに足りないような消極的な抵抗に対して、全斗煥は市民たちの破壊行為の結果

このような事態が発生したといわんばかりの虚偽報道をしている。

二〇日の夜を契機として彼らは全羅南道内外の全ての通信を遮断し、最後の殺りく作戦に突入した。今や高校生たちすらはいつくばるまでなぐりつけ、全市はうめき声で満ちあふれている。

このような全斗煥の特別命令殺りく作戦で犠牲となった死亡者の数二百余名、負傷者一千余名を数えた。しかし、このような惨状を報道すべき責任のある言論は、一八日から二一日まで悪夢の五日間、一言半句も事実を語らず、全斗煥が作成した原稿をオウムのようにくりかえしながら、光州事態は一部の外部不純勢力の策動であるとのみ報道している。

ああ！ 目の前がまっくらとなり、胸がはりさかれるようだ。これ以上ペンを

カラー・スライド

一九八〇年五月・光州

倒れた者への祈禱

画・富山妙子

カットを提供して下さった富山妙子さんの手で、光州民衆決起をテーマにしたスライドが完成しました。このスライドをもとに、富山さんは詩画集も製作中です。

問合せは左記の火種プロへ

東京都世田谷区桜ヶ丘四一六一二
TEL 〇三―四二五―六〇九五

とって書きすめることすらできない。
ああ、しかし、今は独裁の鎖を断ち切って抵抗の血で染まった光州の空に向かって全国民が涙と怒りをともにしり起ち上がっている。

全斗煥が二日に発表した光州事態に関する内容について幾つかの証言を書いてみたい。流言蜚語と聞いているが、それはまぎれもない事実である。

例えば、
一、四〇名死亡云々という部分については疑う余地のない事実であり、彼らは空挺部隊の銃剣によって白昼下に血を流しながら死んでいった。

二、女学生云々という部分は、正しくは、光州駅前の噴水台に女学生を裸にしたままたてかけ、銃剣で乳房をえぐり殺して殺したことである。

現在の状況は、全光州市民の蜂起で空挺部隊は追い出され、光州市内の全官公署が火に包まれており、全ての交通、通信はとだえている。一方軍隊の進入をふせぐため、市民たちは松汀里の線路を掘りおこした。

全市民たちが叫ぶ合言葉は「死のろ／＼」「殺してくれ／＼」である。

釜山、馬山事態の時には、全羅道出身の軍人たちが投入し、今回の光州殺りく作戦には、慶尚道出身の軍人を投入し、地域感情を誘発させて残忍な行動をとらせることによって、自己の目論見を満たそうとする全斗煥一派の反民族的蛮行

同胞に捧げる文

ソウルにある西江大学の金宜基君は五月三日、民衆の決起を呼びかける約一〇〇枚のビラをまいた後、キリスト教会館の屋上から飛び降り自殺した。以下はそのビラの全文である。

訳責・本編集部

血をよぶ荒れ狂った軍靴の音が、我々が静かに寝こんだ寝室まで入りこみ、我われの胸と頭をふみにじろうとする今、同胞よ、何をしているのか。同胞よ、我われは今、何をしているのか。見えない恐怖が、我われを押しこみ、我われの息の根をとめてしまい、我われの目と耳をふさいで、我われを光る短剣の威かくのもとで連れ歩く奴隷にした今、同胞よ、何をしているのか。同胞よ、我われは今、何をしているのか。

無惨な殺りくで、数多くの善良な民衆市民たちの熱い血を、熱い五月の空の下に流したあの南道の蜂起が維新残党たち

の悪辣な言論弾圧で、歪曲と虚偽と悪意に満ちた虚偽宣伝で塗りつぶされていることを見る同胞よ、我われは今、何をしているのか。

二〇年間、殺伐な銃剣の下で、ありとあらゆる圧制と蛮行をしかした朴維新政権の、その首魁が血を流し倒れたが、その残党たちによって、もっと過酷な弾圧と圧制がなされている。

二〇年間、虚偽の統計数字や似而非経済理論で民衆の生活を、塗炭に追い込んだ結果を、我われは今一部もてるものと、権力をもつものを除いたすべての民衆が、生存権をおびやかされていることを通して、はっきりと見ている。

維新残党たちは、今、その最後のあがきをしている。我われは今、重大な選択の岐路に立っている。恐怖と不安でふるえながら、犬のように、奴隷のように生きるべきか、それとも、澄みきった青空を見上げ、自由市民としてきれいな空気を思いきり吸い、歓喜と勝利の歌をうたいながら生きるべきかの。

また再び、恥辱の歴史を続けるべきか、それとも我われの子孫たちに誇るべく、堂々とした祖先になるべきかの。

同胞よ、起ち上がろう。最後の一人まで起ち上がろう。我われの力を合わせて。闘いは、歴史の正しい方向に向かっている。我われは勝つ。必ず勝つ。同胞よ、起ち上がって維新残党の最後の息の根に決定的な鉄槌を加えよ。

起ち上がろう、起ち上がろう、起ち上がろう、同胞よ。明日、正午、ソウル駅の広場に集まって、この聖戦に命を捧げ

て闘おう、同胞よ！

一九八〇年五月三日

金宜基

2 激動の五月の闘いから

ソウル大学民主化 促進大会決議

この声明は、五月二日、ソウル大学で一万名の学生が参加して開かれた、民主化促進大会における決議である。

一、全国民の自発的参与によってのみ可能な国家安保が、これ以上特定政治集団の政治道具として利用されることを絶対

排撃する。

一、昨今みられる学園内外の問題は、旧体制の必然的結果であり、現過渡政府がこのような問題を根本的に解決しようという姿勢がなく、一方的に国民、学生の正当な要求を暴力、騷擾などと規定しようとするのは、かえって社会不安をいっそう増加させるのもちろん、国家安保を全面的に脅かすものである。したがって、昨今の国内外の情勢と労働界で起こっている陣痛は、民主化日程を短縮し、国民から信任をうけた民主的政府の速やかな誕生によってのみ解決できるものである。

諸問題の本質を歪曲し、平和的解決を制約する非常戒厳令はこれ以上存在させる根拠がなく、またこのようにわれわれの堅い安保意思が立証されたからには、非常戒厳令は即刻解除されるべきである。

一、全国民的な要望をふみにじることなく各界人士たちは、民主化日程の推進に

民主化のための 教授宣言文

この宣言文は、学生の民主化運動に合流して五月七日、ソウルの延世大学の教授五〇〇人が発表したものである。

訳責・本編集部

七〇年代の非民主的維新体制の下で、わが国の大学の自由は、大きくじゅうりんされてきた。画一的で抑圧的な教育風土のなかで、大学は多くの陣痛と受難をなめざるを得なかった。そうしたなかで、われわれ教授たちは、大学教育の使

命をまっとうするため、限られた条件のなかで可能な努力を傾けてきた。

幸いにわれわれは、歴史的転換期を迎え、学園の自律性の回復と韓国社会全体の民主的発展を念願するにいたった。延世大学の学生総会が、最近の混迷する政治難局を打開するため、去る四月二十九日と五月六日の二回にわたって、「韓国の民主化」のための公開討論を通して提起した諸問題は、意義あることとして共感をもつ。

ここでわれわれは次のような態度を明らかにし、学園の安定した勉学と国家の民主的発展をはかる。

- 一、非常戒厳令は早期に撤廃されることを望む。
- 二、国民が望む民主化過程は早期に実現されねばならない。
- 三、言論の自由と勤労者の権益は、いかなるばあいにおいても尊重されねばならない。
- 四、われわれはこれまで学園に戻っていない教授および学生たちの早期の復帰を促求する。
- 五、集休訓練は根本的に是正されねばならない。しかし学生たちの愛国的な国防意識を確信している。

一九八〇年五月七日

延世大学教授一同

民主化促進国民宣言

この宣言は、五月七日、学生運動に呼応して金大中、尹潽善、咸錫憲氏を共同議長とする「民主主義と民族統一のための国民連合」が発したものである。韓国問題キリスト者緊急会議の訳による。

偉大な民衆の時代、民主主義と民族統一の新時代がまさにわれわれの目の前で開かれようとしている。四月革命以来過去二〇年間の外ならぬこの新時代を誕生させるため、血と汗と涙、そして生命さえも捧げるあらゆる困難と犠牲を冒し、不撓不屈の民主・民権闘争を展開してきた各界各層の民主愛国市民たちに訴える。

何が民主主義と民権の確固とした勝利をもたらすであろうか？ 楽観の中で拱手傍観し坐して待つことであろうか？ 否、ますます露骨化する維新残党の独裁延長策動を放置したまま、どうして民

主化が可能だと言えぬのだろうか。悲観の中で諦め恐怖におじけふるえることだろうか？ 否、国民の喊声の中で独裁者が打倒され、維新体制が決定的な破滅の道に入り立った今日、これ以上恐れねばならない何が残っているというのだ。目前に迫った民主主義の勝利を確固として爭取するために、われわれは一切の安易で楽観的幻想と、一切の卑怯な悲観的諦めを同時に捨て去り、断固とした民衆的決断によって民主化に逆行しようとする反民主勢力の策動を、大胆に徹底的に粉碎しなければならない。

主政治発展の日程を妨害するために存在するだけである不法不義な非常戒厳令は、即刻解除されねばならない。

2、過渡政府の責任ある地位にありながら、いわゆる中立を標榜し、民主政治発展の産婆役を務めねばならぬべき立場で維新体制を美化称揚し、維新政権による改憲主導を公言するなど、国民を軽視・愚弄する傍若無人な言動を業とすることに、よって、全国的憤怒を触発している申鉉鎬首相は即刻退かねばならない。

3、金載圭氏の裁判に対する司法権独立を侵害し、中央情報部長職を不法に兼職し、露骨な政治介入を行なうことによつて、神聖な国民全体の名誉と矜持を失墜させる全斗煥保安司令官は、すべての公職から退かねばならない。

4、維新体制に反対し拘束されたすべての政治犯・良心犯は、即刻釈放され、完全に復権されねばならない。東一紡織解雇勤労者たち、東亜闘委、朝鮮闘委の解雇言論人たちははじめ、維新体制の迫害によつて職場から追放された、すべての民主市民たちは即刻復職されねばならない。

5、歪曲報道と反民主的論説によつて民衆の民主化熱望に背反し、維新残党の独裁延長への陰謀に協力している一部言論、放送、企業は、歴史と民衆の峻厳な審判を覚悟せねばならず、もしそれをまぬがれたらならば、今、この瞬間から態度を確実に転向しなければならぬ。

抑圧の代わりに自由を、収奪の代わりに正義を、特権の代わりに民権を、非人間的奴隷状態の代わりに人間的尊厳を、分断の代わりに統一を爭取するためのこの息苦しい民族史の決戦場は、われわれ一人ひとりの断固とした市民的行動を通じた合流を切実に要請している。

この峻厳な歴史的時点に立ってわれわれは次のように宣言する。

1、何の合法的根拠もなく、何の正当な名分も理由もなく、ひたすら維新残党たちを庇護し、言論の自由を抑圧し、民

以上の各項を完全に成就するときまで、我われは引続き、汎農民、汎民族運動を展開するだろうし、これを妨害するすべてを反農民的行為として規定し、これを粉碎することに全力を尽すことを宣言する。

一九八〇年五月一日

すべての良心的言論人たちは、この重大な歴史的瞬間の峻厳な意味を深く認識し、直ちにこの瞬間から決然と立ち上がり、果敢に自由言論闘争を展開することによって、民衆と歴史の側に確固として立つことを求める。

6、維新体制の私生児であり、国民民主権奪奪の象徴である維政会と統一主体国民会議は、自ら解体されねばならない。

7、国民が主体となって民主憲法も制定されねばならないにもかかわらず、国民の意志を無視したまま維新残党による、また別の国民民主権奪奪陰謀を画策しているいわゆる政府改憲審議委員会は解散されねばならず、明白な国民的抗議に顔をそむけ、二元執政府制、中選挙区制を民意として偽装、宣伝するために画策されている政府改憲公聴会は放棄されねばならず、誰もこれに欺されてはならない。

各政党、社会団体は、これ以上安易な幻想にとらわれ、現時局を拱手傍観するのではなく、民主主義のための全国的闘争に決然と合流することを促す。

われわれは各界各層の民主愛国市民たちと共にすべての民主力量を総結集し、維新残党の陰謀を断固として粉碎する民主化運動を果敢に展開することを峻厳に宣言する。

一九八〇年五月七日
民主主義と民族統一のための国民連合

農民宣言

ソウルから届いたものでこの間の農民の運動を伝える唯一の貴重な資料である。

訳責・本編集部

人間的に蔑視され、経済的に搾取され、政治的に弾圧をうけてきたわれわれ一三〇〇万の農民は、民族の主体として、反民族的、反農民的害悪者になりたいずる膺懲と正当な農民権益をかちとるために、次のように宣言する。

一、不正、腐敗した政治権力層と、不正蓄財した財閥および農民収奪の末端機関である邑、面単位の公務員にいたるまで、反民族的、反農民的害悪者の膺懲のため先頭に立つ。

二、米買入れ価格を一九七九年度の生産費五万四九〇〇ウォン（八〇キロ当り）以上に策定し、七五年からの生産価格と買入れ価格との差額をさ

- かのぼって払わせる。
- 三、権力型蓄財者と権力の庇護の下で、財閥などが持っている非農民所有の農地を没収して、農民に均等分配させる。
- 四、非民主的、反農民的農協から脱退すると同時に、この間の被害補償として、農民に融資されたいっさいの農民負債を無効化させる。
- 五、農民の所得免税点は、純収益を根拠として算出した所得額で計算し、都市家計の所得免税点と同一に策定させるべきで、これ以上に賦課された税金にたいしては、納税の義務を負わない。
- 六、豚肉、牛肉などの農産物の輸入を全面中止し、輸入農産物の販売から得られたすべての利益金を農民たちに取戻させる。
- 七、セマウル事業などの名目で強要されるいっさいの賦課に応じない。
- 八、不当な価格操作と低質商品で農民を収奪している肥料、農薬、農業機械など農業生産資材工場を国有化する。
- 九、改憲および法令制定過程に農民も制度的に、比例的に参与し、農民団結権、団体交渉権、団体行動権を確立して、農民権益を実現する。
- 十、農村近代化の促進法を含め、害悪的各種農村関係の法令を改正するための汎農民運動を展開する。

- 以上の各項を完全に成就するときまで、我われは引続き、汎農民、汎民族運動を展開するだろうし、これを妨害するすべてを反農民的行為として規定し、これを粉碎することに全力を尽すことを宣言する。
- 一九八〇年五月一日
- (農民団体)
- 慶南面林農民会
 - 新基農民会
 - 全国農村運動者協議会
 - 全南キリスト教農民会
 - 韓国カトリック農民会
 - 韓国カトリック農村女性会
- (学校)
- 慶北大学
 - 啓明大学
 - 高麗大学農科大学
 - 東国大学
 - 明知大学
 - 西江大学
 - ソウル大学
 - 成均館大学
 - 淑明女子大学
 - 崇田大学
 - 新設專門大学
 - 梨花女子大学
 - 全南大学
 - 全北大学
 - 清州大学

知識人一三四人 時局宣言

忠南大学
忠北大学
韓国神学大学

戒厳令撤廃闘争の決定的局面で出されたもの。二五日のソウル駅前デモでまかれた。署名した知識人の多くは、逮捕を免れるため直ちに姿を隠さねばならなかった。

訳責・本編集部

我われ、志を共にする一三四名一同は、民主発展に対する過渡政府のあいまいな態度、なおいっそう深化していく経済危機、そして民主化と生存の権利を叫び、全国的に激化している学生と勤労者たちの抗議デモに対して強圧的に立ち向かっている当局の無能無策をこれ以上座視することはできない。

今日の難局は基本的には、一九九一年間におよぶ、独裁政権の反民衆的経済施策と

強権政治の所産である。これは、民主発展を阻害する非常戒厳令の長期化で生じた、必然的な事態悪化である。もし、国民が納得しうる発展的措置を過渡政権当局が、一日も早くとらなければ、政局不安に経済的危機まで重ね、回復できない破局に至る恐れがある。これにつき、我われは、今日の時局を根本的に解決するためのいくつかの当面策を提示する。

一、非常戒厳令は即刻解除されなければならない。非常戒厳令は一〇・二六、一二・一二事態など、全く執権層の内閣事情から、宣布されたもので、これは明らかに違法であるだけでなく、政治発展を阻害する最も大きな要因である。

一、崔圭夏過渡政権は平和的政権移譲の時期を今年中に短縮しなければならぬ。その日程を具体的に明らかにしなければならぬ。

一、学園は兵營的性格を一切清算し、

学問の研究と発表の自由は保障されなければならないし、このような自由のための大学人たちの自律的民主化運動は尊重されねばならない。私学に根づいた族閥財閥、教授再任用制など、学園の民主化発展を妨げるすべての独善的運営方式と制度は廃止されなければならない。

一、言論の独立と自由は民主発展に最も不可欠な要素として絶対保障されなければならない。言論人たちはこの間の誤りを反省し、特に東亜・朝鮮の二つの新聞社は不当に解職した自由言論記者たちを全員ただちに復職させなければならない。彼らの復職なくして、自由言論標榜は国民に対する欺瞞である。我われは必要な場合、批判、執筆拒否、不買運動など、可能なすべての方法を用い、彼らの現状回復のための運動を掲げるだろう。

一、職場を失い、街でさまようか、飢餓賃金に苦しむ数多くの勤労者たちのための至急の生活対策をこうじなければならないし、勤労者たちのゆるぎない権利、団体行動権をふくらませるべき保障を確保されねばならない。大企業中心の支援政策で犠牲を強いられている中小企業は、至急に救済、育成されなければならない。低穀価政策で営農意欲を失った農民たちに対する政策的転換がなければならない。

アジア太平洋資料センター (PARC)活動案内

アジア太平洋資料センターは、日本とアジアを中心とする第三世界の民衆運動の結びつきをつくり出すために、七三年一〇月に設立されました。これまでほとんど知られていなかった海外の民間研究グループの研究成果や、民衆運動関係の資料・情報を日本国内に提供すること、アジア諸国における日本とアメリカ合衆国の活動の調査、研究を行ない、成果を内外に発表することを主な目的としています。

出版

『世界から』

国際連帯季刊情報 PARCが一〇年にわたって蓄積してきた国際的なつながりの網の目を基盤として七九年六月、発刊された。特に第三世界の民衆の闘いの中でつくられた報告、資料、分析などを翻訳して掲載する。一部七五〇円 年間購読料二八〇〇円

『PARC通信』

PARCの多岐にわたる活動を国内に

報告していくための隔月刊の通信。

一部送料共一〇〇円 年間購読五〇〇円

『AMP』

Japan-Asia Quarterly Review

一九六九年に創刊された英文の季刊雑誌。アジアにおける日米帝国主義の活動を分析報道し、日本の民衆運動を報告・紹介するとともに、東南アジア諸国の研究者やジャーナリストによる自国の情勢分析や研究調査を掲載する。一部九〇〇円 年間購読料三二〇〇円

『AMP』特別号

『アジアの演劇特集号』 一八〇〇円

民衆のミサ(ジ・エリアス)、醜い

JASEAN(アリア・ミトラス)、

チノギ(金芝河)、人類館(知念正真)

『自由貿易地域とアジアの工業化』

韓国の馬山などアジア各国の自由貿易地域を実証的に分析。 三八〇〇円

『New Asia News』

日本の政治経済の分析、アジアの政治状況などを伝える英文の月刊ニュース・レター。年間購読料四〇〇〇円

一、一人独裁の永久化で不当にも犠牲になっている、多くの民主人士に対する釈放、復権、復職措置をただちにとらなければならない。

一、国土防衛の神聖な任務を遂行している我が国軍は、政治的に厳正中立を守らなければならない。ところが、一人の人間が国軍保安司令官職と中央情報部長職を兼職しているという事実が明白な不法であるので、当然、是正されなければならない。

今日の難局は、国民の自発的合意と民主的手続きによってのみ克服されるだろうということを確信する。我われのこの正当な要求が無視され、強権政治が続くならば、過渡政権は国家を破局に追いこんだ歴史的責任を、免がれることはできないだろう。

(学界・言論界・法曹界・宗教界・文壇 一三四名の署名を添付して)

一九八〇年五月十五日

映画・スライド

●彼らはけっして忘れない

八ミリカラー映画。三〇分。七五〇円
年のタイ・ハラジーンズ工場の女子労働者の自主管理闘争から七六年一〇月の軍事クーデターまでのドキュメンタリー。貸出一五〇〇〇円 価格六〇〇〇円

●トンパン

日本語字幕付 一六ミリ白黒映画。六〇分。ダム建設で追われる、貧しいタイ東北部の農民の姿を描くセミ・ドキュメンタリー映画。貸出一五〇〇〇円(ビデオもあります)

●人を喰うバナナ

日本語字幕付 カラー・スライド一〇〇枚。二八分。その八〇%以上が日本に輸出されるフィリピンのバナナ・プランテーションの実態を現地取材によって暴露する。貸出五〇〇〇円 価格二〇〇〇円

●三里塚

英語カセット付 カラー・スライド一〇〇枚。四〇分。六六年から七八年の管制塔占拠闘争までの三里塚農民の闘争姿を伝える。農漁業を破壊されているアジア人民にも好評。貸出三〇〇〇円 価格一〇〇〇〇円

●しぼられた手の祈り

英・スペイン語 カラー・スライド一〇〇枚。四〇分。

この本についての感想、ご意見をお寄せ下さい。

光州民衆の決起 韓国1980年5月

定価 750円

共同編集 『世界から』編集委員会 東京都千代田区神田神保町1の30 正光ビル4F

市民の手で日韓ゆ着をたぐ調査運動 東京都新宿区百人町1の15の24 OSセンター 210

発行 アジア太平洋資料センター (PARC)

東京都千代田区神田神保町1の30 正光ビル4F TEL 03 (291) 5901

発行日 1980年7月20日(第1刷)

1980年8月12日(第2刷)

印刷 株式会社アール企画印刷

切取線

金芝河の詩を主題とした絵と音楽による日韓民衆の連帯のメッセージ。
貸出八〇〇〇円 価格二五〇〇〇円(英語版) 二〇〇〇円(スペイン語版) 日本語版の製作は火種プロ

Who Owns the Sky?

英語カセット付
カラー・スライド一〇三枚。四〇分。
川崎製鉄焼結工場のミンダナオ島進出を千葉とフィリピンの双方で取材し、公害輸出の実態を告発する。
貸出八〇〇〇円 価格二〇〇〇〇円
日本語版の製作はAVACO

研究活動

日系多国籍企業と第三世界

一九七八〜八二年の五年の共同研究。
日系多国籍企業の第三世界における行動の分析を通じて、第三世界の民衆の生活に与える影響を具体的に調査し、その成果を日本と第三世界の民衆に還元していくことをめざす。総合商社、漁業、林業、鉱業、食糧、金融、自動車、韓国、インドネシア、フィリピン、ブラジル、南アフリカ、女性労働などのテーマ別に小組が結成され、研究活動を行なっている。

『インドネシアの日系多国籍企業——その全体像』 PARC 研究部インドネシア小組 B5版一二四頁 一一〇〇円

- 研究論文(英文) 抜き刷りパンフ
- No. 1 日本の沿岸漁業の実態と漁民
 - No. 2 日本の石油化学産業の混迷
 - No. 3 三菱商事——その多国籍展開
 - No. 4 「開発」という名の日本農業破壊
 - No. 5 日本漁民と原発阻止の闘い
 - No. 6 日本漁業の海外進出の全体像
 - No. 7 日本の公害輸出——マムート銅山
 - No. 8 東南アへの日本経済進出の構造
 - No. 9 日本のブラジル経済進出
 - No. 10 ミンダナオ——開発と「周辺」化
 - No. 11 三井物産——第三世界進出の尖兵
- (各送料別二〇〇〜四〇〇円 以下続刊)

語学塾

日本と第三世界の民衆同士の直接の交流をはかるため、七八年五月から語学教室を開講している。英語、朝鮮語など。

資料サービス

PARCが入手している各国の研究グループ、民衆運動の文献は、定期刊行物だけでも二〇〇種を越える。これらの資料を紹介するため、新着資料の中から重要論文、記事を選び出して、日本語抄録を作成している。PARCでは「資料サービス会員」となれた方に、この「パルク・インフォ・インデックス」(月二回刊)をお送りし、これにもとづいて資料原典の複写サービスを提供している。

資料サービス会費 月額・団体一〇〇〇円 個人三〇〇〇円

国際活動

PARCはACFOD(開発に関するアジア文化フォーラム)、ICDA(開発行動のための国際連絡協議会)などの国際組織に加盟し、その活動に参加、国際会議の組織や交流プログラムの立案、実行に携わっている。七八年五月に行なわれたアジア漁民会議などもその一例である。

賛助会員のお願い

PARCの活動に関心をお持ちの方が、常に支援を寄せて下さる方がたの間に、日常的な結びつきをつくってゆくために「賛助会員」を募っています。ぜひご参加いただき、財政面のご協力をいただければ幸いです。

- 一、賛助会員には「PARC通信」を通じて、PARCの活動の報告をお届けすると共に、「世界から」AMPPO「NAN」をお送りいたします。
 - 一、PARCの行なう行事の御案内を随時差しあげます。
 - 一、年会費を一口二万円といたします。
- 銀行口座 第一勧業銀行神保町支店
普通預金〇一〇一四一六三九九
郵便振替 東京六一一六三四〇三

世界から



第5号発売中!

- 第5号 主な内容**
- ▼光州をしてその意味を語らしめよー韓国民主化闘争の新段階 (李永信)
 - ▼特集 カンプチア75 (79)
 - ▼黒書・ベトナム支配下のカンブチア (S・ヘーダー)
 - ▼民主カンブチアはなぜ失敗したか(ヘーダー氏に聞く)
 - ▼フィリピンバナナと私たち
 - ▼ニカラガ革命の現段階 (J・ペトラス)
 - ▼交流から共闘への道をさぐるーフィリピンからまればとを迎えて
 - ▼世界の底流 他

A5版・104ページ・年四回刊
発行・アジア太平洋資料センター・東京国際郵便局私書箱5250号 電03 261-5901
振替・東京6-1634003
(分局募集中) 10部以上取扱つて下さる方には一部600円でお分けします。(送料別)

国際連帯季刊情報

定価750円(〒120円) 年間2800円(〒共)

第7号 頒価600円(〒140円)

市民の手で 日韓ゆ着をただす調査運動

日韓調査

《特集》日韓条約15年, 光州決起, そしてわれわれ

- 光州決起と80年安保
- 全斗煥体制とは何か
- ドキュメント光州民衆決起
- 侵略の15年と日韓条約体制
- 侵略を支えた右翼的労働運動
- 日韓経済関係の最近の特徴
- 韓国のエネルギー事情

東京都新宿区百人町1-15-24 O・Sセンター210号 TEL 03(367)8438

切取線

申 込 書

を 号から 冊, 申し込みます。

代金 円は, 1. 銀行振込 2. 郵便振替 3. 現金書留 4. その他 で送ります。

御 名 前 (歳)

御 住 所 TEL

御 職 業 (または学校名)

切取線

